

二、煙洲会会員による記念文集編

名教自然の原点を探る

横浜国立大学名誉教授 竹 内 秀 雄

煙洲鈴木達治先生は、大正九年四月、横浜高等工業学校の創立に当り、三無主義、即ち、無試験、無採点、無賞罰を堅持して、自由啓発主義による独自の校風を樹立せんと堅く心に誓った。

この稀に見る独創的な教育者に共鳴して、その理想達成に援助を惜しまなかったのは、原富太郎、中村房次郎、及び井坂孝という浜財界を代表する三人の有力な維持員達であった。

凡そ官公立の学校は、その直轄官庁の監督下に置かれ、学校の運営は全くその指示に従わざるを得ず、独創性の皆無ともいべき無気力なものが一般であった。

そうした時代に学校長の見識を以て、教官の一人一人にその理想を追究せしめて、当時、漸く抬頭しつつあった学生の左翼化を未然に防ぎ、学生の課外活動を奨励して、体位の向上と健全な思想の錬成とを図ったことは、極めて進歩的であった。

工業の技術を専攻する学生に、産業立国のために、哲学による思想の高揚と、内外の状勢を判断する経済及び文化の面にまで関心を持たせるための特別講義などの配慮は紋切型の定まった専門学校の教科課程とは非常に趣を異にしていた。

三無主義の第一及び第二である無試験、無採点は、凡そ今日の試験地獄の学校教育とは雲泥の相違、時代に逆行するものだ一笑に付されるかも知れぬが、そこには、学生の自覚に訴える自治と、教師の側の反省と工夫が期待される。

煙洲先生が同志社の学生時代、西洋史担当の浮多和民博士の試験方法から無試験、無採点のヒントを得られたことは、昭和十二年十月二十日発行の「名教自然」中、「六ッ川夜話」の一つ「恩師の因縁」がそれを証明している。

この浮多先生は、小生の恩師でもある。

小生は大正三年三月、横浜第一中学を卒業して、東京外語のフランス語科に入学したが、折悪しく、同年七月に第一次世界大戦が勃発したため、看板教授ジャクローレ先生が突如御帰国になり、仏人教師がいなくなったため、自分はこの教科に対する関心を失ってしまったので、直に同校を中退、同年九月、早大文学部英文学科への転入試験を受け、同学部の予科に入学した。

そのときの受験科目の一つが偶々自分の最も得意と自負していた西洋史だったので大助かりだった。というのは、当時、自分は、斯界の権威、文学博士箕作元八先生の「西洋史講話」という参考書を愛読していたからであった。

然し初めて教室で浮多先生の古代史の講義を聴いたとき、先生の底知れぬ博学には全く驚嘆した。それに謙虚な御人柄から、先生が実に立派な教育者で、やはり同志社の新島襄先生の流れを

汲む方だと直感した。

昨年、早大史学部講師のN氏から、「本年は、因に浮多先生の五十回忌です」とうかがったときには感無量でした。

煙洲先生が二高の教授時代、詩人の土井晩翠先生の知己として広大な自由主義の空気に触れたであろうことはわが校々歌に象徴されているように思う。

また広島時代には、所謂官僚的教師養成の味気無さに幻滅を感じ、蔵前時代には、手島先生から管理者としての校長学を学ばれ、御自分が最高の責任者となられた横浜時代における実践躬行は、その教育の集大成であり、今日政界における派閥の如きは最も嫌うところ、各科の学生にその協力を切望され、眼を広く海外に向って開かしたことは、明治の先覚者、岡倉天心や新渡戸稲造にも比すべき偉大な教育者だったと私は信じている。

付記

一年余にわたって、毎日新聞横浜版に連載された「横浜今昔」は横浜在住の各方面における代表的人物が自分の経験を通して横浜の今昔を語ったもので、開港百年を迎えるに当り、昭和三十二年十月に刊行された。

恩師煙洲鈴木達治先生は「無試験、無採点、無賞罰」という一文をこれに寄稿されている。先生が八十六歳のときの文章である。

次にその一節を引用すれば、

無試験、無採点、無賞罰の三つが横浜高工の基本方針で、学校制度が変り、単位だなどとうるさいことが要求されるまでこれが伝統だった。試験も賞罰もない全く自由な状態で、すべては学生の自覚に待つわけだが、私生活の上ではいざ知らず、勉強そつちのけで遊びにふけるといった学生は全くなかった。

髪を長くのばす者、短く刈り込んだ者、タバコをすう者、すわぬ者、身なりをかまう者、かまわぬ者千差万別で、専門の学問の他に音楽、文学、哲学とそれぞれ好むところに身を入れる者もあって、学生のひとりひとりがその様子といい、人間そのものといい今時の学生とは比べものにならないほど個性にあふれていた。

鈴木煙洲翁の思い出

元教授 山 田 嘉 久

大正十二年九月一日の関東大地震により、東京・横浜地帯の大半は灰燼かいじんに帰した。私が東大機械工学科を卒えて、横浜高等工業学校に奉職したのは、それから僅か半年の後であった。当時横

浜市の復興は未だ緒にいたばかりで、我が高工もバラック建の粗末な教室でやっと授業が行える状態であった。

ここに六十余年の過去を振り返って、煙洲翁の思い出の一・二を断片的ながら、綴ってその風格を偲ぶよすがとしたい。

一、初対面

就任の第一日、私は恭うやうやしく校長室に着任の挨拶に伺った。全くの青二才の私なのに先生は温顔を以て意外なほど丁寧に対応下さった。その折のお話の概要は「横浜市は震災で惨めな事になったが、必ず復興して近い将来に従前にも増した繁栄を築かねばならぬ」とのことであって、我が高工の事は一言も触れられなかった。私は先生は高工の校長ではなく、横浜市長ではないかとの錯覚に陥った。

二、教育信念

先生は自由主義教育の旗幟を掲げ、一貫して、三無主義即ち、無試験・無賞罰・無採点を信条モットーとされた。これは人権尊重、自由博愛、平等公平の精神に根ざした、崇高で大胆な発想で、教育の本源に徹したものであった。勿論その実施に当っては幾多の困難が伴うことは当然であるが、私は非常な卓見として敬服した。今日臨教審でも甲論乙駁はく、活潑な教育論争が交わされているが、私は先ず先生のこの理想に立ち返るべきであると考えている。

三、メートル法

我が国の度量衡にメートル法を採用する件につき先生は独自の見解を持ち、法案の実施に強く反対された。メートル法そのものの究極的導入には異論はなかったのであるが、これは国民生活に密接な関係のあるものであるから、充分な準備を整えて、長い時間をかけ、大衆の納得の下に、徐々に自然に浸透させるべきであり、官僚の独断で、性急に法令を以て強行すべきでない、一方伝統にも調和し、かつメートル法以外の英・米諸国とも歩調を合わせて進むべきであることも強調された。私も全く同感であり、メートル法は若い世代には教育により漸進的に習熟させるが、中高年層にまで押し付ける事は行き過ぎと思った。

遺憾なことに先生の主張通りには運ばず、為に国民生活に少なからぬ混乱と不便を来たこととなった。今日でも尚尺貫法即ち長さに丈尺寸及び里町、面積に反坪、容積に升合、目方に貫匁等の場合によつては使った方が便利なことがある。それをあの当時、尺貫法目盛の各種計測器の製造並びに販売をも禁じたことは甚だしい暴挙であった。最近に至って永六輔氏等の主唱に依じて、それらの禁制が解除され、行き過ぎが訂正されたことから見ても当時の、先生の良識が如何に卓抜なものであったかが了解される。

思い出づるままに

元教授 竹 内 強 一 郎

煙洲会は五〇〇回を数えるにいたったそうで、よくも続いたものと感心しました。やはり先生の思い出が深かったためでしょう。

わたくしが横浜をやめてからもう五〇年になり、当時の先生方も大方故人となられ、今残っているのは数名になりました。わたくしが横浜にいたのは電気工学科ができるということだったのですが、その後どういうイキサツがあったか覚えませんが取止めになり代って造船・航空工学科ができ、わたくしがいったワケがなくなりましたが、電気化学科なら電気に関係があるからというのでそのままその科に居候のかたちで残ることになりました。

先生は同志社で学ばれたキリスト教と老子の思想とゴツチャになって自由主義というかたちになり、三無主義から「無為にして化す」ということになったと想像します。わたくしは先生とは直接交渉したことは在任中ホトンドなく、あの暗い北側の校長室には一度か二度しか伺ったことはありません。用事があればいつも庶務の小林さん（コバチヨウ）を煩わしました。ところがどうゆうワケか戦後しばしば六ッ川のお宅に伺うようになり、晩年床につかれるまで続けました。

当時学生主事という“赤”対策制度がありました。あるときコバチヨウさんがきて、校長がわたくしに学生主事になれといっているといいました。トンデモナイわたくしは専門のことは学生よりすこしヨケイに知っているので教えているが、学生の思想を“善導”するなどトンデモナイわたくしを善導してもらいたいくらいだといいましたら、主事とは名ばかりで、仕事はなんにもなくてよいという話でしたから、カッテに手続したらいいだろうといいましたので主事にされてしまいました。

それから何回か会議への呼出がありました。一回も出席しませんでした。適当に報告していたのでしよう。やがてコバチヨウさんが現れて、出席しないので文部省からやかましくいつてきてこまるから出席してくれ、といいましたから、なんにもしないでもいい、という約束だから、いかないとトリアイませんでした。しまいには、マー一度出席してみろ、案外オモシロイぞ、というのでソレモソーダ、ヒヤカシにいつてみるか、という気になりでかけました。

行ってみると全国の国立高等専門学校の学生主事がモノモノしく着席し、正面に文部省のオエラガタがすわっています。隣にすわっていた、どこかの主事がわたくしに、あなたは一度もみえませんでしたネ、とアキレガオでいいました。やがて議事にはいり、渡されたものは通し番号のついた秘密文書で、イカメシイものでした。

わたくしはこんな重要らしい会議に連続欠席するようなトンデモナイ主事を任命していた校長

はイササカ当惑したかとおもい、また相当なものだと思いました。そういえばわが校には教育勅語もなければご真影もなかったと記憶します。これは偶像崇拜否定によるものか、校舎がバラックで保管できなかったためか、知りませんが、かたくるしい形式にとられなかったことは、たしかです。近頃教育論議で個性をたつとぶことが議題にのぼっていますが、わが校などはそのハシリだったのではないでしょうか。

処世の恩師

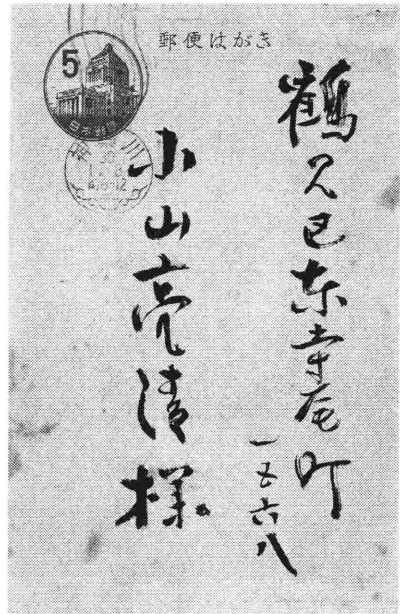
元教授 小山 亮 清

煙洲先生との御縁は大正八年四月先生が科長であった蔵前の東京高工の応用化学科に入学した時から始まる。先生が翌年横浜高工の創設で校長に内定した為秋からは科長の仕事から離れられた。年も終りに近く大学昇格運動が始まり一年生の実行委員に選ばれたので、校内の意見統一の為め先生のような見識高い方の御考へを承る為、先生に御会ひする機会が多くなり、或る時先生が思ひ出されたのが入学試験の折りの面接試験で、それ迄に一応学科で切り捨てに残った者の試問で先生が私の郷里の県の工業現況を問はれたのに対して私の答に興味を惹かれたのか更に世界に

対しての我国工業の将来と云う課題であった。幸に中学の地理教育が経済地理を加味された教養であった為、口頭試験場でお褒めを頂いた事を思ひ出され、今後とも狭い専門学に固執しないで広い視野で勉強が必要で、これに適す者を選ぶ為めには入学試験のあり方から初まって工業教育を考へねばならないと云う御話から、先生は既に此の時点で横浜の自由主義教育の骨格は出来上って居った事を私は信じている。

仙台の大学生活を終へて横浜舎密研究所にお世話を受ける事になったが、所長は富山保先生で煙洲先生の御力で横浜を基盤の松尾工業の援助で運用されて居った人造絹糸の研究も進み、企業態勢に進める段階であったが、当時の横浜は関東大震災の痛手は意外に深く、事業は結局三井の東洋レーヨンの建設の検討に入った状況であった。此の時学校では柏木教授の急逝と云う事が生じ、私が研究所から転勤する事となった。応用化学科には蔵前当時の橋本、堀江両先生も居られ、何か東京の学生々活に戻った様な感じも出た。

煙洲先生は毎週水曜日を面会日とされ学生は勿論一般の方の訪問も受けられて居られた。仙台生活の事を色々尋ねられ有機化学の恩師真島先生とは旧知の仲で珍らしいお話が承はれた。当時理学部に散歩会が月一回あって、学生と一緒に諸先生も仙台周辺の散策をするので、此の間に先生方のお話は勿論外国の思ひ出等で大学の良さを経験したお話から、横浜でもたくさん地方から在学して居るので、このような企ては如何かと御相談した処、御賛成が頂けて横浜高工アルコー会



が発足出来た。

先生の自由教育の良さには疑問の余地はない、昨今の教育の改革の論争では意味がない、煙洲先生が植えつけた自由教育の結果を見れば回答が出る。

誠に私事で申し訳ないが此度の戦争に陰りが出初めの際、先生がわざわざ尋ねて来られ、横浜の有力者の会に出席する様との御話で当時航空本部の参謀部に居ったので、戦況の一部を解説した折、時局は容易でない回収への秋である事を御話して真の非常時を認識頂いた。先生の御郷里愛媛の生んだ日露戦争の立役者秋山兄弟軍人の働きを思い浮べて頂いた折、先生が戦争を始めるのは容易だが日露戦争の終末の時の様な決断の出来る者が出

ないと悲惨と哀れな結果に堕ちて行くのは明かだ。君は軍務にあるので再度戦場に戻る様になるが、決して簡単に命を投げ出さず自重し秋山將軍の様な人の出るのを望むで重大の時だけに努力する様に御話があつて、先生とのきずなは止まっている。

御生前の最後ともなるのは先生から戴いた年賀状の文句である。

名教自然碑の常盤台工学部中央への移転秘話

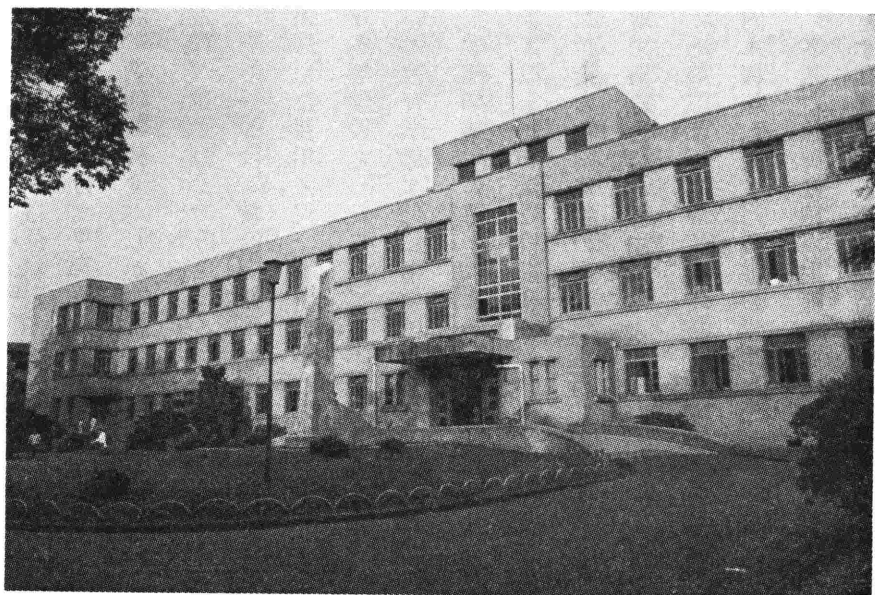
横浜国立大学学長

横 山

亨

弘陵の正門玄関前に聳え立っていた昭和十二年建立の名教自然碑は横浜高等工業学校そして横浜国立大学工学部の象徴であつた。学生も教職員も毎朝登校と共に名教自然碑に対面し、教室へまた研究室へと足を運んだのであつた。また学生は毎年三月この碑の前に集まって記念の写真を撮りそして社会に巣立って行つた。

新制大学として各学部が分散して存在していた横浜国立大学は、昭和四十年頃より一つのキャンパスに統合し一大学として結束を固める文部省の方針が伝えられ、その後迂余曲折はあつたが、本学は保土ヶ谷のゴルフ場跡地に統合することが決定した。大蔵省の方針で当時の全学部の



弘明寺本館と名教自然碑

敷地、建物等を売却し、その費用を新しいキャンパスに投入する閣議決定も一応なされた。しかしこの統合なるものは土地の買収、各学部の建設計画、移転それにその間に大学紛争もあったり、オイルショックも重なったり種々な予期せぬ出来事があったが、日を追うて一步一步統合は進捗した。先ず事務局そして教育学部、経済学部、経営学部が順に移転し、遂に工学部は昭和五十四年八月に殿りとして移転統合を終えるスケジュールが定まった。その数年前より研究・教育を従来通り行いながら、種々遺漏なく移転を行ってゆく工学部あがての毎日が続いた。

その最中もち上ったのが名教自然碑の

今後のあり方であった。工学部長として主任会議において各学科の意向を諮問し、同時に各学科同窓会長に向けてそのあり方のご意見を伺った。しかしその結果は、統合地へ移転すべしが半数、弘陵に残すべしが半数で、正に意見が真二つに割れてしまった。その二つの案は次の理由に因るものであった。

その一つは、統合計画が始まって以来十余年の歳月の間に土地の値上りもあって清水ヶ丘等を売却した費用で保土ヶ谷地区への移転は可能となり、弘明寺地区は運動場を神奈川県に売却し県立高等学校としたのみで、本館のある土地は本学の敷地として残ることになった。その使用について教育学部は付属中学校の移転と養護学校の新設を要求し、工学部は留学生会館の新設と共に工学部卒業生の募金による寄附建物（五階建）の存続等を要求した。この相互につき学部間の半年以上にわたる検討審議の結果、工学部の五階建寄附建物は少々の庭を付して残すことになった。その寄附建物の庭に名教自然碑を記念として残す案である。（これは弘明寺が工学部発祥の地であるという理由にもよる。）

その二は、高等工業学校・工学部を通じての工学部のシンボルとして保土ヶ谷地区工学部敷地内に移転し永久に後進の学生へのシンボルとして残す案であった。

名教自然碑は国有財産として文部省も認めており、移転費用も考慮されてあったが、甲ならんとすれば乙ならず、当時工学部長であった小生としては進退正に窮まった感があった。何れも名

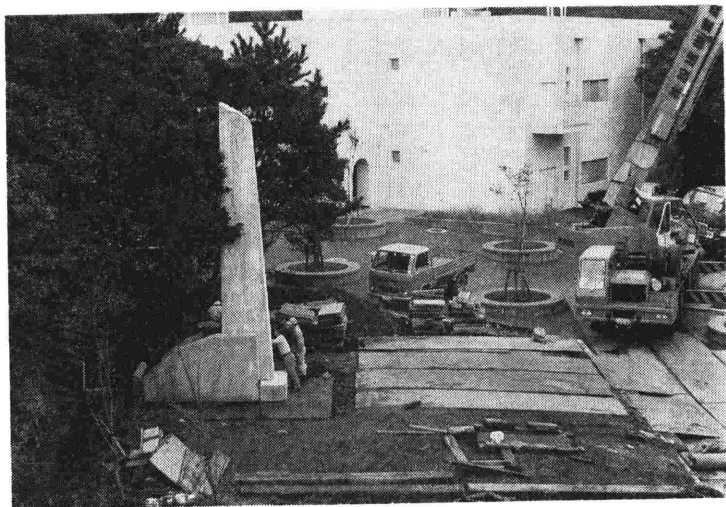
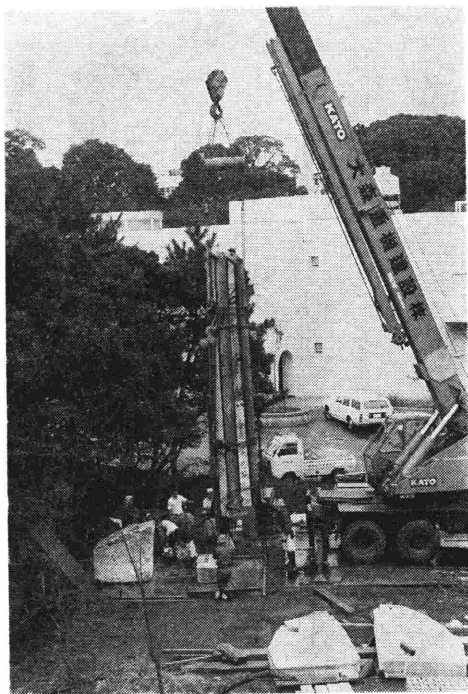
教自然の碑は工学部のシンボルであるという信念から出発した意見であり、頑強にその意見は固執され続けた。

煙洲先生ご自身どう考えておられるか、ご意見をいただきましたたくても先生今は亡い。ここに煙洲会の存在があった。この煙洲会は当時既に四〇〇回を超え菅大先輩を頂点として現在村松幹事がとりしきり連綿と続いている。煙洲先生を憶い偲ぶ各学科および各同窓会を超越しての偉大なる会であった。ここならば煙洲先生のご意志が伝わっている。この会のご意志により方向を定めよう。長い思索の末、私の考えは決定した。後はその方針に従って主任会議、教授会、同窓会の方々には説明諒解を得るだけの重みもあり、小生の自信も湧いた。伺った結果は、一言でいえば「学生の立場から考えて、移転すべきであろう。」であった。その方針は、直ちに全工学部および全同窓会の諒承を得た。

そのうちに次のようなことも次第に明らかとなり、その最終決定への拍軍をかけたことも事実である。弘明寺に卒業生の寄附で建立された材料基礎工学研究施設五階建があり、これを工学部発祥の地弘明寺に残すことを考えており、同窓会の諸氏も強く賛意を表しておられた。しかし現実には世の中そう甘くなくこの建物の工学部のみでの維持管理費は年間一学科の研究費に相当する事も算出され、同窓会としてもその建物を会のものとするにはその土地までも購入せねばならず、庭も考えて当時坪平均一〇〇万円ともいわれる土地を二〇〇〇坪購入することは先ず無理で

安置された名教自然碑

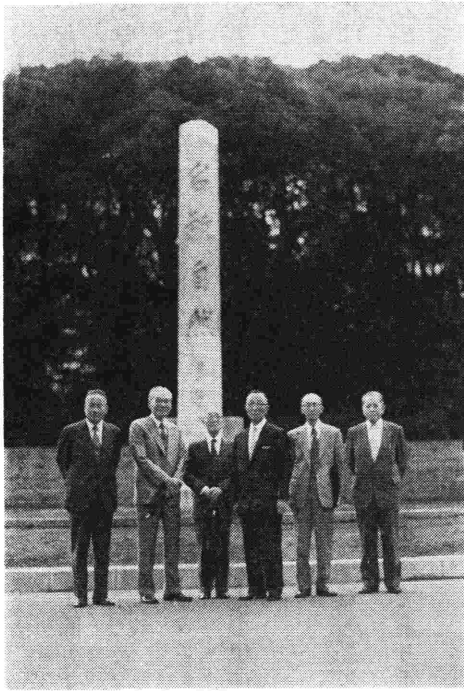
名教自然碑据付状況



あった。全学の使用建物として国際交流会館等として残り国費で賄っていただき乍らその一部を横浜工業会で使用するのが実際上まず精一杯であり、教育学部付属中学の運動場等の用地を考えれば、国際交流会館の有する庭地も広さは相当に制限をうけ、そこに名教自然碑を安置するには狭すぎる。また一方移転したとしても将来の学生達が名教自然碑を工学部のシンボルとして果して考えてくれるかとの不安もあったのである。

移転に際し問題が少なくとも四つあった。

一つ目は移転位置である。これは当時の保土ヶ谷地区統合委員会の設計委員会の設計委員長河



煙洲会の方々と共に

合教授とも何回も意見交換を行った後次のように決定した。「場所は工学部の中央に存在する適當な杜を背景とし弘明寺の碑の設置方向と同じく西を正面とする。近辺に煙洲先生の愛でられた白梅や開学記念樹それに黄桜の木等を配置し環境も十分に考慮する。」

二つ目は基礎土台である。あの高い塔を地震災害でビクともしないよう固定しなければならぬ。この基礎土台は十二分の考慮の後予め保土ヶ谷のその場所に造成された。この費用は予想以上であつた。

三つ目は茨城県産の古生代結晶質石灰岩「寒水石」である名教自然碑の弘明寺から保土ヶ谷への運搬方法であつた。細長い塔である。工学部の象徴であり重い歴史と伝統のある塔である。さらに近くで詳細に点検すると五十年に近い風雪に耐えた歳月は細かいひびを無数につくつていた。運搬に当たつてこの塔の破損は責任者として絶対に許容されるものではない。代替は一切ない。この時点での心理状態は到底言い表わされるものではなかつた。運搬業者は日本通運を選んだ。解体は慎重そのものであつた。四角の塔は解体に際し各角は厚いゴム板で被覆され、その上に巾も縦も十分である鉄鋼のアンクルをかぶせ且つ数カ所をワイヤーで締縛し写真のようにクレーンで運搬可能とした。

四つ目は運搬時間である。業者と相談の結果、早朝夜のとばりが開け初める頃トレーラーで弘明寺を出発し保土ヶ谷に到着することであつた。

以上の移転前作業は着々と進行し、九月はじめ祈る思いの移転は無事終了した。八月中旬工学部が移転を既に終了しており、その折、弘明寺地区の住民には各町内会を通じて移転の挨拶状を配ってあった。その文章は末尾に示す通りである。ここに工学部の真の移転終了を告げる名教自然碑の大移転が無事終り一応ホッと一息ついたことも事実であった。後は極めて慎重に保土ヶ谷地区内での建立の作業が続けられ中秋になって現在の位置に漸く無傷のまま再現されたのである。

今、名教自然の碑は厳然として工学部の中央に常緑の杜を背景に立ち、卒業生も屢々訪れ学生も記念の写真をこの前で撮影し社会に巣立っていつている。煙洲イズムは自然のままここに息づいている。

付記 工学部移転に際し付近住民に送った挨拶状の全文を以下に示す。

工 学 部 移 転 ご 挨拶

暑さ厳しい候となりましたが、皆様にはお褒りもなくご健勝のことと存じます。

扱て、横浜国立大学は各学部統合して名実共に総合大学となるべく保土ヶ谷区常盤台の旧程ヶ谷ゴルフ場跡の敷地に新校舎を建設しておりましたが、お蔭様でこの程全部完成しました。従いまして本学部はこの夏期休暇中に弘明寺から常盤台の新校舎へ移転することになりました。

大正9年弘明寺のこの地に横浜高等工業学校が創立されてより、今年で60年となります。この長い期間、戦前には横浜高工として、戦後には横浜国立大学工学部として、広く地域社会のご理解とご支持を得て発展してまいりました。特に私どもは地元の皆様方の常にかわらぬ暖いご後援をいただいておりますことを心から感謝しております。

この間、学生のための下宿を提供されて、多くの学生の面倒をみて下さった方々や商店の各位のご協力に深謝しております。

戦前、「浜の早慶戦」として全国的に名を馳せた高工、高商野球定期戦で地元の方々から頂いたご声援は、いまま卒業生間の語り草として生きております。また、常時約3,000名の教職員、学生が弘明寺に通勤、通学し、このため道路の交通事情その他で地元の皆様には何かとご迷惑をおかけしたものと存じます。さらに10年程前には、全国的に吹きあれた大学紛争の影響を本学部も受けて、地元の皆様方に多大のご迷惑をおかけしたことも、大へん心苦しく存じており、改めてお詫び申し上げます。

いろいろと尽きない思い出がございますが、先ずは、ここに長い年月に亘ってご愛顧を賜わりましたことを心からお礼申し上げますとともに皆様方の一層のご発展とご清栄をお祈り申し上げます。

本来ならば参上して謝意を表すべきではありますが、書面をもつてご挨拶に代えさせて戴きます。

昭和 54 年 7 月

横浜国立大学工学部長

横 山 亨

米国の占領政策をくつがえした笑顔

煙洲先生と自由教育

機械大正十三年 鳥 谷 寅 雄

私達の年代、つまり現在八十歳を越えた人で、専門教育即ち当時の日本の高等教育を受けた人々なら、この標題を見れば必ず横浜高等工業学校と、一個の人物が脳裏に浮かぶであろう。

こと程その初代校長鈴木達治先生、つまり煙洲と号した老人の教育方針は、当時日本国内の教育界を風靡したものであった。

因に私は横浜高工機械工学科の第二期卒業生である。その頃まだ煙洲老人は発洩たる壮年であった。老人と呼ぶには程遠い年齢であったが、私達は誰でも鈴木先生を煙洲老人と尊敬と親愛の情を込めて呼んでいた。

教え子であった学生達は勿論のこと、多少でも教えを受けた人々は、先生に対して非常に強烈な印象を持っていた。今でも私の記憶に鮮明に残っていることは、第一期卒業式の時のことである。

卒業生代表が型通りに先生方に感謝の辞を述べ、式は進行して煙洲老人が校長として今後の処

世の訓辭を述べられた。

その時、私は自ずと衝動にかられ校長先生に対し、「私に一言先生のたゞ今のお話に自分の考えを付け加えさせて下さい。」と手を挙げて希望した。煙洲老人は一寸驚いたようだった。だが直ぐよろしいと言われ、御自身のからだを少しずらせ、私が壇上に立てるようにして下さった。私はそこで校長の居られた場所に立ち卒業生一同に対し、「たゞ今、校長先生が本校の自由教育の真髓を一生忘れずに自らの修った学科に囚われることなく才能を伸ばすべきだと言われたが、私は先生が校長としての立場から学科のことを重視してそう言われたので、先生の御真意は何科などというような狭い考えではなく、広く自分に向いたことをやりなさいというように採るべきだと思ったので、一言この点を付け加えさせて頂きます。」と言った。

煙洲先生は終始ニコ／＼され一言も言われなかったが、私にはその時の笑顔が、生涯忘れることなく灼き付いている。

これから述べる話もこの笑顔のあらわれの一つである。

本年四月の或る日、たま／＼会社に出ることもなく家でブラ／＼していた時、「速達」の声が出たので顔を出すと、一通の手紙を配達夫が差し出した。その手紙は私宛のもので、差し出し人は通商産業大臣村田敬次郎と、特許庁長官志賀学と連名になっていた。

ところが現在の私は役所とは全く関係のない国際ビルサービスKK代表取締役会長である為、

どこの役所との関係もない。

強いて関連性を見出すならば、日本海外協会連合会創立者としてその常務理事であったこと位であろうか。

当時外務省にあった移住局係官から、昔で言えば勅任待遇の扱いを受けていた。

併しその後、連合会の特殊法人化を外務省が望んだ為、私はこの措置に賛成しかね、一応任期満了と同時に移住の仕事から身を退くことにした。

次に中南米視察の時必要性を痛感して、海外技術生育成の仕事に着手したいと石橋湛山先生に援助を願った。その結果通商産業省から資金を頂き、海外技術者協会を設立しその専務理事となつたのである。これは三十八年迄続け、以後はその相談役となり、これは現在もまだ続けている。

これ以外役所との関係は今のところ何もない。従つて役所から呼び出しを受ける心当たりも全くないので不思議に思いつゝ開封してみた。そして意外な内容に又もやびっくりした。何故ならば、それは工業所有権制度百周年記念式典への招待状だったからである。

そこには式に天皇陛下の御台臨を仰ぐ予定であるから、行動は規定通り正確にしなければならぬ等通常の会合にはない厳格な雰囲気を漂わせる文面がしたゝめられていたのである。

私は昭和二十年敗戦をマライ半島タイピンで迎え、英軍の捕虜としてレンパン島で約一年間過

し、二十一年夏に日本に帰還した。

兎に角、通産省に復帰したいと考え同省を訪れた。幸いにも人事一切を処理する秘書課長の仕事を、満洲国当時産業部で大変親しかった始関君が担当していたので彼に会った。

彼は抑留生活によって、身体が大変弱っている私を眺め忙しい仕事は無理だと見たようである。丁度、当時互いの昔の上司であった奥田新三氏が特許局長官をしていたので、早速同氏に頼み特許局にポストを見つけて貰った。

特許局に出るようになってから間もなく、私は総務部指導課長に任命された。

こゝは特許事務に慣れぬ私でも出来るような仕事であった。何故ならば、それは発明指導など常識判断で出来る事務が主であったからである。奥田氏はこの仕事が私向きであるとみたのであるのか。私をこの課長に任命する時、「君は横浜高工を卒業し、高文試験行政科に合格したという異数の経路をたどっているから、特許局のこの課は、発明特許という技術を理解し法律に準拠した措置を講じる技術と法律とを織り混ぜたような事務が多いから君には向いていると思う。

私は近く通産省の次官に転ずるので、その後任に通産省技術畑出身で、長官としては始めて技官の久保敬二郎氏が栄進されることになっている。その補佐役として君が適任と思うから、一生懸命彼を補佐するように。」と言っておかれたのである。

こういう経緯から私は久保長官には特別な感情を持っていた。

ところが久保長官が就任されて間もなく、私に電話があり、極秘の話があるので直ぐ来るようにとの連絡があった。早速長官室に出向くと長官の顔色が只事ではない。

どうしたのかと私は懸念しながら尋ねた。長官は、「実はG H Qの担当官である某中佐から私に内密の話があった。それによるとG H Qは、我が国の発明奨励制度に対し反対の意向を持っているので、日本に於ける発明の奨励は富国強兵のスローガンに一致するものとみなし、我が国の帝国発明協会を通じ色々の民間団体に補助金の下附があるが、今後は武力国家への道としてかようなことは止めなければならないということだ。この件は既に大蔵省にG H Qから申し渡しがあったようだ。

又人事についても、総裁高松宮、会長藤山愛一郎の御二方共戦犯かこれに類似した扱いを受けられるらしい。又名称も帝国発明協会という帝国を冠するのは芳しくないとのことだ。従って従来のように民間の発明への援助として支出されていた補助金は、今後G H Qから支出を差し止められることになり、長官として発明への奨励は手の施しようもないことになる。その為にこのG H Qの意向を上手く他に転換させることが今後局として肝心なことだ。何か方法はないだろうか。君以外にこういうことを相談出来る者はいないので何とか頼むよ。」と言われた。そしてもしこのG H Qの意向が外部に漏れると、特許局内部が動揺するのみか、今後民間に於ける発明への熱意を失わせることになり、研究心や意欲も衰えさせてしまうのではと心配され、青ざめた顔

で話された。私も長官の話を聞きながら全く同感だったが、意外なことだったので咄嗟に言葉もなかった。

そこで兎に角考えさせて下さいと引き下がったが、長官は事は急を要するのだと言われた。その時ふと先日電車で乗り合わせた青年達が、米国の雑誌の話をしていたのを思い出した。それによると来年はエジソンの百年祭を大々的に行うというような記事が掲載されていたようだ。私は一瞬これだと思った。

エジソンには米国のみならず、世界の人々が恩恵を受けている。勿論日本に於いても然りである。そこで我が国の民間が主体となってエジソンを称える講演会とか展覧会を開催するよう發明協会が主動力となって計画したらどうか、という提案をGHQに特許局を通じ提出してみたらどうか。そうすればGHQとしては自分達の日本人への施政が、米国のエジソンへの施策という形で、両国の重要な具体策として歓迎されるのではないだろうかと思いを出した。

すると久保長官はそれは名案だと喜び、早速その話をGHQにしたいと思うので、私にも同行するように言われた。

私は勿論、直ちにお伴した。GHQ係官に長官はその案を話された。係官は長官の話を大変喜んで、早速その場で大蔵省の係官に電話をし、具体化を速やかに図るよう指示してくれた。私はその具体案を長官の指示に従い作成した。

もう、とうの昔のことなので記憶も定かではないが、全国主要都市十数ヶ所に特許局から十名近くの人員を派遣し、同時に地方庁や商工会議所などからも係員を選定して各地で数名づつ講演させ、又会場には生活用品を米軍などから借り出し、展示会も出来る限り各方面で行うという案だ。

そしてそれは早速具体化され、私も暫くは多忙を極めた。やがてそれが一段落したのと私の身体も漸く回復してきたので、是非以前従事していた貿易関係の仕事をしたいと思い又もや始関君に依頼した。

運良く横浜にある関東地方貿易事務局次長のポストが空席であったので、早速そこに転勤を頼み実現した。

一年半程すると多少顔が港関係に利くようになった。その時丁度衆議院選挙が行われるのとこのだったので、私はこれに出馬することにした。しかしこの選挙は素人の集りばかりだったので落選してしまった。

これを機に私は官界を去ることにし、捕虜中に考えていた海外移住促進の運動、即ち、日僑論（後述）に猛進することにした。

外務省とは意見も異ったが一応の成果も得たので、予て中南米旅行中に痛感した海外青年の訓育を始めようと通産省にその必要性を説き、海外技術者研修協会を設立させ、私が専務理事とし

てその訓育に携わるようになったのである。

そして私は感ずるところがあつて現在の会社を設立したのである。しかし協会に於いては、まだ相談役であるので多少の縁は残っている。従つてもし役所からの呼び出しであるとするれば、この関係の他なかうと思つた。

然るに開封してみても驚いた次第である。それは前にも述べた通り移住とは何の関係もない工業所有権制度百周年記念式典開催の通知であつたからである。

それは当日天皇陛下の御臨席があるので出席して欲しい。又会場の国立劇場周辺は交通規制がある為、その積りでいるようにとの内容であつた。

当日は発明をした著名な方々及びその子孫も招待されるとのことである。

私はその点から見れば何等の功績もない。あるとすれば占領されていた時、GHQ係官の発明阻害の考えを食い止めたこと位であらうか。私としては当然のことをした積りであつたが、無事をこゝとする官吏の考え方からすれば、却つて余計なことであり危険と言えば危険なことであつた。

それを敢えてしたのは、学生時代煙洲老人に注ぎ込まれた自由の精神が強かつた為であらうと、先生の笑顔を想い出しつゝ感謝している次第である。

尚、百周年記念参加者として、高橋是清氏の胸像を鑄込んだメダルを頂き、良い記念品として

持っていたが、先日孫の尚道が米国留学に赴くに当たり、記念品として大切にしておくようにと言ってプレゼントをした。

日 僑 論

敗戦後、レンパン島での苦しい捕虜生活の中で、日本再興の途を求めていた私は、マライ華僑の根強い生き方にヒントを得て、国際的に生きる新しい途として、日僑という考え方に悟入した。

引揚げ後、海外移住協会を設立、新しい移住運動を始めたが、中南米各地にも同志が生れ、運動は軌道に乗った。ところが、講和成立後、外務省が移住運動に関与し始めたため、当時日本海外協会連合会常務理事であった私は、当局と意見を異にし、遂に昭和三十三年移住関係から手を引くこととなった。

これより先、昭和二十七年より開始した中南米への計画的移住は順調に進み、当時失意にあった日本人に多大の希望を与えたが、新しい移住が新日本のため、世界的な基盤造りを目指すという、その奥にひそむ基本意識が悟られず、一般の関心はうすかった。しかしやがて貿易が盛んとなり、日本は経済大国などといわれ出すと、これで大丈夫と安心したようだ。だが、その後始まった石油ショック等資源保有国の厳しい態度で、この華やかなイメージの空虚さが露呈され、今

日、日本人は資源小国の悲哀を身にしみて感じている。

しかし私は思う。日本人口の優秀性を發揮して、今こそ、宇宙船地球号の一員としての使命を自覚し、地球上に眠る資源を人類有用の財と化すため世界各地で活躍すべきだ。

永遠の栄光は、この日僑運動によって与えられる事を確信する。

.....

これは筆者が、昭和五十二年七月に、勸人口問題研究会の発行する人口ニュースレター No. 4 に
“日僑論”として提言したものである。

自由啓発

電化大正十三年 石 井 欣之助

大正九年四月に横浜市大岡町に開校された横浜高等工業学校の校門をくぐった学生で現存している人の数も大分減ったようだ。私が属していた電気化学科では三十五人中七人（二〇％）であるが他の科も大同小異であろう。この中で煙洲会のメンバーは幾人か詳にしないが去る六月一日の五〇〇回の祝宴への出席者は阿部、河村両先生と私の三人であったような気がする。

開校の一年前であったと記憶するが受験雑誌に鈴木達治先生の「新設される横浜高等工業学校」という文章が載っていた。雑誌の名はハッキリしないが「受験と学生」でない方の雑誌であったことはたしかである。バックナンバーがあるかと思って国立国会図書館で調べて見たが受験雑誌は大正八年までバックしない内に消えてしまっていて確証する術もなかった。私がこの二頁の文章に敢えて拘泥するのはその内容が新鮮で魅力に富んでいたように思うからである。自由啓発とか無試験とかいう文字があったかどうか全然記憶がないがこの文章によって横浜高工への私の志向が決定的になったことはたしかである。私は自分で受験雑誌を買って読む程所謂受験勉強らしい勉強はしなかったので、前述の雑誌は弟が持っていたものを横取りしてパラパラとめくっているうちに得た知識であった。又私は中学時代に一年病氣休学して卒業が遅れたために大正九年受験となったが、もし大正八年に卒業していれば横浜高工受験ということになったかどうかかわからない。人間の運命というものは不思議なものである。更に私は入学後もう一度病休して第一回卒業生になり損ない菅要助君と同級になった。もし私が第一回に卒業していたら煙洲会に入っただろうか。

さて今教育論議が盛んである。偉い教育専門家非専門家が集まって（集められて？）色々もみあっている。いいことか悪いことか知らないが教育に素人の私には教育は会議を開いて決めるべきものではないように思われて仕方がない。放送や新聞などによって耳に入ってくるところによ

ると、論義の中心課題の一つに自由教育（教育の自由化）があり、自由ということばがいか悪いかがあるようである。自由という文字を避けて個性尊重という文字にするとかいう話を聞くに至っては噴飯ものである。こういう話を聞いていると何を今更という感じがする。この問題はわれわれの周辺で六十年も前に実験済み（解決済みとは云わない）であると私は考えるからである。こういう時期に煙洲会の第五〇〇回が開かれたことは意味が深い。

私は今までに二回程煙洲先生についての所感を述べた。今それらをふりかえって見ても根本に於て私の考えは変わっていないようであるが、今回は自由啓発ということに関し少し考えたことを述べて見たい。前述の如く大正九年に新設された横浜高工へ相当の *Vision* を持って入った。波に高工の徽章が出来た。やがて「希望の光うららかの」で始まる校歌が発表された。しかし段々単純に喜んでばかりいられなくなった。私に一番重くかぶさって来たのは自由啓発ということであった。簡単に云えば自由啓発とは「自発的に勉強せよ」ということであろうと私は解釈した。中学時代は勉強の目標には教科書があり試験があり席次があり、これらによって一応自分を評価することが出来た。それらが全部外されて自由に勉強せよと云う。参考書というものが示されたが、旧制中学の英語力で英文の参考書を読みこなすことは至難の道である。

私の中学の一年後輩で入学した一人は（温厚なまじめな人であった）G. H. Newth の *A manual of chemical analysis* を読めと云われてこれは大変だと前途に絶望を感じ自殺してしまったとあ

とで聞いた。この本の冒頭にある Preface を読んでその次に Chapter. I. という順に読まなければならぬとしたらこのようなことはあっても不思議ではない。私などもずいぶん気の小さい眞面目な人間であるが自殺しなかったところを見るとわからないところは飛ばして適当に「自由啓発」したと見える。兎に角英文参考書の読み方に就いてアドバイスして呉れた先生も生徒もいなかった。どこまでわかったのか理解出来たか周囲の生徒はどの位学力があつてどの位わかつてゐるのかわからない。これでよくも進級し卒業したものであると今ふりかえって思う次第である。

上級になって雑誌会ということをやつて呉れた先生があつた。一度演者になつて発表したことがあるが先生から「わかつてゐるのか」と聞かれたがどう返事してよいのか分からなかつた。わかつてゐるのかわかつてゐないのかわからなかつたからである。

このように自由啓発主義は私には圧力であつたが、兎に角自由であり無試験であることは結果に於て私個人に取つては有難かつたことになる。その一つの産物であるかどうかはわからないが私は恋愛を経験しこの方面では相當に自由啓発出来たと思つてゐる。又健康もどうやら回復した。

ところで話を自由啓発に戻そう。私は今回「啓発」ということばを少し調べて見た。身辺にある辭書に當つて見たが啓発ということばは元來他動詞で、啓蒙と同じく他を啓発するか他から啓発されるということはあるが、自ら啓発するという自動詞的な使い方はないらしい。自分で自分

を啓発する enlighten oneself というように再帰動詞的に使うのなら納得出来る。煙洲先生の啓発もおそらくそういう意味で使われたものと思う。私は漠然とそういう意味に解していたようである。しかし今改めて考えて見ると自動詞的に使っても悪いという理由はないようだ。先日野上弥生子の展覧会を見ていた時、彼女が明治初年に上京し入学した明治女学校の校風には自由に啓発するという文字が自動詞的に使われていたと思った。

その他私の頭の中にはかの有名な橋本左内の啓発録がある。その終りの方に「因りて一本を淨写し、愛友子乗^へ及び弟持卿^{しけい}に示して啓^け発^{はつ}の地^ちとなす」とある。この文章を伴五十嗣郎氏は訳文で「この本は溝口辰五郎と実弟の橋本琢磨を啓^け発^{はつ}する意味でこれを二人に与えた」となっている。（講談社学術文庫）すなわち「啓^け発^{はつ}の地^ちとなす」という原文をこのように他動詞的に解しているが、自ら啓発する資料となす、すなわち発奮材料とするというように自動詞的に解することも出来る。寧ろこの方がこの場合本当ではないかとさえ私には思われるのであるが如何であろうか。

ところで先般の第五〇〇回煙洲会の折鈴木洋二さんの御好意で色々珍しい遺品を見せていただいたがその中に「自由教育の思出」という原稿があった。（この文章は鈴木さんのお話によると昭和二十九年に活字になっているとのことである。）この原稿をパラパラとめくっている内に終りの方に「啓発という文字は……を緩和するためにあとから付け加えた」という意味のことがあった。これは大変珍しい又興味ある発見であったと思う。何を緩和するためかハッキリしな

かったが「自由」という文字に対し矢張り世間一般から批判があったものと思われる。それら批判の鋒先をかわす意味が「緩和」という文字で表わされたのではないか。これを見ていつの世も同じだなと思った次第である。

さてそろそろ結論に近づけなければならないが、先日ラジオで臨教審談義を聞いていたら中高一貫教育ということが出て来た。私はこのことは始め聞いたとき忠孝一貫教育と聞こえたのである。明治生まれの私の頭はそれ程古いのであるが、最初述べたように自由教育がよいか悪いかなどということはいくら論議しても結論など出るものではないと私は考えている。自由がよいと思う人は自由主義を標榜する学校を作ればよい。そこへ入りたい人は入ればよい。不自由を常と思えば不足なしと云った大先輩もある。自由では不可と思う人は不自由な学校を作りそこへはその校是に共鳴する人が入ればよい。

自由と放縦とはちがうということはよく聞くがこれは詭弁だと私は思う。自由ということばの意味は大変広い。放縦もその中に含まれる。自由にして置けば放縦になる可能性はあると思う。さて私自身の場合自由啓発は具体的にどういう結末になったであろうか。これに関し一部分は既に開陳したと記憶するが、まずまず辛うじて合格者（適）の末席を汚すことが出来たと思っているのだがこれは自惚であろうか。

煙洲会に御列席の諸公は最もよく煙洲先生の教育方針を理解し自由啓発の精神を活用して社会

生活に於ても立派な実績を収められた方であろうと推察される。自由主義とか無試験とかいうことをやった学校が他にあったのかどうか知らないが、横浜高工でも煙洲先生の教育方針を理解しないまま卒業（？）した人がいるのではないかと思われるのである。しかし中には社会に出てから煙洲先生の教育を思い出し奮発した人もあるかも知れない。

大隈は早稲田を、福沢は慶応を、新島は同志社を夫々の主義に基づいて設立した。これら私立学校の全部が建学の精神を生かして運営されているかどうか知らないが私立学校存立の意義は十分あると思う。ただこの頃私立学校に対する官公庁からの補助金が問題になっているようであるがおかしなことである。官公庁から補助金を貰うということは私立の独自性を失うことである。もし学校が足りないから補助するというなら買収してしまうべきだと思う。

このように考えて来ると、文部省の予算を使いながら恰も私立学校であるかの如き自由教育という御自分の納得のゆく方針で学校を運営されたということは、教育というよりこの上ない贅沢な道楽をされたものだと思ふべきである。

最後に私は先般の第五〇〇回煙洲会の席上見せていただいた遺品のうち、勅任官の大礼服を拝見して先生の漢詩を思い出したということを付言したい。左記は私が煙洲会四〇〇回記念出版物に書かしていただいた「煙洲思想のバックグラウンド」の中の一節であるが、大礼服を連想させるに十分ではないかと思ひ敢えて再録させていただいた次第である。

奉賀御即位大典

登極大儀 挙旧京　　満都抃舞仰休明

昭和冠帯悉朝集　　三十六峰雲作纓

登極の大儀旧京に挙ぐ

満都抃舞して休明を仰ぐ

昭和の冠帯悉く朝集す

三十六峰雲纓を作す

履歴によればこの年（昭和三年）先生は従四位、大礼服に勲三等瑞宝章を佩し、威儀を正して参列されたと想像される。（昭和二年二月陞叙高等官二等とあるのは一等の誤りであろう。）この年先生五十六歳、得意思うべしである。東山三十六峰は雲纓（冠の紐）を引くが如くに見えた。青年天子の前途が祝福された。

戦時中の煙洲会

応化大正十五年 平 田 義 雄

当時の煙洲会の会場は専ら横浜銀行集会所であった。同集会所は横浜に於ける名士の方々の懇談の場であり友好の場であつて勿論会員制であつた。

煙洲会が会場として使用を許されたのも専ら煙洲先生の御斡旋であつた事は云うを俟たない所である。

集会所の管理人で安藤さんという初老の方が居られ種々便宜をはかつて頂いたのである。

集合の趣旨を尋ねる憲兵の質問等にも適当に返答をされて吾々には少しも迷惑はかからなかつた。

又空襲警報等の時は安藤さん自身で夫々適當の処置をして呉れて私共はいろいろ御世話になった。仲々酒好きの老人であつた事は今でもほほえましい憶い出である。

太平洋戦争がはじまつたのはいうまでもなく昭和十六年十二月八日であり、煙洲会が川崎で第一回が開かれてから第三〇回を過ぎていた。当十二月の例会ではどんな演題であつたか記憶にな

いが赤ら顔の精力的な先生のお顔が目に見えて来る。

煙洲先生の煙洲会によせる愛情は非常のもので、元氣そのものの先生はいつも先着されたものである。そして署名簿に月日と第何回煙洲会と其の日お話をされる主題目を書かれて皆の集まるのを待たれたのである。

集る人達も殆んどの会員は漸く勤務先の中堅幹部として職場をはなれられない年齢の人々ばかりであつたので常時十人前後で、従つて先生のお話は親が子供をさとす如く真にしんみりと子供たちに伝わつたのである。

当時のお話の内容の一例をあげると、

第三十九回	昭和十八年	三月二十五日	必勝不敗
第四十三回	昭和十八年	七月二十九日	一億敢戦
第四十六回	昭和十八年	十月二十八日	友愛
第四十八回	昭和十八年	十二月二十三日	光輝の歳晚
第五十三回	昭和十九年	五月二十五日	壮心不已煙洲自賛
第五十九回	昭和二十年	一月二十五日	戦友精神

「註」以上は第三十九回より第五十九回まで署名簿の内容を拝借いたしました。

戦況がだんだん悪くなるに従い物資も不足勝になり先生の好物の葉巻も事欠くようになり、会

員一同如何にして葉巻を入手するかに苦勞したのである。大先輩が非常に苦心をされて入手され、先生に差上げた事もあって、その都度あの温顔がほころびるのを見る会員の喜びは非常のものであった。

尚、昭和二十年五月二十七日の横浜空襲以来昭和二十二年十一月の再会まで休会の止むなきに到ったのであるが、その間の先生の御日常については会員一同の心配する所であり、会員のうち都合のつく方々がその都度先生の御自宅へ伺いお慰問申上げたのである。

横浜空襲で銀行集会所に保管してあった煙洲会関係の書類もすべて灰燼に帰し、太平洋戦争勃発前後の先生の御心境を書類として保存出来なかつた事は甚だ残念であった。ただし、前述した昭和十八年三月二十五日第三十九回より昭和二十年一月二十五日の第五十九回までの分が記録として残ってゐる事が、当時の書類保管の責任者としての筆者がどうしても分らないが残っていた事は煙洲会として非常に貴重なものである。

何れにしても戦時中の先生の御活躍は大変なもので、必勝懇談会をはじめ煙洲会等々に於て戦時の国民のあり方、物資の使い方など必勝条件に就て多数国民を御指導下され、機会ある毎に説きかかせて自らも戦時下の国民の一員として行動せられた事は吾等ひとしく非常に感銘した所である。と同時に先生の御健康であられた事について新たな感激を受けるものである。

煙洲先生の想い出

機械大正十五年 荒 牧 寅 雄

新しく設立された横浜高等工業学校は、自由教育を標榜した学校であると聞いて、其の独特な方針と、海外門戸の横浜に飛付いた。前の私立三井工業学校は「自覚努力」で九州では有名な教育者であられた、神作浜吉校長先生に仕込まれたあとだけに、特に其のコントラストの妙に引き着けられるものがあつた。

三無主義は後に知った事であるが、のんびり出来そうである中に、何か隠された個性の発揚を感じられた。学校に入っても春風駘蕩としていた。前の学校で努力した甲斐があつて、一年生の時は何も目新しい授業はなかったから、楽々過ぎたのは専門学校で教わる微分、積分等も一応習っていたからである。之が自由をはき違えた元になって、勉強はしない、酒を飲んだり、テニスをやって遊んだり、果ては尺八を吹いて名古屋高工の音楽会に迄遠征したりした。

万事が斯様な具合で、横浜出身の可能性を自ら持っていると信じ乍らも、先生に呼ばれて質問を受けたりした事もあつて、漸く卒業することが出来た。然し愈々卒業式の間際に、煙洲鈴木校長先生に呼ばれた、何でも四人位であつた様に思う。校長室で整列した我々に煙洲先生は厳に云

われた。「諸君は目出度く卒業することになるが、軍事教練に殆ど出ていない、之では皆と一緒に卒業は出来ない、本来なれば、半年位卒業延期をして教練をやって貰わねばならないが、之は学校も困る、そして諸君も亦困ると思う、そこで今回は特に大目に見て皆と一緒に卒業させるが、それで事が済んだ訳ではない、卒業証書は貰えても社会はそうはいかない。此の事を心に深く銘記して、その分社会で取返さねばならない。」と懇々と諭された。私達はその温情に感激した。将に一生の転機であった。時に大正十五年三月であった。

私は是はいかん何とか勉強せねばと、貝島君の世話で東京帝国大学工学部の内丸最一郎先生のもとで、其の内燃機械の助教授をしておられた隈部博士の門に入った。そしてそこで満二年、隈部先生は当時日本唯一の自動車工学の先駆者であった。之が私の一生かけて自動車に縁を持った切っ掛けとなった。想えばあの時の煙洲先生の御言葉、それが本当の教育の何かを知らしめ、生涯かけて大きな指針になった。誠に有難い事であった。

（昭和六十年六月）

煙洲先生へのおねだりのアレコレ

応化大正十五年 山 口 辰 男

もう五、六年も前になるが、学会があつて滋賀大学と福島大学の各経済学部にてかけた事があつたが、その時に驚いたことは、大正時代の校舎が残っていたことだった。大正初期、時の中橋文部大臣が一拳に旧制高校と高専を増設したが、その時の校舎の一部にお目にかかったのである。当時増設の学校の校舎は皆同じタイプの様式だったのである。我々の横浜高工の校舎も地方の高商の校舎も正門から入って見られるたたずまいは皆同じ、階段教室の位置も同じだった。

大正十二年九月一日の関東大震災で倒潰焼滅してしまった横浜高工に、その年の春に入学した私たちは一学期間は高工最古の校舎生活を送った事になる。私たち以後の期の人々は昭和八年まではスレート葺き天井つきのバラック生活、それ以後の諸兄たちが本建築の鉄筋コンクリ学舎生活ということになる。

今に残る前記両校のやや薄暗い階段教室の堅い長椅子に腰かけてみると、その頃の事などがまざまざと思い出されて懐かしかった。

文部省が、横浜高工は名古屋に避難しろというのをはねつけた煙洲先生は、罹災市民とともに

焦土に立ちあがるのだと、焼けトタン板を拾いあつめ、苦勞して自腹まできられて集めた木材とで急いで掘立て小屋さながらの校舎をつくり上げ、災後一カ月たった十月には早くも再開のビラが市内に貼り出された。確かに市内に住む学生は少なかったが、高工がどの学校より、最先頭に授業再開をはじめたということを知った市民には大きな感動を与えたことと思う。

この校舎、そういつちゃあ何だけど、焼けて穴だらけのトタン板で天井なしだから、日では暑いし、雨の日ともなれば雨もりと雨音とで講義も聞えなくなるという体たらくのバラックだが、この校舎で学んだ人たちは今日集った人たちの中でも十人とはおられないのじゃないかと思われる。

この頃の煙洲先生と学生との面会日は根岸芝生しばふの御自宅で水曜日だった。押しかけた私達は、シガラの香りの浸み込んだ書斎のソファに座らされて、先生の名調子「名教自然」の御談議を拝聴できるのが楽しみであり、時期によっては、先生手づから栽培になるメロンの御馳走にありつけるという無上の光栄と感激に酔いしれることもあった。このメロンの味は、楊貴妃が南国から運ばせたという龍眼りゅうがんや荔枝れいしにも勝る価値が感じられたものである。

先生の自由教育論に酔いしれた耳にも漸くタコができるようになってくると、こんどは学生側からいろいろとおねだりがチョイチョイと出てくるようになる。何しろ学校もできたての頃なの

で、部活動がいっせいに蕾を持つようになったが、設備も道具も何もないという状況下ではただ腕だけが鳴るしかない。不振の域を出なかった。

私も音楽とか新聞とかポートやヨットなどをやっていたが、せい一ぱいおねだりを申し上げた口である。そんな或る日の面会日で、「焦土から立上るには勇氣と努力とが必要じゃが、同時に他にもうひとつ慰安ということも必要じゃ、それも眼や口だけでなく耳を楽しませることが必要じゃ、それには音楽に限る」と仰言った一言を私はわが意を得たりとほくそ笑んだ。すでに先生は第二次大戦後の「リング可愛いや」の効果を予知されていられたのではないだろうか。おねだりはまず「せめてピアノの一台でもあれば……」から始った。「そりゃエエ事じゃ、どうせ買うのなら何時までも残るそしてどこへ出しても聞かせても自慢できるものを買ったらエエのじゃ」との続いてのご託宣、私どもはそれこそ天にも昇る心地で、御氣持の変わらないうちと急いで今まで行きつけの馬車道の西川楽器店（今日の日本楽器の前身）に相談を持ち込んだ。「それは丁度よござんした。近くドイツからベヒシュタインのフルコンサート・グランド・ピアノが一台入ってくることになっていますので、これではどうでしょうか。このピアノは上野の音楽学校にあるのと同じものです」というわけ。値段はと聞くと五千八百円だという。当時では煙洲先生の年俸をはるかにオーバーする高い値だ。早速先生に申上げると「そりゃエエ、そんなピアノなら横浜市の誇りにもなる。どんな外国の一流音楽家がやって来ても自慢できるし、弾いてもみたくなるじ

やる、すぐ手を打ちなさい。支払の方はワシに任せなさい」との願ったり叶ったりのご託宣。おまけに「ピアノばかりじゃ一人しかやれんからナ、ついでに他の大勢でやれるオルケストラの楽器なども揃えたがエエじゃろ」「その代わり、学校の儀式の時や、野外演習の時などに演奏して皆んなを鼓舞せにやいかんヨ」に我々一同はまさに驚天動地、結局、西川からブラスバンド一隊分、イタリーからプレクトラム系の低音楽器（マンドローネとキタローネ）などを揃えて取寄せて貰った。

確か、大正十四年の十月二十九日（天長節祝日、学校の記念祭の最後の日）の音楽会（といってもバラック講堂でだ）にベヒシュタインの弾き初めを当時一流のピアニスト山田菊江さんやって頂き、われわれはブルーダニュープを演奏した。この日には市内の有名人たちを煙洲先生のお名前で御招待申上げたという震災後第一回の第一級の音楽会だった。尤もピアノ以外の演奏は我々素人のガチャガチャ集団が相つとめたのが玉に大疵きずという次第ではあったが。

つい先頃、今年（六〇年）の十一月十六日に横浜市文化賞の授賞式が行われたが、受賞者のお一人に横浜国大名誉教授の奥田良三先生がおられた。震災後伊太利から帰られたばかりの先生はわれわれの為に演奏を下さったが、その時、唄われたムツリニ行進曲の勇壮さに若い我々は凄まじい程の感動を受けた。この曲に、阿部先生の作詞を拝借して唱われたのが、今はどうか知らないが「青春の力満てる……」つまり高工応援歌二号なのである。

サテ、それから五十年たった今日、ベヒシュタインはその後どうなったであろうか、戦後にまで生き残ったとは聞いてはいたが、程ヶ谷の国大の講堂に残つてるとも聞かされてはいるが確かめてはいない。近く国大へ出かけて安否を尋ね、「その功績を讃え、老後を慰めたい」とは思っている。

まだ、楽器の納入が終らないうちに、私はまたまたおねだりをしたのである。

「先生、校歌にもあるように、横浜は港に立地し、それも工業港として活動し、七ツの海に製品を押し出す抱負を示してますネ、その様な抱負を持つ学校にボート部がないのはおかしいです。その抱負を生かすには海と親しみ海を愛し海とともに活躍しなければなりません。それにはゼヒともボート部が必要だと思えます。否無くてはならない部だと思えます」と小理屈を並べた挙句、「Y校にだってボート部がありますのに、我が最高学府たる高工にないのはおかしいです。第一引ケ目を感じます」とつけ加えた。しばらくたって、「各科（当時機械・電化・応化の三科だけ）に一艘ずつ造ったらエエじゃろ」ということになり、これまた過分の喜ばしきご託宣、そして先生曰く「世界に雄飛するには三大海峡を通らにやならん。スエズ、パナマそしてマゼランと命名しよう」と艇のキールも据らない内に名まで決められてしまった。私たちは毎日のように本牧の岡本造船所に通って、手伝ったり（イヤ邪魔だったかも知れぬ）したものだった。進水

後、何度か東京湾の横断をやったり、江戸川を遡^{せきやど}って関宿から大利根を下って銚子まで遠航して、銚子の大神で銚子っぱずれの大騒ぎを演じた事も未だに忘れられぬ思出となっている。

こうなると、私も何とかこの三海峡を通らぬまでも一ぺんは見ておきたいと思っていたが、戦後になってから、アフリカ縦断旅行の折にスエズを、昨年（五九年）の南米旅行の折にパナマを、さらにパタゴニアへ行った折に南下してフェゴ島からマゼラン海峡を眺めることができた。その時、感慨にひたりながら、「先生えらそうな事を述べたあの当時のことをごかんべん下さい」とつぶやいた。この頃、私達がオール持つ手に唄っていたのが「ビワ湖周遊の唄」だったのである。

先生の「高工という技術の学校で学んだからとて、必ずしも技術者にならねばならんなどとはいわん。何になってもエエんじゃよ、名教は自然なのじゃ。思うところに向かって努力をすりゃエエんじゃ」とのお言葉を私たちは肝に銘じて努力をしてきたと皆思ってるに違いない。私も技術からすっかり離れた仕事の分野に入り込んでしまっているが、先生のお教えは体现しているんだと信じている。

先生のお墓と私の亡妻の実家の墓とは筋向いの近所づきあいの間柄にある。亡妻の実家の墓には岳父と私と同科同期の親友だった平島鑑三もともに眠っている。日野に行けばいつも、「煙洲先生今日は」が習慣となっている。

お墓といえど、三年前、上州安中の信越化学の工場へ出かけた折、同町にある同志社大学総長の新島襄先生のお墓に詣でた事があったが、煙洲先生とキリスト教主義の新島先生との関係はどんなもんだったのだろうかいくら考えても今だにわからない。どなたかご存じの方がいらしたらお教え願いたいと思ってる。

煙洲先生と横浜高工弓道部

建築昭三年 矢 崎 忠 実

煙洲先生の思い出のうち、私の最も印象に残るのは弓道場を作る時のいきさつです。私が横浜高工に入学したその年（大正十四年）電化二年の鈴木俊雄先輩（ご卒業後早逝される）から勧められて、一緒に町道場に行きましたのが私が弓を手にした始めであります。

鈴木先輩の御熱意で、先ず弓道倶楽部を作りました。次には、学校内に弓道場を作ることを考えて、校長の鈴木天羊達治先生にお願ひすべく、根岸の校長宅へ夜をねらって何回か陳情に足をはこぶ事になりました。独りでは心もとないので、いつも同期の佐々木武雄君（弁論部委員長、関東雄弁学生連盟等で活躍、六十年三月二十日急逝）をさそい、一緒に先生の講話を聞きながら

の陳情でした。

とうとう、校長先生から「ポケットマネー三十円を出すから三十円で出来る矢場を作れ。」とお言葉をいただきました。そして材木屋は学校の隣の出入りの業者を指定して下さいました。これで御承知の学校敷地の東南の隅にあった弓道場が暮から正月にかけて完成した次第です。

次は、誰に習うかです。鈴木先輩が八方奔走された結果、早大、蔵前などの学校や法曹界に係の深い方で、人格者で最も腕が良いとの事で、浦上栄先生にお願いして下さいました。この交渉は鈴木先輩が全権委任で一切を引受けてやって下さいました。

年はかわって十五年の春、音楽部、剣道部、弁論部なども寒稽古を始めるとのことでしたので、弓道場も完成したので早速、寒稽古を始めましたが、部員はほんの数名でした。

寒稽古中のある日の早朝、校長先生が弓道場に突然、現われたのには全くびっくりいたしました。

当時、毎週一回以上、必ず全校生徒を講堂に集められて、長い時は四時間位の長きに亘り、校長先生直々のいろいろのお話をして下さるのが習わしでした。校長先生のお話があると一人残らず講堂に集合してお話を静聴するのが楽しみでもありました。

その中で私が最もうれしかったのは、弓道部の寒稽古の実情視察のため、根岸の御自宅から冬の寒い早朝に、六時頃からはるばる徒歩で弘明寺の新設弓道場までお出かけ下さって、部員が元

氣に寒稽古をしている模様を実視せられて、次の全校生徒集会（修身の時間）のときのお話の中に、弓道部の寒稽古の状況を御披露して下さった事です。お蔭で弓道部（正確には翌昭和二年二月に正式に弓道倶楽部から弓道部になり初代委員長に就任）が一躍、全校で有名になった事は私にとって一生忘れる事ができません。

当時は軍教が盛んでしたので、校長先生は来るべき湘南地方で行われる野外演習の足ならしの為、根岸のご自宅から学校まで早期散歩を兼ねて、寒稽古を視察に来られたとお話でした。

また、前後しますが、道場開きには、浦上栄先生の矢渡式が行われました。そのことは、浦上栄先生述、浦上同門会編、「行射六十年」（昭和三十年三月八日刊）に次のように記述されています。

「大正年間にもう一つ特筆すべき事は、十五年春、横浜高工に弓道場が新設された時、依頼されて、日置流正式の矢渡式を行った事です。これは非常に難しいもので、私は此の時始めて正式の矢渡式を行ったので特に記憶に深く残って居ります。」また、次に、「日置流の矢渡式は、主宰者、神官、射手等相会し、先ず神官（浦上先生）が修祓の祝詞をあげ、次いで鳴弦、四方詰を主宰者が行い、最後に祭神八幡様に供えてあった弓矢を射手に渡し、その弓矢で矢渡を行うのです。射手は三人（当日は早大生、高橋義三氏、村上久氏、松野二男氏）で初め七本、次に五本、最後に三本、計十五本を射て此の式を終るのです。処が此の中一本以上あたらずぬ時は矢渡式を終

了せず、再び五・五・三の引き方で行うのです。射手は繰越の射様と云って、最初大前が一本引くと最後の的前(関)に来る。二番は大前に、三番は二番に進み順次引く事になるのです。此の時は最初の七・五・三で無事、式は終了しました。」とあります。

「行射六十年」は、その序によりますと、「日置流弓道範士 浦上栄先生が七十三歳の高齢に達せられるまで、弓道を通して幾多の門弟を世に送られ、道の普及発展をはかれた記念に、六十年に亘る弓の生活を学生に口述されて、筐底深く秘して居られたものを、浦上同門会がそのまま埋れてしまうのを惜しみ、同志に頒布しようと、御許しを得て編集したものである。」と記されています。

煙洲先生によって出来上ったわが弓道場において天下の名師範、浦上栄先生のご指導をいただいて育まれ、青春を弘明寺のおかに過した旧部員は、弘陵弓友会というOB会をもち、毎年合会を開いております。

聞く所によると、高工弓道部は昭和十五年第四回全国高工弓道大会で団体優勝を果し、また横浜市内四専門(高商・Y専・横専)リーグ戦には昭和十三年に優勝し、対高商定期戦は昭和十七年まで十五連勝を続けるという成績を残して居る由です。

また、浦上同門会弓道大会にはOB有志により弘陵弓友会チームを編成して毎年出場しております。

煙洲先生の思い出と共に、わが母校弓道部の今昔のご紹介をさせていただきました。

煙洲会五百回の記念を祝福し、益々盛大に末永く継続される事と、先生の御遺族並びに会員諸氏の御健勝を祈念しまして筆をおきます。

(高工弓道部初代委員長)

想い出は千々に遠くまた近く

建築昭三年 網 戸 武 夫

「君よかったね、退学届はわしの机の中で眠らせてあったが、いまそれが陽の目を見ることになった、よかったねえ……」

ベルが鳴ったばかりの、騒々しい新学年の授業始めであった。逆光でシルエットしか見えないが、明るい教室の入口から、短軀童顔の煙洲校長が、参観かなと思う間もなく、真直ぐに、最前列の机に倚った私の傍へそと、耳元に紫烟の香り温い口を寄せての言葉であった。艶々した童顔が私の瞳の中で、にっこりと笑っていた。

「デッサンもだが、君の英語は満点だったよ」と、私に返す言葉もない戸惑いを残したまま、黒い影はすでに扉口の外に消えていた。

これより一年前のことである。正確には大正十三年春四月、私は電氣化学科に合格しながら、新設の横浜高等商業学校にも合格して、その入学式に出掛けて行く、ところが、そろばん袋を抱えた学生達の姿を見るや、何の躊躇もなく回れ右をして山を下りる。その足で煙洲校長に直訴である。勿論初対面の校長に入学を許可して欲しいとの、手前勝手を絵に描いたような次第。しかしこの時煙洲少しもさわがず、「合格発表はわしの方が一日早いんじやから、田尻君に頼んで君が払込んだ入学金は、わしの方へ廻すようにするから、心配せんでもよい……」

渡りに船とはこのことである。ところが、あろうことか、折角入学させて貰った電化の教課が、やっかい学生に、一学期半ばにしてボイコットされる仕儀となる。それには次のようなすばらしい誘惑が迫ってきたからである。煙洲校長が政治力のすべてを賭けて、創学を勝取った建築学科が来年四月に開校するという。しかし転科は許されないと知れば、退学届を校長の前に届けるしかない。こうして二学期だけは終了するようにとの勧めに従って、翌年の春早々に、退学届はようやく受理されたのであった。一介の浪人に成下ったやっかい学生は、美術学校と同列の、建築学科独自の才能テストには、到底合格の見込みはないと判じられたから、駄目の場合には元の鞘に収めてやろうとの深謀から退学届は煙洲校長の机の中に、秘かに眠らされていたのであった……。

「煙洲漫筆」に詳しく語られているように、建築学科々長中村順平先生は芸の人、その火と燃えさかる教学の精神は、時代におもねず、時代を超越した英才教育に徹した、そのために、時代の複合潮流に巻込まれ、学園の教授連、学生達を貫通する、中村追放のゲバ騒動に発展する。

この時、私というやっかい学生は、このゲバの渦中に自ら突入して、一步も退くことなく、ゲバの襲撃で顔面にメリケンサックの暴力を浴びるも屈せず、教学の師中村先生を守って煙洲校長と三位一体となって、浜の一角に、「建築とは構成の芸術である」との学燈を灯しつづけたのである。

「わしの在る限り、中村君は君達と共にある、心配せんでもよい」と、セルの単衣に湯上りの血色のよい童顔を、肘掛椅子の大きさは不釣合の、丸いだるまさまに似た体軀にのせて、ゲバの最中に毎夜のように、このやっかいな学生の訪問に、いつに変わらぬ慈愛を注がれるのであった。根岸の入海に上げ潮の波が、夜目にも白く砕ける帰り途のこの折々の幸福感は、いまだに瞼の底に鮮やかである。

いま齢八十に達して、懐旧の想いがこの師の上に及ぶときほど、私の心の温められるものはない。学園生活は三年（私は幸せにも四年である）と限られている。たかが三カ年間の邂逅だと言われたくはない。名教自然という煙洲鈴木達治の精神は、私の生涯を律し尽したと言ってよい。

そのために、否それだから、私のライフワークである近著、芸の師中村順平の生涯、「情念の幾何学」の中に、人生の師、煙洲先生を偲んで多くの頁をみたしたのである。

懐旧の念を、この師の上に揺曳する時ほど出会いという輪廻に、心うばわれるものはない。煙洲校長が中村先生に送った林語堂著の「生活の発見」(The Importance of Living) 上下二冊は、やっかいな学生であった私の書棚に煙洲先生を偲ぶよすがとして、いまに健在である。

(網戸建築設計事務所々長)

鈴木達治煙洲先生の思い出

電化昭四年 西 尾 清 治

私は関東大震災の直後の大正の末期に入学、昭和四年三月に卒業致しました。

私の遠縁に当る大和田健一君(当時応用化学)が、煙洲先生の自宅横浜の根岸海岸通りに住んで居りました。

当時の煙洲会は自宅の応接間で行はれ後に山、前に海の絶景の場所でありました。

私は岩手県一ノ関市の生れで山や川に囲まれた所で、海は珍らしく、遠縁をたどり、大和田君

の家に下宿致しました。煙洲会は実にこの先生の応接間に於て始まったものです。私は先生の自宅でお話しを承る光栄を得たのであります。

大和田君は残念なことに健康を損い、卒業せずに他界致し誠に残念でした。先生は近所の生徒大和田君のために学費の援助をされました。

私が在学中は弘明寺の校舎はバラックでした。そして中央に教官食堂があり、この教官食堂で煙洲会が行なわれました。先生の御方針は先生と生徒が全く一体であることを示されました。

弘明寺の名教自然の碑は現在の常盤台に移されました。弘明寺で卒業した有志はこれに反対致しましたが、時の流れと共に拡大する学問と同じで先生の名教自然の碑は横浜国大の教育・経済・工学等の多方面の学生に教訓として永遠に学校に学ぶ者に偉大なる教訓として残されることでしょう。

私の孫は横浜国大金属工業科の大学院に在学中であります。

私の孫にまで名教自然の教訓を賜りましたことはこの上もない有難いことです。

私の生涯を通じて煙洲先生の横浜国大に学びましたこと無限の喜びと感謝で一杯です。

(西尾工業株式会社会長)

楽しかった学園生活の思い出

応化昭五年
秦^{はた}

克^{よし}
夫^お

横浜高工を受験しようと思い急遽上京した。時は昭和二年三月二十二日であった、教務課に行き入学願書受付の件をお願いした処三月十八日に締切られてあったが特にお願ひして受け付けて貰った、官立であつても無理でない限りは規則にとらわれず融通のきく良い学校だと思った。若しこの入学願書を受け付けて頂けなかったら私の人生は大きく変つていたであらう。

翌三月二十三日から入学試験が始まり二十七日は合格発表となり大変嬉しかった。早速学生帽を買つてハンチングと取替えて郷里出雲に歸つた。

入学して学校に入ると門柱が二本立っているばかりで守衛所は無く直ぐ割に大きく広がつていた花壇があり、続いて運動場がある、その向うに平屋建ての大きい古びたバラックが三棟並んでいるこれが吾々の学舎である、学校らしくない学校であつた。

最初の授業は鈴木達治校長先生の訓話であつた。講堂で一年生全員（一四五人）集つてお話を聞いた。「この学校は試験はしないが皆んながどの程度に覚えてるかを見るためにテストはする、また賞も罰もしない。この学校は人間を養成する処であつて技術の知識のみを詰める処では

入學受驗心得者		試驗日期	
三月廿三日	午前九時	午後一時	英語
三月廿四日	午前九時	午後一時	物理
三月廿五日	午前九時	午後一時	化學
三月廿六日	午前九時	午後一時	第一自在畫(隨意)
三月廿七日	午前九時	午後一時	第一自在畫(隨意)
三月廿八日	午前九時	午後一時	身體檢查
三月廿九日	午前九時	午後一時	口頭試問

(昭和二年)

橫濱高等工業學校學業試驗票

入學受驗票

應第一四五番

此受驗票ハ持参セサレバ試験場ニ入ルヲ得ス
此受驗票ハ必ス机上ニ置クコト

領收證

一金五圓也

但檢定料

右領收候也

泰克大殿

橫濱高等工業學校主任收入官吏
橫濱高等工業學校書記 大山 泰 翠

2.3.22 領收

ない。一人前として認められる様であれば卒業証書を与える、各人は夫々自由であるから相手の自由は特に尊重しなければならない。」と云うお話があつて気持ちが楽になった。

ある日天皇陛下を横浜港にお迎えに行くことになり校旗が持ち出された、その校旗は白木綿に縦書きに横浜高等工業学校と書かれた至極簡単な旗であつた、丁度桃太郎の鬼ヶ島征伐の時の旗の様であつた。沿道の人々特に子供達ちは指差して大笑いしていた。鈴木校長は旗に金をかける様な虚栄は考えられなかつたようだ。

諸先生の内には甚だ変つた先生が多かつた、

(一) 大西先生（修身）

一年生全員が講堂での講義である。生徒は講義をまともに聞いても面白くないからがやがやと騒いで先生の云うことは全然聞えないが、それでも一人講義を続けられた。一般には出来ない我慢強い先生であつた。

(二) 池内本先生（物理）

窓外はクローバーが盛り上る新緑の頃「今日は薄暗い教室の中に居るのはもったいない、クローバーの上で講義しよう。」皆喜んで窓越しに外へ出てクローバーの上で講義を受けたことがある。亦或る寒い冬の日ストーブが焚いてあつた日にテストがあつた。白紙を各人に配り、問題を黒板に書かれた。先生は生徒が書いている答案用紙を何返か見て廻つていた。時間が来て答案用紙

を集めるとそのままストーブに放り込んでしまった。皆びっくりきょとんとした顔をしていたが先生は「君達の書いている時に採点してしまった。」皆は呆氣にとられた様な複雑な顔であった。

(三) 渡辺先生（数学）

数学の好きな人は少い。暑くなるとだんだん居眠りが始まる。先生は「夕べ遊んだな。」と云い乍ら白墨を投げ皆が目を覚ますまで投げつける。暑い日は毎日の様であった。

(四) 鈴木京平先生（皮革）

「私の講義は皮だけでは面白くないから肉をつけて話をする」と皆んなが皮肉屋だと云う。「先生の云う通り仲々の皮肉屋であつたが講義は上手で大変面白かつた。

(五) 石橋湛山先生（経済）

先生は講義の冒頭に「諸君は技術者であるから自分で偉くなりたいと思う者は私の講義を聞くが良い、自分で偉くなりたくない者は私の講義を聞かなくて良い、決して落第点は付けない。」と云われた。大変真面目な講義であつた。後に総理大臣になられてびっくりした。

(六) 三井先生（独逸語）

独逸語の時間は土曜日だった。土曜日は半どんである。先生は生徒が少々がやがや云つても気にしないで生徒の方は余り見ないで講義をしていたので生徒達は午後の遊びのための回覧板を廻したものである。

亦或る時伊勢佐木町を友達五人で散歩していたら三井先生にばったり会った。先生はお茶でも飲まうといわれるので野沢屋に入った。ジャンケンでメニューの順に取らされた。ライスカレーを食べている者も居れば、コーヒーを飲んでいる者もいる。またお汁粉を食べている者もいた。仲々茶目気たっぷりの面白い先生であった。

(七) 今井先生（無機化学）

先生は分析室の担当であったから我々の担任の先生でもあった。講義は上手で一番真面目な先生で最も尊敬していた先生であった。

(八) 吉野中佐（教練）

陸軍派遣の将校と云えば偉ぶって怒りっぱいのが常であったのにこの先生は柔和で笑顔が多く、生徒がいたずらして他人に迷惑をかけても跡始末を全部自分でやって生徒には何も云わなかったので好かれていた。上大岡の方へ演習に行った時も甘柿を沢山取って食べた。富士五湖で野営すると唐黍を沢山取って焼いて食べた。大変旨かった。後始末は総て先生がやった。

(九) 津田先生（酸アルカリ肥料）

就職幹旋の担当でもあった。昭和五年は大変な不景気でもまだ不景気が進行しつつあった。先生は「諸君の内で京浜間に就職が出来たら私の首を差し上げる。」と豪語されたが、怒れない愉快な先生であった。

京浜間にての就職の実績は日産化学―王子、森永製菓―鶴見、昭和肥料（現昭和電工）―川崎、明治製菓―川崎、コロンビヤ―川崎、と五人であった。応化の卒業生の日本人は三十人であったから六分の一に過ぎなかった、外に支那人が五人居た。

(H) 飯塚先生（体育）

官立専門学校以上で体育で教授になられた方は飯塚先生一人だと聞く。先生は勉強と同等に体育を尊重しなければならぬと常に話していました。その頃は先生の手前味噌としか思っていなかったが、現在は入社試験に体育の試験を取り入れる会社もある時代となった。今から考えると先生には先見の明があったと思う。

私は最初丘の中腹にあった第一寮に入寮した。最初は同級で柔道の主将だった宮永君と一緒にいたが、彼が退寮後はラグビーの好きな一年後輩の電化の山本一夫君だった。彼は勉強も好きだったから何時もふうふう云い乍ら勉強していたので、私はその都度「疲れがとれてから勉強しないと早死するよ。」と云った。彼は学校に残って博士号をとったが間もなく死んだ。

お隣りには一年先輩の森川幾久雄さんが居た。この人は勉強一本槍で吾々が少しでも騒ぐと土壁をどんと叩いて「静かにしろ。」と時々云われた。するとこちらも負けずに「勉強ばかりすると早死するよ。」と云った。彼も学校に残っていたが早死した。余り勉強しなかった私だけが長生し今も元気です。

その頃は二三人組になって手ごろな同潤会住宅を借りて自炊することが流行した。二学期中頃になると学校にもなれ、人にも誘われて同潤会住宅を借りて自炊した。大岡同潤会住宅は学校の南の原っぱを通れば約五分で帰れる近い処にある。

その頃玄人下宿は二十八円前後、寮で二十円前後、自炊すれば十二〜十五円で最も安い。田舎からの送金は同じであるから節約分はお遊び料となるわけだ。

自炊すれば忙しいが却って勉強は良く出来る、念のため。

月曜日から金曜日までは家に帰っても用がないから勉強するしかなかった。土曜は半どんで友達が集まり遊びに出かける。日曜日、祝祭日は個々に思い思いに遊びに出かける。これが大方の傾向であった。

土曜日は友達が三三五と集って伊勢佐木方面を初め方々に遊びに行くのが常であった。月末ともなると金がなく、電車賃の外五十銭つつ持って居れば三人連れで伊勢佐木町の裏のカフェー街に行き三軒を梯子する。コーヒーは一般の店では十銭、カフェーは十五銭であるから一カ所一時間位駄弁って五十銭置いて出て行った。

寒くなると時々三井先生の時間に回覧板が廻って来る。大岡同潤会住宅へ二三人づつが組になって、牛肉に酒、葱に白滝、蜜柑箱に豆腐と鋤焼の材料を全部持って来る。十数人集って賑やかな鋤焼会スヤヤキを催すことが何度かあった。また金のある時は二円の会費で六人連れで南京町に支那

料理を食べに行った。ワンテールブル十円に支那酒で食べるのが最も楽しみであった。日曜日に祝祭日に各人各様に出て行くが、私は三溪園を始め、各公園や埠頭、山の手から外人墓地などを散歩するのが常であった。

夏休みを初め休みになると郷里出雲に帰るのが常であったが真直に帰ったことはない。伊勢や高野山詣りしたり、途中下車して京都、大阪、宝塚に行った。特に宝塚は遊園地が駅から近い。入園料が三十銭、大劇場が三十銭で一日中面白く遊べる。

三年の夏休みは北海道旅行した。兄が国鉄に勤務していたから無料の家族パスを貰った。横浜を出る時二十円持って出た、最初五稜郭で下車した。大沼小沼と船巡りをやった。濃紺色の美しい自然の風景を満喫した。柄の良いお店に這入って昼食にした。鯉を初め淡水魚類に珍しい山菜類が沢山出たからたつぷりと食べれた。今でも思い出す程に旨かった。一円五十銭請求されてびっくりした。普通昼食と云えば十五銭前後の丼飯しか食べたことがなかった。

次は小樽に行った。丘の上にある公園に登って見た、内地と同じようなごたごたした町だった。埠頭には不景気のためか石炭が方々山積されていた。港の方に下りお願いして罐詰工場を見学した。罐ががらがら出来る処から罐詰めする処まで一貫作業をした、こんな新式の設備がこんな田舎にあるのには驚いた。一般には見学させないのだが学生だから見学させて呉れた。

次は札幌に行った、道路は広く品の良いきれいな町だった。旅館に泊る程の金がないからこの

只で乗れる夜行列車に乗って北に向った。音威子府まで行った時乗り換えて逆に南に行く室蘭行きに乗った。アイヌの部落を見学するため白老にて下車した。車中で白老には村長兼郵便局長が居るから尋ねた方が良くと聞いたから早速郵便局長を尋ねた。たまたま通信省から偉いお役人が十数人遊びに来ていた。局長に見学方お願いしたら「学生さん一緒にいていらっしやい。」ということになり、お役人も横浜高工の生徒だと知って親切にして呉れた。お役人と一緒のため一般には見せて貰えない処まで見せて貰った、大変嬉しかった。

最後に登別温泉に行き第一滝本館に一泊した。四〇〇人も泊まれる大きい旅館であったが小学校を旅館にした粗末な旅館であった。風呂に案内されて行ったら大中小合せて三〇台以上もあり、大きいのはプールの様で向うに女の人が居ることはわかっても顔ははっきりと見えない程大きかった。お湯の滝もあれば休む処も広い、ここでゆっくりして夕方室蘭に行った。

汽船会社の定期便で室蘭を夜出航して十二時間かかって青森に到着く。早速切符を買ったが財布の中をよく見たら只の二十銭しか残って居なかつた。これから田舎に帰るに船で夜十二時間、青森発日本海急行で大阪まで二十四時間、大阪から山陰線の急行で出雲今市まで十二時間、合計四十八時間をこの二十銭で過さねばならない。船の下の方の安い船室に行った。人が沢山居て仲々賑やかで今晩は眠れないだろうと心配していた。暫くしてボーイが「学生さん居ませんか。」と云ってやって来た、「船長がおよびですよ。」と云うからついて行った。船長が「今日はお客

様が一人も居ないから相手になって呉れないか。」と云われ心良く引き受けた。一等船客の上等の料理を船長とお話をし乍ら頂いた。全然知らなかったのだが船に風呂があった、この風呂にはいつて浴衣を着て暫く船長とお話をして一等船室で一人寝た。余りにも良くて夢かと思った。朝船長に挨拶して青森に降りた。神戸行急行日本海号に乗った。アンパン六個十銭を一袋買って、一食にアンパン二個とお土産にと沢山買った桜桃を少しずつ食べ、喉が渇くとホームに降りて水道水を飲んで間に合わせた。山陰線でも同様にして夕方やっと出雲今市に到着した。大変紆余曲折の多かった旅行で楽しかった。

斯様にして楽しい三年間の学園生活は夢の様に終った。

昭和六十年六月二十六日

雅号のエピソード

煙洲会もここに五百回を数え、御同慶に堪えぬ次第である。

ところで、煙洲会なる名称の起りは、会員各位もご承知の通り、勿論、校長鈴木達治先生の雅号から、名付けられたものであるが、会員の中には、新しく入会された方もあり、また、戦後ご

応化昭六年 望 月 藤 三

卒業になって入られた方も居られるので、或は、先生の雅号は、当初から「煙洲」と呼称されたと、お思いの方もあると思うので、その辺の経緯を一寸ばかりご紹介して見よう。

先生は、明治五年、羊歳のお生まれであるところから、当初は、「天羊」と号して居られた。この事は、大方の古い卒業生の方は、ご存知である。

小生が入学したのが、無試験入学制度を、完全に採用されたトップクラス、即ち昭和三年で、この頃はまだ、「天羊」と称して居られた。

その後、「煙洲」と雅号を変えられたことは、「煙洲殘筆」の冊子の中にある、商工実習学校（今の県立横浜商工高校）の教頭をされ、化学を教えて居られた、増田精家先生の記事や、その後、煙洲会から刊行された、「先生の思い出」という本に登載されている、鈴木京平先生（京の字が珍しい）の書かれた、「雅号の由来記」に詳しく述べられているので、今更、蛇足を弄（もよ）すこともない、思うのであるが、折角の機会で、重複の嫌いはあるが、往時を想い起す為にも、小生の知る限りのことを、補足して見たい。

多分、昭和四年頃であったと思う。陸軍大将の本郷房太郎氏が来校され、講演をされた。その際に揮毫をしていかれたのを覚えている。文は「文武不岐」だったと思うが、或は間違っていたら、ご叱声を乞いたい。

これは、後にブラック時代の剣道場の上に、扁額として掲げられた。そして、文の後に「栗洲

山人」と署名があり、落款がしてあったのは、はっきりと記憶している。これが煙洲先生の雅号改称の端緒となったことは、後に知ったことである。

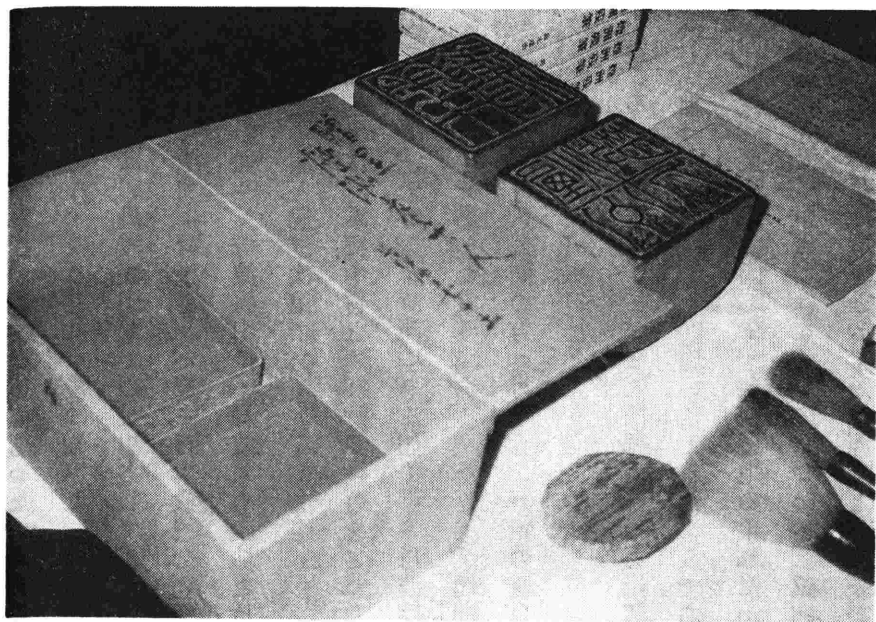
本郷大將は、丹波篠山藩士たにわのさかの長男として生れ、陸軍中將時代は第一師団長であったと思うが、大正七年に大將に昇進され、後、日本武徳会々長としても、大いに貢献された方である。

ご承知の通り、丹波篠山は、丹波栗の産地として有名であり、「栗洲山人」の雅号の生れたのも、宜むづなる哉と思う次第である。

煙洲先生は、本郷中將とは、意気投合をされた模様であったと考えられる。何故なら、丹波篠山と言えば、デカンショ節にある如く、「丹波篠山山家やまがの猿はヨイ／＼。」と唄われているように、猿の産地であったようである。そして、煙洲先生の郷里の愛媛も、矢張り猿の産地で、今でも、滑床国立自然公園の方へ行くと、野猿の棲息地がある位だから、さぞかし猿も多くて有名であり、共通した点があったと思う。

ところで先生は、予てから、西郷南洲翁を崇敬されており、ここにヒントを得られて、この際、「雅号」を変えようと思いたれたようであった。

即ち、「栗洲」に因んで、猿の産地の生れだから、「猿洲」としたいが、余りパツとしないし、「自分は、申歳ではなく羊歳じゃから、猿洲では縁が薄くて拙い。偶々わしは、煙草が好きじゃから、煙草の煙をとって「煙洲」としたいがどうじゃろう。煙えんは猿えんにも語韻が通じるから、



これにしようと思うのじゃ。」ということになって、雅号を「煙洲」と改められたのである。小生の想像ではあるが、「花は霧島、煙草は国分……」の通り、煙草に出典を求められたのも、万更鹿兒島の西郷さんと無縁ではないと考えられたに違いないと思う。

「栗洲」から「猿洲」へ、「猿洲」から「煙洲」へと考案された因縁話は、直接先生から承ったので、今更ながら当時が偲ばれ、誠に懐しく、記憶を蘇らせている。

蘇の字で思い出すが、徳富蘇峰先生が撰文された、名教自然碑には、はっきりと煙洲鈴木達治の署名があり、落款印が刻み込まれている。

この落款印だが、これは蘇峰先生が、煙洲先生に特に贈呈された物で、五百回記念の会

合の際、初めて実物の印（写真参照）を拝見させて頂き、感慨無量であった。

余談ではあるが、さきに述べた、煙洲先生と同姓の鈴木京平教授だが、先生は、皮革工業の權威者で、小生等は、在学当時先生から、名講義を承ったものである。

先生は、夜間併設の横浜工專（今の横浜市立工業高校）の主事から、後に校長を兼務され、その後、東京の田町に在る、東京高等工芸学校長に榮転され、戦時中は、千葉の松戸に疎開し、東京工業専門学校長（今の千葉大工学部の前身）から、戦後、新制大学発足と同時に、初代の茨城大学長に就任された方である。自宅は、弘明寺の一つ手前の通町で、「さつき」の盆栽を、沢山持って居られたのが印象深い。

煙洲先生が、雅号をお変えになった頃、「自分は、先生より一回り下の羊歳生れだから、先生にあやかった雅号にしたい。天羊の下では、何時も頭を押えつけられ、税うだつが上らぬように気持が悪い。上の一本を外して貰えませんか。そして『大羊』と号したいが如何でしょうか。」とお伺いをしたら、「それがよい。」ということで、爾来『大羊』と称することにした。」と聞いている。

先生の生家は、伊豆の南端、白浜であり、太平洋に面し、羊は洋にも通じ、気宇雄大で立派な雅号だと感心したものである。然し、煙洲先生より早く逝かれ、惜しまれてならない。

フラスコを振っていた助手から、筆を握る変り種として、文部省に移った小生は、日頃鈴木両先生から、昵懇な指導とお話を承っていたので、申し添えた次第である。

先生と学生運動

建築昭七年 田 辺 謙 輔

岩波新書「紅萌える」は、土屋祝郎氏がその三高時代の回想記である。昭和初期に消費組合運動に没頭して、特に共産主義的思想があったわけでもないが、第三高等学校を追われ、その後次第に左翼化してゆく経過を記している。その著者と同時代に、私は横浜高工の消費組合創立委員長として、現在の生活協同組合の「さががけ」のようなものをつくる運動をした。他校なら当然土屋氏の如く退学ものであったろう事は、大岡署から創立委員全部がマークされた要注意学生であって下級の委員の一人が検挙された事からも察せられる。さすがに煙洲先生は私達学生の言い分を聞いて、組合設立をみとめ、その売店を校内におき、全学生から出資金を集める事も許可し、更に教務課所属として今井専務理事をあてがってくれた。今井氏は根岸の先生宅と近所でつとに先生とは親交を結ばれていた方だった。又当時講師として来校されていた東洋経済新報の石橋湛山先生に相談役を委嘱された。先生の包容力の大きさ、政治力のすばらしさは、当時我等青臭い学生ですら、感嘆し且又感激もした。

さて半年の準備期間を過ぎて、昭和六年初、組合の創立大会を例のバラックの講堂で開催され

るはこびになった。全校学生が集合、組合定款を議決し正式理事の選任があつて、記念講演として、我々が尊敬していた協同組合運動の理論家本位田祥男氏を講師として迎える事になった。氏の御都合で急に左翼的な講師に変更した。

昭和六、七年は未曾有の不景気で、時の浜口内閣の緊縮財政により、昭和七年度より実業教員養成所を廃止する案が、大蔵省できまりかけていた。当時の実業教員養成所は東京商大に商業教員養成所、本校に工業教員養成所、名古屋高工に工業教員養成所等が附設されていて、小生等は本校に於ける第一回養成所学生であつた。大蔵省原案をいちはやく商大の連中がキャッチして、その消費組合創立総会の席に連絡してきた。総会の講演が終るやいなや、全学生が集合していたので、緊急動議として反対運動開始を提案して議決してもらい、商大側と行動を共にして、反対運動に立ち上つた。煙洲校長は特に私を講堂裏の小部屋によんで、文部省の無定見を非難し反対運動を激励して、金二十円を運動資金として手わたされた。

私は世間知らずで、運動にうかれていたような所があつたのであろう。うかつにも組合創立大会を取材に來た新聞記者にその事をもらしたのであつた。もし新聞紙上にその事実ののつたら、どうなるかなど考えずに。

このもみ消し運動には学校側も一方ならず苦勞した事は後で知つた。反対運動は文部省、大蔵省への陳情と展開してゆくが、結局養成所は廃止にならずに終つた。

先生の教育者としての深い愛情と識見、はた又政治力の一端を物語るものではなからうか。

名教自然碑について

建築昭七年 田 口 武 一

名教自然碑の将来が心配である。煙洲先生を存じ上げている教授は、あと数年で、間違いなく学内から姿を消してしまう。そのあと名教自然碑は、その意味を忘れ去られてしまうのではなからうか。

碑としては、横浜市内でもきわめて立派なものの一つであるにかかわらず、教育の原点ともいふべき名教自然の意味が分らなくなつては、何とも淋しい限りである。

これについては、私は、何か碑標のようなものを傍に建てておくべきであると、以前、煙洲会をはじめ、各科の同窓会で申上げたが、実現されそうにない。パンフレットなどを作つて、毎年、学生に配る案が出たが、私は経験上、これには無理があると考えた。あとに残った教官も事務官も、年とともに次々と去つてしまうので、結局は分らなくなると思われるからである。事実、数年前、「名教自然碑の由来と教育私見の断片」というパンフレットが大量に学内から出て

きたことから明らかである。おそらく最初のうち、しばらくは配られていたものが、いつの間にか取りやめられてしまったものだろう。

碑標建設実施の具体的方法は、碑標のデザインは建築学科が引受けてくれる。碑標に刻む文章はわれわれ仲間の誰かが書く。費用は大学側にも相当額出していただく。ということである。

別紙に碑標の文を試みに書いてみたが、非常にむづかしく、手におえない。これを素案として、訂正願うか、どなたかに書直していただきたいと思っている。

われわれもいつまでも元気でいられるわけではない。ここに再度提案して、皆さんのご賛同を得たいものである。（一九八五・六・三〇）

碑 標

（名教自然碑解説案）

田 口 武 一 素案

本学の前身である横浜高等工業学校の初代校長であった鈴木煙洲先生は、大正九年ご就任後間もなく「名教自然」という成句を思いつかれたが、これは先生の主張される自由啓発主義の教育方針を象徴するもので、母校の標語となった。なお、後に先生は、西晋章の中に「聖人は名教を貴び、老荘は自然を明らかにす」という文章のあるのを見出されて、この句に確信をもたれたが、この意味するところは、現代においても教育の原点でなければならない。

この碑は、昭和十年二月先生のご退官に際し、先生の偉業をしのんで、母校教職員ならびに卒業生をはじめ、多くの方々の拠金と横浜高等工業学校建築科教授芸術院会員故中村順平先生の設計により、昭和十二年十一月弘明寺の母校構内に落成した。碑面表「名教自然」は鈴木煙洲筆、裏面は、（別記のように）選文徳富蘇峰、原三溪書である。

昭和五十三年本学の統合に際し、この地に移設された。

昭和六十年三月 煙洲会これを記す

文中（別記のように）とあるは、裏面の撰文も碑標に入れたらどうかと考えてのことである。

甜菜と煙洲先生

応化昭八年 小 西 博 俊

現在私は、北海道における、畑作基幹作物になった甜菜てんさい糖事業に、昭和三十一年から従事し、幾多の艱難に遭遇しながら、この道一筋に打ち込んだきた、卒業生の一人であります。

この甜菜については、煙洲残筆に記載されておりますから、省きますが、先生退官時の昭和十年には親しく巡視され、大正初期からの成果については、篤とくのご存知のようです。北海道が甜

菜で安定的になりましたのは、近々十年前位からで、私達は血の滲む思いを余儀なくさせられました。しかしながら心棒強く遂行してまいりました結果、産糖六十万屯になりました。この事は、昭和五十六年九月二十九日、二十一回忌の煙洲会墓参会に出席し、墓前に、謹んでご報告申し上げます。私は、大半が北海道におりましたので、この時始めての墓参でした。

丁度社長になって、間もなかったので、一介の教え子として、先生が甜菜に若き蔵前時代血を燃やした事が憶い出され、感無量でした。それにご元氣なときに、是非お目にかかって、ご報告出来なかったことを、深くお詫び申しあげたのであります。

先生のお教えは「名教自然」に尽きるわけですが、私は修業いまだし、尊いお言葉とは思いつつも未完成であります。自分にとって「名教自然」とは、生存中おいかけどおしの自分ではないかと思っております。

煙洲会が五百回になりました。先生亡き後、益々盛大に会合がおこなわれておりますことは、煙洲先生の御遺徳の然らしむることとは云え、菅代表を中心とする幹事諸氏のお骨折りの賜と深甚なる敬意を表する次第です。

煙洲会の益々のご隆盛と、会員諸兄のご健勝を、お祈りして祝意といたします。

(北海道糖業株式会社代表取締役会長)

煙洲会五〇〇回を記念して

造船昭八年 齊 木 雅 夫

鈴木煙洲先生が昭和十一年四月一日発行の横浜工業会誌（第十一卷第四号）に特別寄稿文として寄せられた『山の上から』（一）の序文に

山の上からは谷底まで見えるのが定石になっている。六ッ川の丘の上、高からざれども、閑居静思すれば、社会の有ゆる段階を見透すことが出来るのである。

……（中略）……内省の妙薬は、回旧であり、回顧である。自ら踏み去り、踏み来った、人生行路を冷徹に、自批自判することである。思い出、それは懐しく、又憂きものである。

回顧する六十余年、只だ夢のようでもある。然し眼を掩へば忽ちそこにはおぼろげに点描される幾つかの姿があり、影がある。……と書かれている。

横浜高工在学中私も大陸会々員の一人でもあった。然し乍ら在学中はただ会員であつたに過ぎずに卒業してしまつた。

社会人となつてから、陰に陽に名教自然の教えがくずれ落ちんとする私の氣持を勇氣づける妙薬となり今日に至っている。

終戦後大好物の葉巻をお土産に、私はしばしば六ッ川の丘をのぼり、先生のお宅を訪門、聲咳に接し、処生訓を受け、前途に光明を見出し、葉巻を手にして喜びに満ちた先生の笑顔を頭に浮かべながら六ッ川の丘を下った事がつい最近の様に思われる。

名教自然の揮毫を頂戴した後次記の様な御懇書と共に煙洲先生の揮毫を再び手にした時の歓喜が甦る。

拝呈陳者兼々御依頼の揮毫御郵送申上げました。……（中略）……墨は明の神宗皇帝万曆三十二年甲辰の年（西曆一六〇四年）の古物です。

文句は論語の中にある

学んで思はざれば則ち暗（罔）^{クラシ}し、思つて学ばざれば則ち危（殆）^{フヤウシ}し

人間は書物を読んで読み飛ばしで思索をしなければ賢明にならない。心で物を考えても書を読み学問をしなければ行為に危険が伴ふと云ふ意味であるが能く味ふと中々意味深長と私は考へます。孔子の此言葉を平素想起して修養に供して居ります。

そして送られてきた揮毫詩は墨痕鮮かに

学而不思則罔

思而不学則殆

昭和二十九年初冬

煙洲八十四老

落款

落款

為斉木賢友録孔夫子語

と書かれていた。注釈がなければ折角のお志しが猫に小判になるところ。

誠に有難い教訓でもあり、早速経師の手により表装され、名教自然の揮毫の額と共に私が家の家宝として秘蔵している。

煙洲会五〇〇回記念誌発刊が村松幹事から発表され、私は敢然としてペンを取り、『終戦秘話』と題した一文を草し、大陸会々員の活躍振りを御披露する次第である。

終戦秘話

—ドイツ商船隊の活躍—

昭和五十九年四月十四日、元横浜高等工業学校々舎のあった地域に建てられた国際交流会館で、第十四回弘陵造船航空会総会開催準備の理事会が開かれた。理事会終了後の雑談中、突然昭和十七年十一月三十日横浜港内岸壁に繫留中のドイツ船爆発事件の話が飛び出した。

理事の一人、大崎多知郎氏（昭和十八年九月卒）は当時航空科二年生であったが校舎の窓硝子が爆風で吹き飛ばされたのを見て、生来の好奇心を持った彼は爆発事故の現場を見ようと波止場に出かけたが既に非常線が張られており、現場視察は出来ず連続爆発音の凄さ、物凄い火焰を望見するのみであったと語り、之に直ちに反応を見せたのが、青木春三氏（昭和十年卒）、武市英

雄氏（昭和十三年卒）の兩人で共に横浜造船所に在職中で、事故の物凄さ、造船所構内の被害などの外に今だから話せるけれどと前置きして、爆破船から流失したと思われる数多くの缶詰類が潮の流れに沿って造船所構内岸壁まで流れてきて、之を収得し、食糧難の当時思わぬ配給（？）にあづかり、とても喜んだものだったというこぼれ話まで飛び出した。

* * *

ドイツ船の爆発は全く悪魔の仕業としか考えられない事件であり、私自身にとつても生死の運命の別れ道でもあったあの日の事、そして武装商船 Schiff 10 に就いて当時の模様を次の様に語った。

昭和十七年十一月十九日（一九四二年）、第十号艦と呼ばれたドイツの武装商船が三菱横浜造船所の一号ドックに入渠した。外観は全く普通の貨物船であったが、工事担当技師として、当直士官によって修理箇所現場案内と同時に艦内を見せて貰ったが、中甲板に陰蔽設置された加農砲は外板の一部の開閉式扉により、有事の際砲身が突出、直ちに射撃態勢がとれる様になっており、船艙には偵察機が一機格納されており、機関銃数門が、船首、船尾、船橋甲板上に設置されており、始めて見学した武装商船の素晴らしさに驚いた記憶が生々しい。

母国を出港して以来、南大西洋、インド洋上で拿捕又は撃沈した反枢軸国船のシルエットが船名、国籍、年月日、屯数等と共に舷側に描かれ、赫々たる戦果を物語っていた事も思い出され

た。

主機オーバーホール、テールシャフト抜き検査、舵上げ検査等殆んど定検に近い工事その他 Essential Repair 工事を完了して、Schiff 10 は運命の日、昭和十七年十一月三十日午前十時（と思う）一号ドックを出渠して、タグボートに曳航され新港埠頭八号岸壁に繋留中のドイツ海軍タンカー、ウツケルマルク号に並列、横付けに繋留された。

同日午後一時半本艦サロンへ参集命令を受けていた私は午後一時出発のボートに乗船すべく通船見張所に出かけたが、そこで集合時間が午後三時に変更された事を知った。

紀元二六〇〇年に当る昭和十五年（一九四〇年）日独伊三国軍事同盟が締結された後に、横浜港に入港するドイツ艦船の数は可成りの数に達し、殆んど全ての修理を三菱横浜造船所が受注、私は幸運にも全艦船の修理担当技師を任命された。その喜びは修理船工事仕様書を手にした時から一変した。仕様書は何とドイツ語で書かれて居り、会話はドイツ語が主体であったのである。

例えば、

Reparatur und Anforderungs-Liste (修理仕様書)

Nachtrag zur Reparatur-Liste (追加修理書)

Arbeiten für die Werft (造船所工事)

の如く、トタンに横浜高工在学中のドイツ語の三井 透先生や元木先生の顔を思い出したがあと

の祭り、ドイツ語の再勉強（猛勉強）が始まった訳で、あの頃の苦しみと同時になつかしい思い出がよみがえる。

ともあれ、二時間のずれをどうするか考えた末、港外で修理中の外のドイツ船ドガーバンク号に行く事を急ぎよ決めて、ボートに乗った。

午後一時半頃ドガーバンク号に到着し、いつもの様にタラップを駆け上った私が、上甲板上にステッピンした丁度その時、『ドカーン』という物凄い爆発音を耳にした。思はず音のした方向を振り向いた所、物凄い連続の爆発音と共に濛々たる黒煙と真赤な火焰が天に沖した。方向はまぎれもなく新港埠頭で、ウツケルマルク号と第十号艦が煙と火焰に包まれてしまっていた。

船室から飛び出してきた船長以下の乗組員の悲鳴ともつかない怒声、悲嘆の叫び声を後にして私は急ぎよ通船に乗り会社に戻ったが、新港埠頭附近通過の際、両艦船から難を逃れんと海中に飛び込む数多くの乗組員を望見出来た。海面に流れ出た重油は既に火の海と化し、潮の流れに沿って火焰は早くも造船所の岸壁にも達しており、造船所消防隊により必死の消火作業が続けられていた。

当時の新聞、ラジオはこの爆発事故の詳細を報道しなかった。私の所持するファイルには読売新聞昭和十七年十二月一日付の朝刊に『商船火災横浜埠頭で』という見出しで簡単に記載されたのみである。（新聞切抜き参照）

商船火災

横濱埠頭で

【横濱埠頭】 廿日午後一時四十分ごろ横濱港において商船ならびに陸上倉庫の一部に火災事件発生し、死傷者若干名を出したが神奈川縣警察部では同日午後七時廿分迄の調査を終了した

神奈川縣警察部局設（廿日午後七時廿分發）本日午後一時四十分ごろ横濱港内繋留中の商船が作業中の事故に起因して火災発生し、陸上倉庫の一部にも延焼した、死傷者若干名ある見込みなるも目下詳細取調べ中である

附圖 1 昭和17年12月1日付読売新聞より切抜き

私の記憶では魚雷又は弾薬積込中の第十号艦か、油槽船ウツケルマルク号のどちらかが何かの原因で爆発、之が魚雷又は弾薬の誘導爆発を引きおこし、更にウツケルマルク号の油タンクに引火し、その火粉が対岸六号岸壁に繋留中のロイテン号（旧南京号）及び第七号岸壁に繋留中の日本海軍徴用貨物船第三雪海丸にも飛火し、何れも類焼沈没してしまったのだと思う。爆発事故のあった翌日の新聞（神奈川版）の神奈川県警察部当局談によれば、『陸上倉庫の一部にも延焼し、死傷者若干名あるも目下詳細取調べ中である』と記載され、その後一切詳細記事は報道されなかった。

思いがけなくドイツ船が三隻一瞬にして壊滅した誠に呪はれた日の翌日、私は修繕部長と共に羅災後の上級乗組員の仮の宿舎になった『ホテルニュー・グランド』を訪問、艦長にお見舞の挨拶をしたが、その時の艦長の毅然たる態度と返礼の言葉に感激して帰社した思い出がある。士官はニューグランドに、兵員はバンドホテルに罹災後収容されたと記憶している。

しかしながら Schiff 10 と Uckermark の爆発事故を境として、日独両国共に戦況は次第に不利となつて行つた事は紛れもない事実であつた。

昭和十六年十二月八日、日本は太平洋戦争に突入し、緒戦の日本軍の活躍が『ウソ』の様に一年と年月の経過とは逆比例に、戦況は悪くなる一方で、日本軍の苦戦の模様が新聞、雑誌、ラジオ等の報道に見られる様になった。昭和十八年初頭より新聞記事に『撤退』又は『他に転進』という文字が可成使用され始めた。同年五月二十二日の朝刊紙上に山本五十六聯合艦隊司令長官戦死の報道があり、次いで五月三十一日はアッツ島守備隊全員玉碎の報道に接し、六月六日に東京日比谷公園葬儀場で山本元帥の国葬が行われた記事が載つた。

陸、海、空、何れも大苦戦の様相の中、軍の士気及び銃後国民の闘志を奮い立たせんが為に昭和十八年八月二十五日付読売新聞の朝刊に次の様な大見出しの一面トップ記事を見て驚いた。

『海軍省許可済第五八号』

『歴戦のツール号（補助巡洋艦）恙なく日本に到着』

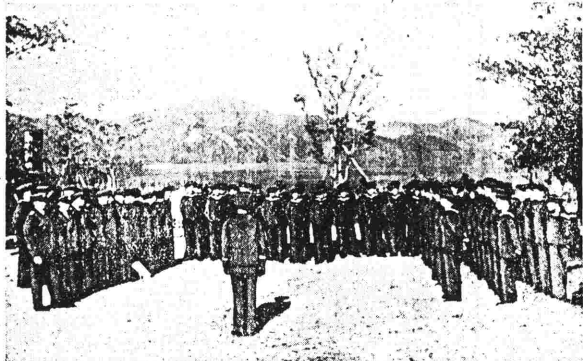
『空前ノ日独海の握手』

『交驩、新しき任務に資す』

そして記事内容は、戦果十萬噸拿捕三隻は日本へ廻航等の詳細が記載されていた。（新聞記事

参照）

しな權海制的對絶に敵もに洋海るな何如



獨佛提携一段と強化

伊の政變[〃]佛の暗雲拂ふ

[illegible]

歴戦のトルコ

巡捕
艇力

恙なく日本に到着

[illegible]

交驩、新しき任務に資す

[illegible]

戰果十萬噸

拿捕二隻は日本へ廻航

[illegible][illegible]

五月十日 櫻井給問の報告
日本に關し
五月十八日 ノルウエー船へ
ボルク船、日本に關し
七月四日 ノルウエー船マド
ノ報告、日本に關し
獨側でも報道

[illegible]

記事内容を一読して驚いたことに、トール号は正に私が一年前に担当して修理工事を施行したあの Schiff 10 ではないか? という疑問であった。

爆発事故により沈没してしまったあの艦の事を何で一年も経過して新聞記事に載せたのかの疑問であったが、当時の日本軍の不利な戦況に鑑み、全国民の士気を鼓舞するためには恰好の材料になるので、一年前の事実を発表し、固い絆で日独両国は結ばれている事を一般国民に知らせるべく大々的に報道したと思った。

然しながら私のファイルにはトール号と第十号艦とが同一船であるという記録がなく、理事会の席上『ドイツ船爆発の真相を探索、発表する』と意気込んで発言した為、真実を確かめるべく、夫から横浜の図書館、神奈川県庁、横浜市役所、東京日比谷図書館等を歴訪調査を開始したが、何れも当時の記録皆無で、止むなく一縷の望を抱いて東京広尾にあるドイツ大使館を訪れたが同大使館にも資料存在せず、大使館軍需部職員から西ドイツの Stuttgart に在る現代史図書館 Bibliothek für Zeitgeschichte 又は Freiburg に在る戦史研究局 Militärgeschichtliches Forschungssamt に問い合せたらとの親切なアドバイスを受け住所録を貰い、早速上記宛に必要なデータ、新聞記事等を同封し、トール号と Schiff 10 に関する質疑事項を書き、私の『終戦秘話』（ドイツ商船隊の活躍）に真実を記述するための協力依頼の手紙を書き送った所、誠に丁寧な返信と共に貴重な Schiff 10 に関する小冊子のフォトコピーが送られてきた。第二次世界大戦に活躍した

ドイツ商船隊の活躍、特に Schiff 10 (トール号であること判明) の活躍と最後は Uckermark と横浜港に於て運命を共にした貴重な記録の小冊子であった。小冊子の表題は第二次世界大戦に於けるドイツ商船隊海上戦力、海上航路かく乱者と訳したが、表題原文は左記の如し。

HANDELSSTÖRER

HANDELSKRIEG

DEUTSCHER ÜBERWASSERSTREITKRÄFTE

IM ZWEITEN WELTKRIEG

果物運般船 (EX-SANTA CRUZ) として建造された本船は、第一次、第二次の武装商船としての改装 (兵器搭載工事) を施行し補助巡洋艦 (Hilfskreuzer SCHIFF 10) として一九四〇年三月十五日就航、華々しい活躍を開始したのである。

本艦の要目は次の如し。

建造所・年月日 : DEUTSCHE WERFT, HAMBURG. 1938

改装造船所・第一次 BLOMM+VOSS, HAMBURG (1939-1940)

第二次 DEUTSCHE WERFT, HAMBURG. (1940)

総屯数 (G. T) : 3, 862

載荷重量 (D. W) : 4, 720

Loa :

122M

Lpp :

116M

Bm :

16.7M

Dm :

8.1M

推進機関 :

1-TURBINE x 6,500 HP

最高速度 :

15 Kn

航続距離 :

32,000 SM x 12 Kn

燃 量 :

3,144T

塔載兵器 :

6 基—15 cm 加農砲

2 基—3.7 cm 高射砲

4 基—2 cm 高射砲

4 基—魚雷発射管

1 機—偵察機 (ARADO-196 A-1)

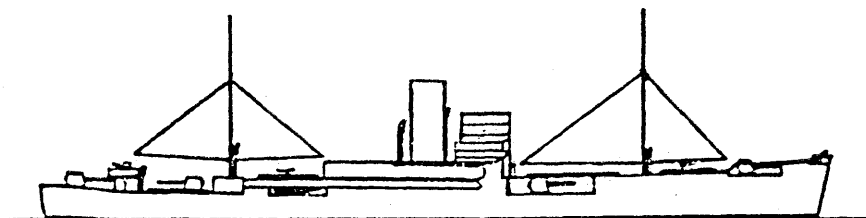
乗務員

貨物船として……44名

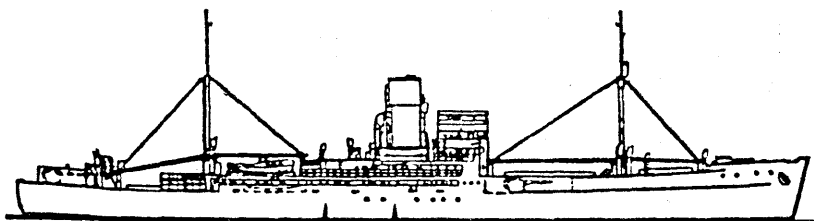
補助巡洋艦として……349名 (船内臨検士官を含む)

(附図参照)

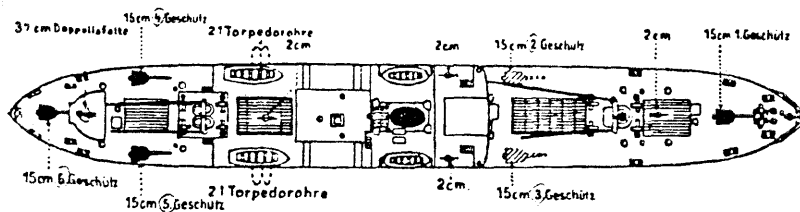
I. Reise



Die Silhouette¹ des Hilfskreuzers THOR ex SANTA CRUZ. Die Geschütze sind nicht getarnt, um deren Stand deutlich zu machen



Die Silhouette¹ des Hilfskreuzers THOR ex SANTA CRUZ mit getarnten Kanonen und den gestrichelt angedeuteten Vorschiffgeschützen im Zwischendeck



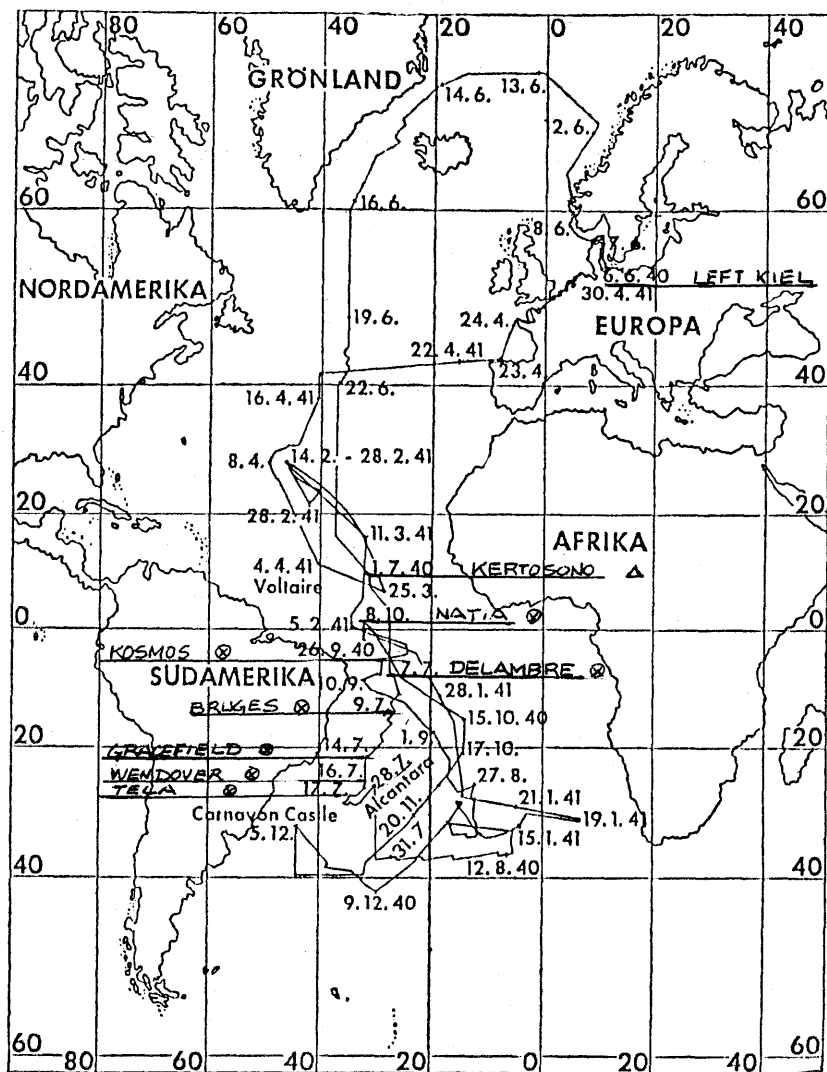
Draufsicht² auf das Oberdeck des HSK's mit nicht getarnten Kanonen, wobei die beiden Vorschiffgeschütze, da im Zwischendeck, nicht sichtbar wären. Sie werden daher auch gestrichelt dargestellt

船型平面図

Kommandant Kpt.z.S. Otto Kähler

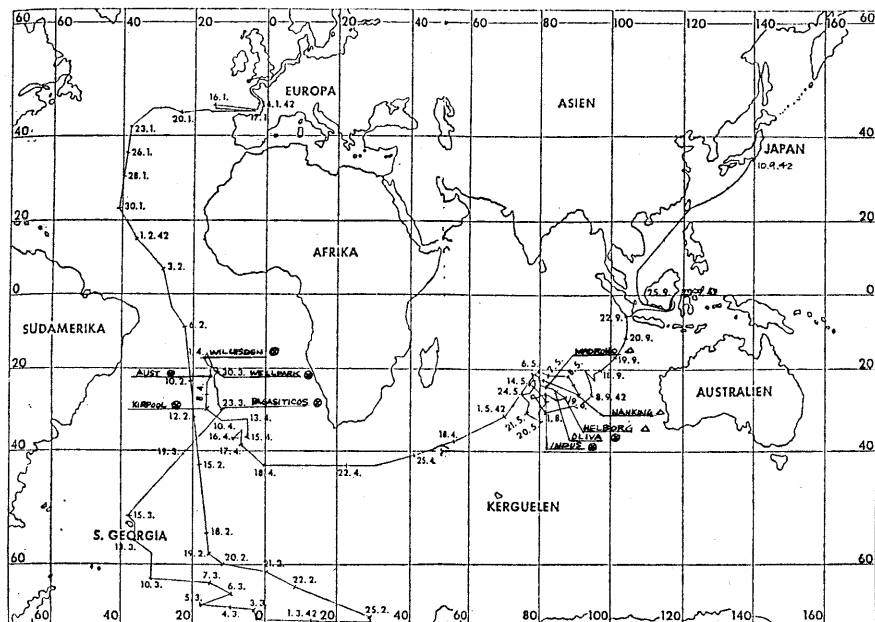
WEGEKARTE SCHIFF 10

JUNI 1940 - APRIL 1941



航海図 (1940年~1941年)

NOTE: ⊗ --- 撃沈
△ --- 拿捕



航海図 (1942年)

上記現代史図書館並に戦史研究局には礼状を書くと同時にドイツ語で書かれている本文の翻訳を開始した。独和辞典片手に訳して行くにつれ Schiff 10 の活躍がまるで映画を見るように、本国出港後南大西洋、インド洋に於ける素晴らしい活躍振りに胸躍らせ乍ら翻訳を続けたのである。Schiff 10 は Kap. z. S. Otto Köhler 指揮下 (一九四〇・六一一九四一・四) の活躍と Kap. z. S. Günther Gump-
rich 指揮下 (一九四二・一一一九四二・十) の活躍振りが夫々の航海図表 (附図参照) に明確

に記載されており、驚嘆の一語に尽きるが、今回の煙洲会五〇〇回記念誌に発表するものは、艦長グンター・グンプリッヒ大佐指揮下、一九四二年（昭和十七年）一月母国を出港して、約一年にわたる長期航海中に於ける反枢軸国船に対する戦闘経過と、不慮の災難により横浜港内に於て沈没するまでの戦記を翻訳し要約したものである。

1' PAGASTICOS 撃沈（一一三—一一四—一一五）

Schiff 10 (Kpt. z. S. Günther Gumpnich) はドイツの某基地から再度の出港計画の挫折を経た後やうやく三回目見事に成功した。その日は一九四二年一月十七日であった。そして一月二十三日には已に大西洋上にはその姿なく、一路本艦は南大西洋戦線に参加すべく進撃して行った。

Schiff 10 に与えられた作戦命令は南氷洋に突進し、捕鯨期間中を通してその近辺に待機して居る事であった。艦長 G. Gumpnich は Schiff 33 が成功した様に補助巡洋艦となった本艦の活躍も再度成功する事を祈った。引続き Schiff 10 は通商戦の指揮をとる為南大西洋に戻って行った。Schiff 10 は一月四日赤道を越え、同月十七日夜半に S. GEORGIA 島東方約 54 度 S 15 度 W の海域に何等の事故なく到達した。その翌日には南極圏の WEDDELL 海に突入した。そして何よりもまず、東方航路方面に出没する敵国船の搜索を開始したのである。しかしながら、艦載

偵察機による危険を冒しての絶え間ない搜索にも拘らず敵影は一隻も発見出来なかった。二月二十五日 Schiff 10 は66度S 30度Oの地点に居たが捕鯨船団よりの無線通信も皆無で、艦載偵察機による執拗な搜索にも拘らず水平視界に入るものは皆無であった。

Kap. G. Gumplich は三月十日迄、西方海上38度W附近の航路の搜索を続けたが、さしたる成果あがらず南大西洋に戻る事を断固決心した。三月十四日補助巡洋艦は視界内に S. GEORGIA 島を見ながら通過尚NOコースをとり、南大西洋に戻って来た。そこで二月十二日 GIRONDE を出港してきた物資供給船 REGENSBURG (Kap. PEISCHEL) と遭遇した。

三月二十三日午前三時五十五分、Schiff 10 ははるか彼方に一筋の煙雲がたなびくのを発見した。

さらに両船が近づくにつれ、敵影は古いギリシヤ国籍の貨物船 PAGASITIKOS (3942 G. T.) である事が判明した。HEIMATHAFEN ANDROS にある M. A. EMERICOS 社所属船で、積荷は石炭を満載し MONTEVIDEO 向航行中であった。

停船命令の信号旗を掲げたが、明かに無視されたので一斉射撃を加えた為敵船は即刻停止した。乗組員は女性一人を含む三十三名で、総員本艦に移乗させた後、砲撃と魚雷によって撃沈す。31度20分S 12度00分Wの地点であった。

二、WELLPARK 撃沈（三〇—三—四二）

三月二十六日 REGENSBURG と再会し燃料、物資を本船より積込み完了後、翌日北方に向かって進撃を開始した。三月二十八日午前十一時半頃当直見張兵が前方水平線上にマストの突端を発見す。Kap. Gumpich は直ちに追跡を下命したが午後二時半頃敵船は Schiff 10 より速力早く捕捉出来ないことがわかった。しかし二日後に艦載偵察機は他の敵影を発見した。無線連絡により敵船に停船命令を下した。敵船は GREENOCK から出港して来た英国籍の J. & J. DENHOLM 社所屬船 WELLPARK (4649 G. T.) であった。貴重な航空機部品を船艙に、箱詰の軍用車輛部品を上甲板に満載しており、乗組員全員を Schiff 10 に移乗後爆破撃沈す。22度S 13度Wの地点であった。

三、WILLESDEN 撃沈（一—四—四二）

四月一日早朝艦載機により又新しい獲物を発見す。LONDON を出港した WATTS SHIPPING CO. 所屬の WILLESDEN (4563 G. T.) であった。戦略物資満載して居り、乗組員全員本艦に

救助後爆破撃沈す。18度S 14度Wの地点なり。

四、AUST 撃沈（三一四—四二）

更に二日後の四月三日偵察機との協同活動により FARSUND を出港して来たノルウェー船 LUNDEGAARD & SONNER 社の AUST (5630 G. T) を捕捉す。三月二十八日南米ブラジルの PERNAMBUCO を出帆して KAPSTADT 向航行中であつた。乗組員全員救助後21度S 16度Wの地点にて爆破撃沈す。

五、KIRKPOOL 撃沈（一〇—四—四二）

四月九日午後十時頃本艦の無線装置が敵船の位置を確認、真夜中を少々過ぎた頃約十五キロメートルの地点から砲撃を開始し、即刻停船させた。

英国籍 R. POPNER & CO 所属の貨物船 KIRKPOOL (4842 G. T) で、積荷は戦略物資を満載しており WEST HARTLEPOOL 港を出港したこと判明。海中に逃げた乗組員は全員 Schiff 10 によって救助され、敵船は34度S 11度N地点で撃沈された。

* * *

南大西洋に出現した Schiff 28 と交信中艦長 Gumpich はインド洋への出撃命令を受けた。南アフリカ喜望峰を迂回してインド洋に出現した Schiff 10 には日本海軍との協定に従い、西方60度O南方10度Sの間の搜索行動が下命された。その外に日本海軍潜水艦との協同作戦により東アフリカ沿岸より三〇〇SM領域のパトロールを義務づけられた。

六、NANKIN (南京号) 拿捕 (一〇—五—四二)

Schiff 10 にとつての新しいパトロール地域に於ける最初の成果は、五月十日 艦載偵察機によつてNWコース上に一隻の客船を発見した事である。

26度43分S 89度56分Oの地点に於て停船命令を発信した。GREENO に本社のある英国籍のEASTERN & AUSTRALIAN STEAMSHIP CO. 所属の古い客船 NANKIN (7131 G. T) であった。貴重品を満載しており MELBOURNE を出港インドの BOMBAY 向航行中であつた。本船臨検の結果一六四人の乗組員の外に一八〇人の旅客が乗船しており、二十名の婦人と二十人の子供及び二十人の英国海軍士官が含まれておることが判明した。

積荷は八、二〇〇屯の高級戦略物資補充品、高射砲弾薬、機関銃、新式携帯用無線機具、五〇

○屯の錫の延棒、羊毛一一、○○○箱の外、ぼう大な量の食糧あり、その数量の中には四二、○○○箱の食用肉や腸詰の缶詰貯蔵食品や二八、○○○箱の果物、野菜の缶詰貯蔵食品があった。更に船内臨検士官によって四○○○包の郵便袋、その中には五十六袋の外交文書包も含まれているものも又発見された。捕獲船と共にNWコースをとり北上し、22度30分S 80度00分Oの地点で物資供給船 REGENSBURG と遭遇す。

Schiff 10 の艦長は拿捕船南京号を有効に利用する為撃沈せず、出来るだけ早く日本へ廻航する処置をとった。海軍中尉 W. VOGEL が拿捕船南京号の指揮権を受領し、本船の日本廻航をつつがなく終了、横浜港外錨地に七月十八日到着す。

七、OLIVIA 撃沈（一四一六—四二二）

長い無駄な時間を経過した後 Schiff 10 の無線装置が六月十四日夕刻、本艦より約九〇キロメートルの距離の所に目標（敵商船）をキャッチした。暗闇の中敵船の近づくのを待ち、十六キロメートルの地点に達して砲門を開いた。そして此の最初の一斉射撃により敵船の舵は使用不能におちいり、またたく間に敵船は猛火に包まれ、乗組員は海中に逃れたがその乗組員を水中より救助した後、約26度S 70度Oの地点に於て猛火に包まれた敵船を後にして Schiff 10 は高速力にて

航行を続けた。救助された乗組員の証言により和蘭の Curacaoschen Scheepvaart My. N. V. 社所属のモーター・タンカー OLIVIA (6307 G. T) であることが判明した。後日 OLIVIA の乗組員四名が一隻の救命艇に屯の重油を満載し航行中であることが判明した。後日 OLIVIA の乗組員四名が一隻の救命艇に乗組み逃走 MADAGASKAR 島に避難し生き延びていた事が判明す。

八、HERBORG 拿捕（一九一六—四二）

同じ海域に於て六月十九日、ノルウェー国の S. Herlofson & Co. 所属の M. T. HERBORG (7892 G. T.) を拿捕した。このタンカーは一一、〇〇〇屯の重油を満載し、ABADAN より FERMANTLE 向航行中であつた。昼間攻撃を受けたタンカーは Schiff 10 の即刻停止命令に従つたので撃沈されなかつた。艦長は此のタンカーを有効に利用するべく、海軍中尉 R. Gerwin を拿捕船臨検士官として日本向廻航の指揮を取らせ、本船は六月二十九日 BATAVIA に到着、そして七月二十二日に横浜港に安着す。本船はその後 HOHENFRIEDBERG と改名され、HEIDBERG 大佐が指揮官となり封鎖突破船として西仏蘭西方面に向け、十一月十一日横浜港を出港したが、目的地に到着することが出来なかつた許りでなく、昭和十八年二月二十六日夜半、41度45分N 20度58分Wの地点に於て英国の重巡洋艦 SUSSEX によって撃沈されてしまった。

(注 齊木、本船は昭和十七年十月十三日より十九日迄横浜造船所 No. 3 ドックに入渠修理を完了す)

九、MADRONO 拿捕 (四—七—四二)

同じ海域に於て艦載偵察機は第三番目のタンカーを捕捉した。このタンカーはノルウェー国籍 A. I. LANGFELDT & CO. 所属の MADRONO (5894 G. T) であった。六月十六日 MELBOURNE を出帆、Ballast condition の ABADAN 向航行中であつた。G. Gumpnich 艦長は無被害で拿捕した本船を有効に利用するべく PRISENOFFIZIERE W. SANDER 海軍中尉を本船日本廻航の指揮官に任命す。七月二十日 BATAVIA に到着、横浜港に八月五日安着す。その後 BOSSBACH と船名変更後、封鎖突破船として仏蘭西方面に向うべく十一月十二日神戸港を出港したが東印度洋上にて帰還命令を受け日本に再び帰港した。

一〇、INDUS 撃沈 (一〇—七—四二)

七月二十日早朝、どんよりした天候の中で、突然モダンな冷凍船を発見した。Schiff 10 から

直ちに停船命令が無線で打電されたが無視した許りでなく Poop Deck にある砲によって猛烈な抵抗を受けた（26度44分S 82度50分Oの地点）。本船は J. NOURSE & CO. 所属の英国船 INDUS (5187 G. T) の Schiff 10 の砲撃により火災を起こし大損傷を受け撃沈された。乗組員全員の中約半分が生き延びた事が後日判明した。

INDUS からの救助信号は MELBOURNE 並に KILINDI 無線局を通じて英国本土の無線通信基地に度々発信された事が確認されたが、英国当局は当時如何んともすること能はず、本船はインド洋の藻屑となったのである。

Schiff 10 は INDUS 撃沈後進路をNO方向にとり高速力で航走す。

INDUS を含めて Schiff 10 が拿捕又は撃沈した敵船の数は十隻に達し、戦果は総屯数五六、〇三七屯にも達した。

* * *

昭和十七年八月二十九日 Schiff 10 はインド洋上にて日本を出発して航走してきた封鎖突破船である僚船 TANNENFELS と海上で遭合す。（注 斉木、本船は昭和十七年六月二十五日から二十九日まで三菱横浜造船所で入渠修理工事施行す）。

補助巡洋艦にとって、その活動に最も必要な重油の欠乏が八月に入り Kap. G. Gumpich の心配の種となり、艦の行動半径を制限せざるを余儀なくされた。

艦長はしばらくの間燃料不足を解消出来る給油船の到着迄燃料節約を強いらざるを得ぬ事態に追いこまれてしまった。しかしながら最後は給油待の代りに、最高司令部からの特別命令を受取った。即ち Schiff 10 のその後の行動は日本海軍との協同作戦計画による制限を受けた。命令には本艦の主機オーバーホールの為急きよ日本に直行せよとの事が含まれていた。九月二十二日補助巡洋艦は SUNDA 海峡を通過、九月二十五日 BORNEO 島 BALIKPAPAN に到着す。九月二十九日迄その附近で活動を続け、同日 BALIKPAPAN に一旦帰港後十月九日横浜港着予定で同港を出港したが、横浜港外錨地に無事到着したのは十月十日であつた。

十一月末必要欠くべからざる主機の修理を完了す。(注 齊木、三菱横浜造船所に於ける入渠修理工事に就いては一切記載されていない)。十一月三十日朝 Schiff 10 は横浜港内埠頭で長期間弾薬積込中の UCKERMARK と隣り合せに並んで繫留された。UCKERMARK はその間に支那人労務者(注 齊木、拿捕船南京号の船員と思う)がタンククリーニングの仕事に従事していた。

午後一時二十分頃 UCKERMARK から突然激しい爆発が引続いて起きた。さしも頑丈な船もまたゞく間に見る影もなき姿に変貌、瞬時にして火焰に包まれてしまった。火災はたちまち燃料タンク一杯の重油や爆弾に燃え移り、Schiff 10 の爆発、徹底的破壊を引き起す原因となった。流出して燃えてる油はまたたく間に岸壁一帯に拡がり、隣接繫留中の日本の貨物船第三雲海丸や

拿捕船南京号（現 LEUTEN）迄がその被害を蒙った。

Gumpnich 艦長は水中に飛びこんだ多くの乗組員を救助した。しかしながら Schiff 10 と UCKERMARK は完全に破壊してしまった。LEUTEN 及び日本の貨物船も類焼沈没してしまった。

死傷者も非常に多く、第一に支那人労務者が UCKERMARK で五十三人、Schiff 10 で十三人も居り、この外多数の負傷者も輩出し、UCKERMARK の艦長も負傷した。

此の小冊子の著者（GERHARD HÜMMELCHEN）は本書の最後の章に、

『誠に不幸な事件の原因は不明である。推定される限り、UCKERMARK の Oil Tank のガス排気装置が不充分では無かったかと推測される公算大なり。外板鏽落しの作業中、その火花が洩れたガスに引火して、それにより爆発が起きたのではないかと推定される公算大である』と結んでいる。

* * *

因にドイツ船爆発事故に関しては、はからずも昭和五十九年六月五日、暁印書館発行の『ヨコハマ波止場懷古』に著者山田祐信氏（故人）が『ドイツ船爆発事故』と題して記述されていることを知った。当時の模様がよく描写しており、更に昭和四十九年三月発行の神奈川県警察史中巻及び神奈川県水上警察署発行の『水上警察のあゆみ』にも詳細記事のあることを知り驚いた。当



焼けただれた船と爆風で崩れた上屋（岡本氏撮影）

時は日本海軍の管理下にあった海域に起きた事件で、警察も直接現場調査出来ず、軍命令によりこの事件に関する一切の報道は禁止されたと記されている。

敵国諜報機関の仕業ではないかという見方も可成有力であったらしいが矢張り、タンク掃除の際スパークがガスに引火して爆発したのであらうという説が最も有力となり、警察部は海軍法務官に係記録をまとめて昭和十七年十二月三日捜査状況を説明の上引継ぎを行った。これが事件の概要であるとまとめている。

注 掲載の火災現場の写真は、編集者

山田瑛子様（著者未亡人）の御好意と御了解を得て掲載す。

※ ※ ※ ※

第十号艦上での打合せが午後一時半から三時に延期したことが私自身の運命を死から生に変えた Lucky Boy のストーリーという事になるが、Schiff 10 許りでなくドイツ商船隊の戦時中の活躍に及ばずながら尽力した一人であることを自負するものである。つたないドイツ語をしゃべり、数多くのドイツ商船隊の修理を担当、再び海洋に於ける活躍を期待して固い握手をして別れた艦長、船長、機関長、チーフメート、スパークキー（無線技師）等の顔が思い出される。

注 戦史研究局の海軍中佐 Fregatenskapitän Dr. Walle より頂いた手紙により、Kapitän zur See Günther Gumpnich は Schiff 10 が横浜港で爆発沈没後、他の補助巡洋艦 “Michel” の艦長に任命され、太平洋方面に出動活躍中、日本列島沖合五〇哩の地点に於て米潜水艦の魚雷攻撃を受け沈没し、艦長は艦と運命を共にした事を知る。（沈没場所、年月日不詳）

参考迄に三菱横浜造船所で幾多の修理を施行したドイツの艦船を列記して見る。

一九四一年（昭和十六年）……OSONO, RAKOTIS, MOSEL, BOGOTA, HAVELLAND.

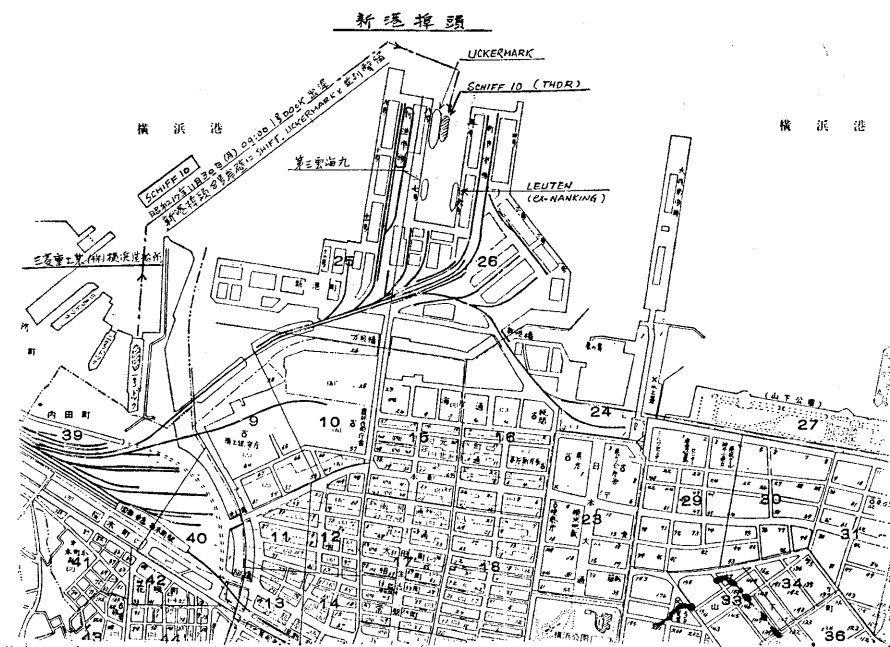
一九四二年（昭和十七年）……RAMSES, TANNENFELS, DRESDEN, REGENSBURG,

SCHIFF 10, MOSEL, RHAKOTIS, HOHENFRIEDBERG,

DOGERBANK.

一九四三年（昭和十八年）……BOGOTA, QUITO, HAVELLAND, RIO GRANDE,

HAVENSTEIN, WESSERLAND, BURGENTLAND.



横浜港新港埠頭

一九四四年（昭和十九年）……

QUITO, HAVELLAND.

爆発事故による火災の為新港埠頭で沈没したタンカー LUCKERMARK と LEUTEN（南京号）が記載されていないのは修理の為訪船した記憶が定かでない為である。

大東亜戦争秘話

— 聖断と戦争終結日 —

東京の私立芝中学校（現芝学園）卒業五十年記念文集が昭和五十五年十二月発行され、『とづくに』飛び歩る記という私の雑文が載っている。それに私は大東亜戦争秘話とし

て、太平洋戦争の終結を昭和二十年八月十日午前三時天皇自ら決定された事実、

(ON AUGUST 10, 1945, AT 0300 THE JAPANESE EMPEROR WITHOUT HIS

CABINET'S CONSENT, DECIDED TO END THE PACIFIC WAR)

を書き記した。

終戦後八月十五日を迎える毎に終戦何周年記念日を迎えて……戦歿者追悼式……複雑な気持ちを
いだく夏の或一日となっている。

戦争終結は八月十五日でなく八月十日であったという事実を一般国民は殆んど知らないのでは
なからうか。芝中同窓生ばかりでなく私は横浜高工卒業生一同にも之を知って貰うべく煙洲会五
〇〇回記念誌にと再びパンを走らせた次第である。

昭和五十年七月、芝中の同窓生等四人と共に私はサイパン島を訪れた。一週間滞在して帰国の
一日前テニアン島に足を延ばした。サイパン、テニアン両島には戦前南洋興発(株)が在り、小
田切進氏(昭和六年卒、応化九)、大山孝一君(昭和八年卒、機十一)、小西博俊君(昭和八年
卒、応化十一)、小林義正君(昭和九年卒、応化十二)等が勇躍渡航し活躍していた会社であっ
たが完全に壊滅、あとかたも無かった。親切な現地人運転手は我々を鮮かなブーゲンビリヤの花
咲く平和なテニアン島の各所を案内してくれた。

一番最後に案内された場所が旧米軍航空基地であった。(島の北部にあり、ここから見えるサ

イパン島の眺望は素晴らしかった。ジャングルの中にくっきりと、幅の広くて長い幾条の滑走路をジープは次々と横断して行き一番奥の広場で我々は下車した。目につくものは二つの石碑がポツンと離ればなれに立っていた。何のモニュメントかとひよっと目を向けた瞬間、驚いたことには、そこには No.1 BOMB LOADING PT と書かれた文字が目に入った。目は自然に全文を読み始めた、ぞくぞくする気持を押えて読み終ってから向側にある今一つの石碑に近づき、ゆつくりと全文を読んだ。それには No.2 BOMB LOADING PT と書かれていた。更に私を驚かした事は碑文の最後の字句、天皇陛下が昭和二十年八月十日午前三時太平洋戦争の終結を閣僚に相談することなく天皇自ら決定したと銘記されていたことである。

広島、長崎への原爆攻撃機発進基地が今自分が立っている此の場所であった事と、戦争の終結は天皇自ら決定された事実を始めて知ったその瞬間の驚き！

思はず目をつむり、誠に恐れ多い事ではあるが、天皇陛下の御苦衷、様々な事件、終戦当時の思い出が走馬灯の様に頭の中をぐるぐる廻り始めた。

静かなる太平洋に不気味な波が広がり始めている今日此頃の秋、^{とき}平和なテニアン島の旧航空基地が、核戦略基地化されぬ事を祈る事切なりと、私は『とつくに』飛び歩る記を書き終えたのである。



NO.1 BOMB LOADING PIT

ATOMIC BOMB LOADING PIT

FROM THIS LOADING PIT THE FIRST ATOMIC BOMB EVER TO BE USED IN COMBAT WAS LOADED ABOARD AB-29 AIRCRAFT AND DROPPED ON HIROSHIMA, JAPAN, AUGUST 6, 1945. THE BOMBER, PILOTED BY COLONEL PAUL W. TIBBETS, JR, USAAF, OF THE 509TH COMPOSITE GROUP, TWENTIETH AIRFORCE, UNITED STATES ARMY AIRFORCES, WAS LOADED LATE IN THE AFTERNOON OF AUGUST 5, 1945, AND AT 0245 THE FOLLOWING MORNING TOOK OFF ON ITS MISSION. CAPTAIN WILLIAM S. PARSONS USN WAS ABOARD AS WEAPONER.



NO.2 BOMB LOADING PIT

ATOMIC BOMB LOADING PIT

FROM THIS LOADING PIT THE SECOND ATOMIC BOMB EVER TO BE USED IN COMBAT WAS LOADED ABOARD AB-29 AIRCRAFT AND DROPPED ON NAGASAKI, JAPAN, AUGUST 9, 1945. THE BOMBER WAS PILOTTED BY MAJOR CHARLES W. SWEENEY USAAF OF THE 509TH COMPOSITE GROUP, TWENTIETH AIRFORCE, UNITED STATES ARMY AIRFORCES. ON AUGUST 10, 1945, AT 0300, THE JAPANESE EMPEROR WITHOUT HIS CABINET'S CONSENT, DECIDED TO END THE PACIFIC WAR.

学生時代大陸会々員でもあった私個人にとって煙洲会を通じて知り合う先輩、同輩、後輩の方々と『名教自然』の教えにとけこんで語り合う事の出来ることを喜ぶものであり、煙洲会の五〇〇会記念誌に敢えて寄稿した次第である。

（昭和六十年六月二十五日）

幼少の煙洲先生

応化昭十年 鈴 木 洋 二

煙洲さんの生家は愛媛県伊予三島市下柏町の平田部落で、父礼作、母スガの間に、あさ子、達治、常治、棟一、盛、一女四男の長男として明治四年九月十一日に生れた。姉あさ子が塾に行く年頃になり隣の部落の大御堂（オオミド）の塾に通った。後に常盤小学校となり今では部落の公会堂になっている。あさ子のすぐ下の達治はまだ塾に入るに早いが行きたいといって聞かないので姉のそばで静かにしているならつれて行ってやるということ二人座れる座机をつくってもらい塾通いをした。塾では宿題が出るらしい。帰って父礼作に聞くがよくわからない、するとそばで聞いているだけの達治は、僕がやってやるといって代りに宿題をやってやった。あさ子が父に宿題を教えてもらおうとすると、それは達治に聞けといっていた。おそらく姉六、七歳、達治

四、五歳位だったと思われる。やがて近くに住んでいた檜垣先生について漢詩をならっている。塾に入る年頃になった頃、近所の友人鈴木熊太と二人で十四軒はなれている土居村関川にある尾崎塾に行くことになった。机二つを馬につみ、出発となると熊太は行かないと言いだし馬に乗らないので、一人で出かけた塾は住み込みであった。二、三日おくれて熊太がやって来た。当時塾では読み書き算盤が主で、毎日「子曰」（子のたまわく）と声を出して読んでいた。毎日「子曰」ばかり読んでいるのが不満で、とうとう塾をぬけ出し土居村津根の母の実家に立ち寄った、そこで星川唯八爺さんにすぐ叱られ、とうとう家に入れてくれなく歩いて家に帰った。家は東本願寺の宗派であるので京都の東本願寺の塾に入ることにし京都の下宿から塾に通った。しかしこの塾でも「子曰」を教えるので通うことをきらい、同志社英学校に入学した。ところが本願寺の塾に入らず洋式の学校に入るような者は家に置くわけにはいかないと下宿をおいだされてしまった。姉あさ子が結婚適齢期になり、愛媛県新居浜の隣り村中萩の鶴岡家に嫁ぎ女の子一人生れたが、事情があり子供を残して家に帰って来た。鶴岡家はその後銅山川（吉野川支流）の大水害の時土砂崩れに会い一家全滅している。両親はあさ子の心の傷をいやす意味もあり、弟が京都同志社に行っていたので京都土手町の女学校に入学させた。在学中人のすすめで香川県三豊郡栗井村の眼科医行天良夫との縁がととのい後妻となった、先妻には女の子秀子がいた、あさ子には子供がなく三十六歳の若さでなくなっている。

同志社を出て最初の就職先はフェリス女学院で英語の履歴書を提出したが、まずい英語だったのだろう不採用になった。このことが私学に進まず官学に進んだきっかけであると自ら書き残している。次に選んだのが熊本第五高等学校だったが、再び勉強を志し東京帝国大学応用化学を受験した。応用化学科は三人入学するだけであった。試験の時イオン化について質問されたが、ハリス理科学校や熊本で原書を通じて勉強していたのでイオンのことについて話をしたが質問した先生より自分の方がよく知っていた。こんなことで入学を許可されたようである。応用化学を選んだ動機もこのへんにあったようだ。書をよくし自ら漢詩をつくったのは塾通いの時の読み書きのたまものと思われる。

農家である両親は、達治、棟一（帝大卒業後、左右田家の養子となり後左右田銀行の頭取となる）を共に東京帝大に進め、更に姉あさ子も京都女学校に入学させるということは当時としては相当な負担だっただろう。両親のよき理解によるものである。父礼作七十二歳、母スガ七十三歳でなくなった。当時としては長命といえる。

あとがき。同志社以後のことは自ら書き残しているが幼少の記録はなく。郷里にも子供の頃を知る人はいない。生家を継いだ常治の長男鈴木八十二（八十二歳）より取材した。

六十年四月二十九日

忘れ得ぬお言葉と私

——五つの逢（おい）の坂——

機械昭和十年 荒 井 文 治

名教自然——先生の思い出——と題する書籍が昭和三十七年八月二十九日に煙洲会より発行され、数々の恩師・先輩・後輩に伍して私も同書二二六～二四〇頁に涉り“回想”と題する小稿を載せて頂いた。

今回はその時に記さなかったことなどを思い出し乍ら記述してみたい。

私は昭和五年四月十日の入学であつたが二年生の暮に風邪がなかなか直らなかつたので校医の加藤医博の診察を受けたところ、X線を見せられ肺門淋巴腺炎と神経衰弱の診断で、一年間休むよう申し渡された。この年は春から私の家に不幸が続き一年間に三回もお葬式（祖父母と父、母は既に五年前に死んでいた）を出した年の冬であつた。私はこの苦痛を忘れようと二カ月間の夏季休暇を殆んど夏季実習生として家を空けた。前半は前年の春開通（黄金町―浦賀間、標準軌間、一、五〇〇V）したばかりの湘南電鉄（現在京浜急行に吸収）にスエーデン製のSKFのスフェリカル・ローラ・ベアリングと複電圧（一、五〇〇、六〇〇V両用）の電気回路図の勉強

を、後半は当時国産電気機関車を製作する参考に輸入電気機関車十六種(一)が集りテストされていない。この祟(たたり)であつたのかも知れない。

丁度一年休み次の年度の人達の中に入り三学期出たものの、どうも未だ調子が以前のようではないので再度校医の診断を受けたところ、*“未だ出るのは早いようだな。あんたは早産れで皆より若いんだから焦ることはないよ。もう一年休み給え!”*と宣告され、再度休学届を教務課に提出し何とでもなれと居直り、気楽に好きなことをして過すことにした。

当時私の回りでは多くの若い人達が次々とテーベ(ルンゲンツベルクローゼ・肺結核)で世を去って行つた。妹の女学校の同期生の一人で折にふれ私の家によく現れた眺めの良いMも卒業すると間もなくあっさり逝ってしまった。大伯父の一人に私は*“看護婦さんでも嫁にもらつて学校を止めてしまえ”*とも云われた記憶がある。この間回復に向つてからは別の叔父からプレモと云うバッシュロム・テッサー(F・四・五、アメリカ製)付のフィルムバック専用、大名刺版のカメラを頂いた(このカメラもテーベで死んだ別の叔父のものであつた)。これで写真を撮ること勉強し自ら現象・焼付の技術を習得し一〇〇gの上皿天秤を買い込んで現象液を調合する迄になった。狙いは蒸気機関車であつた。それも新製機ではなく間もなくスクラップになるであろう休車・廃車群を狙つた。家から散歩がてらに行ける半日程度の範囲の機関庫や操車場の片隅に放

置され、やがて姿を消す機関車達に対する同情かもしれないが……三脚を据え光線状態を考えその駆動機構が明細に判る鮮鋭な写真の数々を撮りまくった。とに角五十三年前の話である。

この休学中に煙洲先生の名において教務課の紫の袴のオバサン（佐藤さん？）が初夏のさわやかな日にわざわざ家迄見舞頂いたことはまことに感激であった。

さて次の期の年度の学友とは丸一年間机を並べ無事に卒業することができた。そのようなわけで昭和八、九、十と三期に渉る学友が増え夫々の期からお誘いを頂く次第でまことに有難いことである。だから夫々の期により極めて顕著な特性があることも判った。

最初の同期の一学期には鈴木校長が修身を担当され、先生ご自身から始まって各教官の方々を学校便覧に従って一人一人の紹介があり、これが終ると先生の考えて居られる自由教育・三無主義を説かれた。特に私には無試験と無賞罰が大へん印象的であった。

ところが現実には吾が機械工学科の教授諸公はこの煙洲先生の無試験に反し、殆んど二時間授業の後半は毎回ドイツ半紙の半裁を二つ折りにした白紙が配られ、テストと称し問題が提出されイジメられモマれた。之に対し学友一同相談の上、代表幾人かで煙洲先生の六ッ川のお宅へ陳上に伺ったこともあった。私は話すことが下手であると自認していたので何うことをご遠慮してしまつた。今にして思えば直接伺えなかったことがまことに残念であった。陳上団が帰つて来て一同で聞いた。その話によれば、この時先生少しも騒がず、"ワシは各科の事務取扱（煙洲先生は

ボス化すると云うお考えで科長と云う称号を大へん嫌われていた）に任せてある以上ワシからとや角云う必要はない”と答へられ、一同期待に反し大へん落胆したことを憶えている。

当時は軍事教練が年毎に、盛んになり毎年査閲と称する日があった。丸一日つぶした。軍の上層部の将校のみならず何人かの宮様も来校された。

煙洲先生は水戸黄門ばりの背丈より長い竹の杖を立て査閲当日は終始見守られて居た。この期の配属将校は吉野中佐で大へん頭脳明晰な人であった。助手はコロッケ（本名は大木波之輔）特務曹長であった。

ある晴れた初秋の一日全科（当時は機・応・電・建・造の五科）合同軍教の時間があり、私が中隊長に当てられ指揮をとることを命ぜられた。私は若さの勢で、通る声（振動数の多い声）の号令で中隊を指揮刀を振り思う存分手足のように動かしてみた。終了後の講評で吉野中佐、コロッケ特務曹長から激賞され面目を施した。

もしこの冬、休学しなかったら翌新春の査閲の時、中隊長を務めていたかも知れない。当時の軍事教練は私にとって半強制的に総てを忘れ三昧境に入らせてくれた。

私の目出度い卒業式の当日すなわち昭和十年三月十五日、富山保校長の式辞の後で煙洲先生特有の語調で私達卒業生を送る長いお話があった。この中で今に至る迄はつきりと憶えていることで強烈に印象に残っているお話は智能長けた明智光秀のことであった。彼が逢おひの坂に立って西す

るか東するか迷った末、東に向い本能寺に泊っていた主人の信長を殺してしまいい後々迄主殺しの汚名を受けたお話であった。“皆シャンも一生の中に何度か、少くとも一回は必ず光秀のように逢の坂に立つことがあると思われマシユ。この時にシユ、皆シャンは英知と勇氣を持って適切な判断を下し、くれぐれも道を誤らぬよう熟慮断行して頂きたい。あく迄思い邪なしで判断することシユ”と結ばれた。

今省みると私には高低の差こそあれ五つの逢の坂に遭ったように考える。その一は敗戦の五年前の春、私は保健共済班長を命ぜられていた。当時この班に属する各科の学生十名程を動員し受験生の宿泊その他一切の世話をした。その頃高商で同じく保健共済班長をされていた南種（なぐさ）教授の来訪を受けた。それは私が全国から参集する受験生の捌き^{さば}ぶりを見聞に來られたのであった。翌年退官する同教授の後任として助教の私を商品学担当の教授に迎えたいと云う話を持って來られた。私は物理学の研究を続けたいと云う理由で富山校長に相談する迄もなく折角の昇任の機会を見送り、あっさりご辞退した。このことは私にとっていわゆる出世を大へん遅らせる結果とはなったものの、今にして思えば逢の坂の下る方向を誤らなかつたと確信する。

その二。昭和十八年の夏、朝比奈貞一理博が池内本教授室^{はじめ}に突然來訪された。目的は物理学教室で助教をしている私を上野の国立科学博物館の機械系担当の学芸官補——後に技官——にスカウトに來られたのであった。池内理博（昭和三年本校で最初に“短波長の均質X線により空気

中に生ずる β 線について”の論文で学位を受けた教授）は“富山校長に相談して見給え”と云われた後、“君はここに居るより朝比奈さんの許へ行った方が良いかも知れん”とも漏らされた。その頃池内教授は体調を崩され休講がちで曾ての元氣は全く無くなっていた。折にふれ私がピンチヒッターを勤めた。先生は天命を知り我なき後を考えていたらしい。富山校長と相談の結果は兼務と決り一週間の中、土曜一日だけ上野へ通うことになった。この勤務は敗戦を挟んで五年間続き国家公務員法が出るに及んで兼務を解いて頂いた。

朝比奈貞一先生は煙洲先生を尊敬して居られ私のことに關してもお手紙を差し上げられたことを先生ご自身から伺った。

私は週一回とは申せこの五カ年間もその後も研究を効率よく進めることにつき啓発された。

私は在学中も卒業後も煙洲先生のお宅に伺ったことは一度も無かった。敗戦近くなって私の勤務する物理学教室には大變動があった。

煙洲先生の退官と同時に講師となられた池内本博士は昭和二十年五月ご郷里の高田の生家に疎開され、幼な友達と還暦を祝い敗戦の晩秋逝去された。私は無蓋貨車で高田のお宅へ泊りがけでお焼香に参上した。理博木戸潔教授は都立機械工専の校長となって転出されこの後任に室蘭工専からF教授が着任された。

加藤述之教授は私がお手伝いして戦時研究（金属磨耗に関する研究）なるものを進めて居たも

の元気が無くなり、敗戦後間もなくどのような経緯か水産大に転出された。

東海理科専門（東海大の前身）からT教授が着任され、敗戦で潰れた航空工学科からはK助教授が物理学教室に移られた。

さて之からK氏と私とは毎日のように室蘭から来たF教授にイジメぬかれた。ここに記すことすら恥かしいようなお説教が毎日のように二人を並べて続けられ、その上あらぬ噂を校内に撒き散らされた。その一部は二人ともなまけもので仕事はしないし、毎日遅く出勤し定刻には帰ってしまうといったこと。この事実には私に目をかけて下さる他科の教授の何人かから逆に真偽を問われたことから判明した。私は全く憤懣やるかたなかった。忍び難きを忍べとはこのようなことかとも思った。しかし守衛の方達だけは私が毎朝七時五十分に出勤し一括した教室の鍵を持って行く事実は知っていた筈である。

私は将に三回目の逢の坂に立ったのである。

私は煙洲先生のお宅に始めて参上しご意見を拝聴しようと思った。それは私の之から始めようとする研究テーマに関することであつた。私は池内先生の遺された高電圧装置と休学中に家の近くの写真館で修得した写真の技術とを生かし、放電図形（電気映像——リヒテンベルク・マーク）の研究が進めたかった。之に対し放電の研究は泥沼のようなもの、きりが無いから止めることだ（私に云わせれば判らないことだらけでまさに宝の山である）。そんな研究を始めるよりオレの研

究の試験試料として純鉄の単結晶を造れと命ずるのである。私は池内教授の助手ではあったがF教授の助手ではない。戦時中はいざ知らず研究の自由を認めて頂こうと思い煙洲先生宅を訪れ、いきさつを話しご意見を伺った。

先生は直ちに申された。『学問は好んでなすべきもの、強制されてなすべきものではないのデシ』。孔子が愛弟子の顔回に云った言を繰り返し申され、私の計画を支持して下さった。私の決心は定まった。

当時本館正面三Fの中央、物理の高電圧実験室には池内先生フランス留学土産のPari Gaiffe Gallot et Pilon 社製（大震災後に横浜に陸上）D・C・一二五〇〇〇Vの短波X線発生電源用装置があったが、戦時中東芝の研究室の疎開で最も広いこの実験室が当てられ高電圧装置は解体され一部は四Fの廊下へ残りは隅に片寄せられていた。敗戦後数日で東芝さんは引き上げこの室は元に戻ったが機器はばらばらであった。食料事情の極めて悪い中で私は、はいずるようにして先ずこの配置・組立・配線から始めた。夏休中で電気工学科の学生K君は私の為、好意的にパンツ一丁で手伝ってくれた。廊下に荷造りした四個のケノトロン（高電圧用整流管）が戦後のドサクサで一個盗まれていたことが判り、結局翌年の夏片肺の一二五〇〇〇Vで稼動できる段階になった。ご案内もしなかったのだが丁度この頃煙洲先生は例の長い竹の杖について本館正面三Fの高電圧実験室迄お運び下された。私はD・C・一二五〇〇〇Vの空間火花放電を電極の形による

変化、衝撃放電、沿面コロナ、更に竜がのた打ち回るような沿面ブラッシュ放電の極性効果やフューズがコンデンサバンクに蓄えた電気エネルギーの一発の衝撃放電で一瞬にして轟音と共に気化する実験など、すざまじい所をお目につけた。先生は三時間半位も面白そうに見て帰られた。その翌年秋（昭和二十四年十月三十一日）、私は初めて日本物理学会（東大物理学教室）で「電気映像に及ぼす湿度効果」と題する研究発表をした。翌日からF教授の私に対する表面的態度は掌を反す如く変った。しかし陰に籠ったいやがらせは彼が肺癌で死ぬ一年前くらい迄続いた。

敗戦後三年目煙洲先生のご来訪を高電圧実験室に受けた。その内容は日本赤十字の根岸にある病院附属の高等看護学院（旧制高等女学校卒業生対象）の物理の講師の依頼であった。先生が淡々と申すのに、うちの息子にと云う話なのだがうちの息子は子女を害する恐れがあるので代りにアンタに勤めてもらえないかと申された。恐縮してこのお話をお受けした。そして女性の最も嫌いな科目を週二回二時間ずつ、研究実験と本務の合間を縫い私独特の講義で責務を果たした。二年後厚生省から新制に切り換えられ物理を講ずる必要が無くなる迄続いた。

この間、煙洲先生は私に森鷗外全集中「舞姫」、「キタ・セクスアリス」などの入っている巻を貸与され、実験の合間に読み給えと云われた。この頃から新春のお年始には毎年、その間も論文の別刷が出来る度に先生宅に磚茶（こい茶）碾茶（うす茶）を持って伺い、点てて差し上げることが恒例となった。その時「若い人は経験がないことが素晴らしい。人間は齢を重ねると経験に捉

われ、と角思い切ったことができなくなるものじゃ”とよく云われた。今にして思えばまことに進歩的なお考えと云えよう。先生とサシの煙洲会を何十回か持つことが出来た。

電気映像に関する十五篇の論文がまとまり北大理学部物理学教室に学位論文として提出した。北大を選んだ理由は旧制帝大の中で最も自由な空気に満ちて居たことを煙洲先生から兼々承わっていたこと、私が物理学学会で研究発表の折何時も最前列に席をとられて私の報告を聞かれ面白がって検討して下された中谷宇吉郎教授が居られたこと、私の隣の部屋に僅か四年間ではあったが北大から見えられた理博のM教授（F教授とは対象的に底ぬけに人柄の良い方）が居られて、私もM教授の研究のお手伝をしたり逆に私の研究の力になって下され、再び北大に戻られ同学部に居られたことに因った。タイプ（英文）と手書きの線図、カラープリント（放電図形…リヒテンベルク・フィギュア）貼符の生の正論文と之に続く既に印刷発表済みの副論文十四篇とを二組（一組は文部省に行く）合せて三キログラムを杉田郵便局から書留便で郵送した。これは昭和三十五年の春であった。それから何と二年がかりで之等の論文に対する受理の通知を受け、その後二カ月で北大クラーク会館二Fの一室で昭和三十七年三月五日付で北大第四四五九号の学位記を当時の杉野目学長から頂いた。

惜しいことに郵送してから受理の通知を受ける四カ月前に先生は逝かれた。

先生の代りに真っ先に喜んで下されたのは私達の電気工学及実験を担当された竹内強一郎教授

（九十二歳でご健在でワープロを操り今でも手紙を折にふれて下される）であり、早速お祝いにシルクホテルのデイナーをご馳走になった。

この頃第四の逢の坂が現れた。当時（昭和三十五年頃）我が国大の教育学部には中学校の技術科の教師を養生する科は無かった。他の県の国立大学には既に皆設置されていたのだが……。之には根深い理由があるのだが省略する。文部省からの要請で本学でも設けざるを得なくなり、私が最適任であると云う教授会の結論でその創設を依頼された。長年住み馴れた物理学教室には名残り惜しいものがあつたが、今迄私の使つて居た実験研究用機器を全部持つて行く条件で当時の学芸学部工学教室（現教育学部技術科教室）を建設することをお引受けする氣になつた。場所は保土ヶ谷の権太坂（旧東海道を京都へ上つて行く折の一回目の難所と云われた由）上にある農学教室（旧神奈川県立青年師範学校が平塚に在り空襲で焼失、同所に在つた拓南塾の跡に移転して来たと聞く）の一室が与えられたが、機器を置くには余りに狭く半年後別棟に二重窓の実験室を私の要求通り改築、移転した。

弘明寺の教室に比べるとまるで陸の孤島で京急・市電・市バスと乗り継ぎ横浜市内で片道一時間半もかかる不便極まりない所であつた。近くには食堂もなく毎朝弁当を下げて通つた。初めの一年間は島流しにあつた感じでまことに情けなかつた。しかし構内は四〇〇〇坪もあり、晴れた日には富士も望め（北斎の富嶽三十六景、東海道程ヶ谷——の松並木越しの富士の見える場所

の辺りらしい)、麦島あり牛も居り、雑木林に囲まれ春は鶯に始まり、天高く雲雀の囀りが聞こえて来る横浜市内とは思えぬ別天地であった。

その中に別荘にでも行く気になり不便だが通うことが余り苦にならなくなった。

私は教育学部工学教室の主任教官として退官する年(昭和五十三年四月一日)迄十八年間勤務した。

しかしこの間、私達の教室はこの権太坂(十年間)から清水ヶ丘(旧高商の西側、五年間)、さらに今の常盤台へと三回引越しをした。これも陸の弧島で定年退官迄三年間通い続けた。学位を頂いた後もこの道楽研究は続き更に十五篇の論文を発表することができた。これらは殆んど国際版のため、毎回今も健在の竹内秀雄教授に目を通して頂き完璧を期した。全く有難いことと先生の顔を見る度に感謝の心を忘れずに居る。

其の五。定年退官とその後。

私達の大学はその年の三月末日迄に満六十五歳を迎える人が四月一日付で退官する定めとなっている。従って私の場合は昭和五十三年四月一日であった。それから二年後の五十五年八月末、大病(胆のう炎から肝臓膿瘍^{のうよう}を起し敗血症になった)で死にかかったものの運強く七十日、横浜市大附属病院に入院し挽回できた。運が強いというか、幸と云うものである。

そこで煙洲先生がよく口にされた“詩三〇〇〇、一言以て之をおおえば思い邪なし”の言を実

行しようと考えた。四年前（昭和五十六年）の秋から——之は私が在官中、生前のK前会長から既に依頼されていたことを実行に移すことにした。すなわち横浜発明振興会の顧問（名前だけでなく）として毎月日曜発明教室の開かれる折、発明の内容の level up を狙い——電気・機械に関する基礎物理の講義を第二日曜の午後一時間半程度横浜朝日会館六Fの中小企業センターの会議室で始めた。既に五十回を数えた。毎回五十～百名の発明家の皆さん（横浜市内だけでなく県下、隣県の方々も）が参会され喜んで聞いて頂いている。勿論煙洲先生の思想に添い社会奉仕の精神に徹しようと思う考えで一切謝金は頂かないことにしている。この講義は大学の学生に対する講義とは趣を変え、いささかなりと発明のお役に立てばと考え、私の全智全能を傾け枝から枝に花を咲かせ、私自身も毎回大へん愉快に楽しみ乍ら進めている。

私は定年退官の逢の坂で私大の教授に納まらず全く幸であったと思っている。在宅の折は大学当時に使い古した白衣を着用し、家でも出来るささやかな研究実験を進めている。この楽しみは力果てる迄続けたい。

昭和六十年の五月二十日、八時四十五分から九時迄の僅か十五分間であったがNHKの三Cテレビコラムで、芳賀緩氏の“人と思想・時代への座標”の放映を見た。話は「我が青春に悔なし」と題した映画（私の卒業の前後の頃か）が、京大の滝川事件＋フィクションであることから始まった。之は当時京大法学部の滝川教授が理由も示されず休職となり、これに端を発し同学部

の全教授も辞表を提出した事件であった。私にも記憶は蘇^{あとかき}えった。これは同教授著の「刑法読本」が理由も示されず発禁になったことであつた。最近この複製版が出てその後書に発禁になった理由の推測を同氏が記していることを紹介された。それは、

一、刑罰のない社会

二、姦通罪の不平等

三、思想犯の特殊性

を論じたことがひっかつたらしいと述べ、学問・研究の自由を訴え、美濃部達吉博士の天皇機関説、河合栄治郎教授の“唯一筋の路”で話を結んだ。

私は煙洲先生の思想に通ずるもの、いや先生の方が早い時期でこれらを実行していたと感じた。

煙洲先生が学問・研究の自由を説かれ、私に研究テーマを強制したF教授にワシからも学問・研究の自由を話してみると云われた言葉は今でも旅先で夢に見るくらい忘れられない。

(注)

(一)

アメリカ製	ED 10、11、14、53、EF 51
イギリス製	ED 13、50、51、52、EF 50
スイス製	ED 12、54、56

ドイツ製…ED 57

国産…ED 15

(二) 当時私が撮影したSL、EL（例えば碓水峠で使ったSL、EL〔国鉄最初〕は、今も国鉄その他からネガを借りに来る結果となった。

昭和六十年六月三十日記

（理博 元横浜国大教授）

煙洲先生退任式の思い出

機械昭和十年

杉 井 忠 義

昭和十年二月十四日、午前十一時より講堂において全学生に対して、「学校長退任の経緯を語る」—ドラマが演出された。

昭和十年三月の卒業式を間近にして突如、鈴木校長は退任の経緯をつぶさに語られ、「私は爰に辞任しました。」これは誠に悲痛な訣別の御言葉でした。

「私が文部省に辞表を提出して以来今日まで二旬以上を経過していますが、この間、校内の職

員にも又学生諸君にも些かも感知せられることなく過して参りまして、その間予定の工作を疾風の如く断行し得たのであります。即ち昔の兵法が教える疾きこと風の如しの一句を実行したのであります。諸君は私のこの心事を御賢察願って、私のとった行動の全部をどうか無条件で御賛成願いたい。そうして御支持願ひ度いのであります。そうしてその全校の態度を静かなること林の如しと言ふ対句によつて処置して頂き度いのであります。

疾きこと風の如しと言う句は私が実行しました。従つてその後句である静かなること林の如しの一句は諸君によつて実行して戴き度い。これが私の願ひであります。」（煙洲残筆、別れの言葉より）

先生は出所進退について身をもつて教えられたのである。

日頃の薫陶を受けて誰よりも尊敬し、御慕ひしている全学生に向つて、先生は自ら訣別を告げられたのである。講堂に溢れん許りの学生達は唯、啞然として金縛りにあつて居るようで異様な静けさと暗涙にむせぶ一時が続いた。そうして遂に声を出して泣く者が出て来た。すると学生の一人が演壇に駆け上り、鈴木校長先生の今日の御退任は残念で堪りません。残念でどうしようもない悲しみで一杯です。吾々の力でせめて三月の卒業式までも御願ひしてはどうかと惜別の非情を訴えた。口火が切られると壇上には我先に次々と入れ替り、立ち替り先生との御別れを惜しむ心情を訴えて声涙にむせぶ熱い情景がকাশし出された。

杉井は三番目に壇上に立ち、先生と御別れしなければならぬのは断腸の思いです。さりとて何時かは訣別の時が来る、形あるものは何時か毀れる時が来る。諸君、泣けるだけ泣いて先生との御別れを惜しもうと訴えた。その後、ポンさん（我々の敬愛する物理の池内本教授）が僕の所に歩み寄って来られ、杉井、君は僕が言い度かったことをよく言ってくれたと言って下さった事を忘れる事は出来ない。

尚私は第四三八回煙洲会（昭和五十五年三月二十六日）にスピーカーとしてソーラーハウスの我が家についてお話を致しました。

当時第二オイルショックで国が率先して省エネ対策に懸命に取り組んでいる時だったので多くの煙洲会員の方々に私の話を聞いて頂き、スピーチの終わった後も熱心に御質問を受けました。あれから五年、私がソーラーハウスを建ててから八年が過ぎました。現在吾が家のソーラーシステムは故障もなく、毎日自働運転をつづけており、快適に住んで居ります。石油事情は当時より十五%も安くなり、買手市場となって居ますが、ソーラーハウスは家庭エネルギーの六十〜七十%を無償の太陽エネルギーで賄い、クリーンエネルギーで安全且つ快適に暮せる事になりました。去る三月、横浜高工弓道部OB会（弘陵弓友会）十三名が三泊四日の南九州宮崎大会を開催、その機会に杉井ソーラーハウスを訪ねて頂きました。そしてソーラーハウスが快適な住居であることを心から喜んで頂きました。

私はソーラーハウスは二十一世紀の住宅だと思っています。

昭和一〇年卒業生は

機械昭十年 犬 塚 勝

私は昭和一〇年の卒業で、今年が丁度五〇周年に当る目出たい年である。この年の卒業生は旧高工と新高工との丁度端境期とも言える時期に尊い三カ年を過したように私には思えてならない。その最も大きな変化は校長の更迭である。

昭和一〇年一月の半を過ぎた或る日、突然全生徒の講堂への集合が伝えられた。我々のクラスは全員就職も決り、気持の上ではノンビリしていたが、全員真面目に授業を受けており、遠慮なくテストも行われていた。そんな折の不意の召集に皆は訝り乍ら集合した。

演壇に立たれた鈴木校長の姿はいつもの姿と少しも変りなく、温顔を我々に向けておられたが、次の言葉が我々の耳に飛び込み一瞬その耳を疑った。即ち「ワシヤ今日で校長を辞めることにした。辞表はこの内ポケットに入っている。明日文部省へ提出することになっている。」それから約一時間に亘り男子の出所進退の重要性、後任者推薦の意義等について懇々と説かれ、最後に

富山先生を次期校長に推すことを告げ、先生の履歴・功績等を述べられたように記憶している。これが初代校長鈴木煙洲先生の現役としての最後の講義であった。

当然我々が卒業式で授与された卒業証書は富山先生の御名前による初年度のものである。我々は完全に三カ年間煙洲先生の薫陶を受け乍ら、卒業直前の更迭により先生のお名前前の証書を頂けず、機械科の私にとっては全然お名前もお顔も知らず、講演の一片も伺ったことのない方の証書を頂いたことは、富山先生には誠に申し訳ありませんが、私にとっては今でも残念に思っています。煙洲先生が辞職を一カ月延ばして我々を卒業させてからにして頂きたかったと年をとるにつれてその念が強まることを抑えることができません。（この時期に先生が辞表を提出された理由は縷々伺っており、承知しています。）

我々が入学した昭和七年は大震災後のバラックの校舎で今思い出すと実に懐しい建物でした。授業が始り、点呼が終わった直後窓から飛び出してエスケープ出来たのもあの建物だったからです。一年間此処で勉強している間に槌音も高く機械・応化の新館が完成し、二年からそちらへ移り、専門学科は殆んど新館で受け、製図室も新館三階でした。一般学科は従来通り旧館で行われ、煙洲先生の講義もあの講堂で受けました。従って旧館の全貌を知る最後の生徒であり、新館の誕生を迎えた最初の生徒でもあるわけです。

私達の入学試験は全員口頭試問でした。あの当時公私立の専門学校以上の学校で全員口頭試問

といった学校は皆無だったと思う。それだけでも極めてユニークな存在だったと言えよう。最初の山下教授の授業の折に先生はこんなことを言われた。「口頭試問は試験官にとっては実に大変な難行で、答案を見る方がずっと楽だ。然し此の方法で質問し、知らないことは知らないでよいが、知っていることはトコトン迄追求されても答えられる生徒を入学させることにしている。この点が技術者には是非必要な条件である。その意味でこの入試法は最適である。筆記試験では山が当って合格といった危険がある」とのことでした。それがどういう理由か知らないが翌八年の入試から口頭試問と筆記試験の自由選択に変わった。これらも新しい高工への転換の一つである。

機械科の遠藤・山下両教授は煙洲先生の辞任と同時に退官され、新学期からは講師になられたように記憶しているので両先生から教授としての授業を受けたのは我々が最後であり、機械科もこの時期から次の時代へ移ることになった。

古い横浜高工は煙洲先生の御努力によって関係部門を説き伏せて、先生の人格や考え方を校風として反映させて、兎に角一風変った学校を造り上げた。それは今から見ても最も新しい真の教育ではなかったか。然し我々の卒業後の新しい高工は戦争色の強まりと共に官の統制力が一段と強化され、徐々に画的にならざるを得なくなったと思う。特に戦後の大学は官の管理体制下にすっぱり入り、何処の学校も殆んど何の特色ない皆同じ様な大学になってしまった。地下の煙洲

先生は葉巻をくゆらせ乍らどんなお顔でこれを見ていただけることであらうか。

名教自然と自由主義

機械昭和十年 池 本 時 三

五十九年六月二十八日、テレビ朝日で夜十時から一時間にわたり松本清張事件にせまる「天国に結ぶ恋、坂田山心中事件」(消えた美女の心中死体◇死にあこがれる若ものたち、ほか)と題してテレビ放映された。昭和七年四月、私が入学して一箇月後の五月だったと記憶している。この事件を煙洲先生が教育者として当時の在校生にいかに教えられたか、回想して見たい。

中村康治先生は「名教自然と教養論」⁽¹⁾の中でつぎのように述べておられる。

名教自然は煙洲先生の教育哲学の要約でありましょう。その意は? という問いに対して『曰く云い難し』と斎藤輝治先生は答えられました。しかし「煙洲漫筆」その他の文集に煙洲先生自から、くりかえしそのお考えを述べていられます。それらを読みますと先生の哲学は分るように思えます。が、これを筋を立てて説明せよということになりますと『曰く云い難し』ということ

になるのでしょうか。当時のすぐれた学生群に対してこの哲学にもとづく具体的なものが三無主義の実行であったと思われます。

杉野利之氏（ソーダ工業会参与理事、工学博士）は、「ソーダと塩素」の中で「名教自然と蒙古天然曹達の探險（日本ソーダ工業百年こぼれ話）」と題して述べておられる。私は杉野先生の左記の一文を読んで「名教自然」の出所を知り、（故）斎藤先生の「曰く云い難し」が分ったような気がするので、本稿を取りまとめた次第である。文献②の「自由主義」と題する章に、左記の一文がある。

横浜高等工業学校は現横浜国立大学工学部である。その横浜高工は横浜市中区（現・南区）大岡町にあった。その門（といっても扉もなく、守衛もいなかった）を入ると、「名教自然」という大きな石碑が立っていた。この文句は、横井小楠の詩句「靈智神覚湧如泉、不用作為付自然」から生まれたとする初代校長鈴木達治の作語であり、後に多くの人が、自由主義の教育を表わすものと換言し、また、立派な教えは自然であるとも解釈するようになった。

とまれ、その鈴木達治は、大正中期の画一主義、形式主義の時代に、生徒（学生、今日の大学生ではない）を飽くまで一個の人格と見て、その自己完成を助けるのが教育であるという信念か

ら、いわゆる「三無主義」を実践した。すなわち、無試験、無採点、無賞罰である。「三無主義」とは、一見放任主義のように見え、その弊害を案ずる人もあったが、決してそうではなく、教育者は子供を育てる親の気持で、生徒と一体となって瞬時も目を離さない周到な注意が必要である。教育者はたえず生徒に目を配っていて、学校におろうが他に出向いていようが絶えず生徒と共にある心構えでなくてはならぬ——というのである。

しかし、この「三無主義」は、大正九年（一九二〇）同校創立のときから、時の文部大臣中橋徳五郎の黙認を得て、以来約十五年間公然かつ忠実に実践されてきた。「三無主義」は、その本領として授業中禁煙・長髪禁止・学生劇禁止といった一切の禁止令は出さず、講堂に御真影も勅語も奉戴せず、三大節の祝賀式も行わなかったが、文部省の圧迫も社会の指弾も受けることがなかったのは、鈴木教育者としての人徳と「名教自然」という教育の真髓がしからしめたのであろう。

さて、上述のように三無主義の理念は、鈴木教育者としての集積に基づくもので、例えば、その一つである無賞罰にしても、その来るところ「一旦收容した学生生徒は、学校が総ての責任を持つだけの覚悟をしなければならない」といい、『汝等のうち、罪なき者先ず石を以て打て』としている。一例を挙げればつぎのようなことがあった。鈴木は、第二次大戦中、憂国の情に駆られて、戦意の向上と生産の増強を目的とした必勝懇談会なるものをつくり、自ら会長となって

これを総括した。ところが戦局非にして終戦となった日に、必勝懇談会の会員が、隊をなして、首相官邸を襲ったが目的を果さず、鈴木首相の私邸と平沼枢密院議長の私宅を焼き払うという事件がおきた。鈴木は、直接にも間接にも、焼き打ちには全然関係はなかったが、道義上の責任は総て自分にあるとして、進んで当局の事情聴取に応じ、一部の逃亡者を説得して自首させ、捜索に協力した。結局逮捕された連中は、その後千葉と東京の刑務所に収容され、五年の刑を申し渡され服役したが、二年半で特赦となり出所した。その中に高工の在學生がいたので、鈴木は卒業証書を貰ってやろうと色々骨を折ったが、容易に果されず、結局出所後二年有余で再入学の手続きを経て卒業証書を彼等の手に渡すことができたのであった。その間、鈴木は鈴木貫太郎大将に



左より高峯譲吉（三共）、今津明（農商務省工業試験所）、鈴木達治、近藤会次郎（浅野セメント技師長）の諸氏
（大正2年）

図1 若かりし頃の煙洲先生のおもかげ
（文献(2)から転載）



図2 中村順平先生の作品。山口銀行本店（下関市）に壁画として保存されている。この壁画彫刻は山口県の歴史と性格を表したものである。中央の人物は毛利兄弟、右端は岩国市の錦帯橋である。（山口銀行の会社案内から転載）

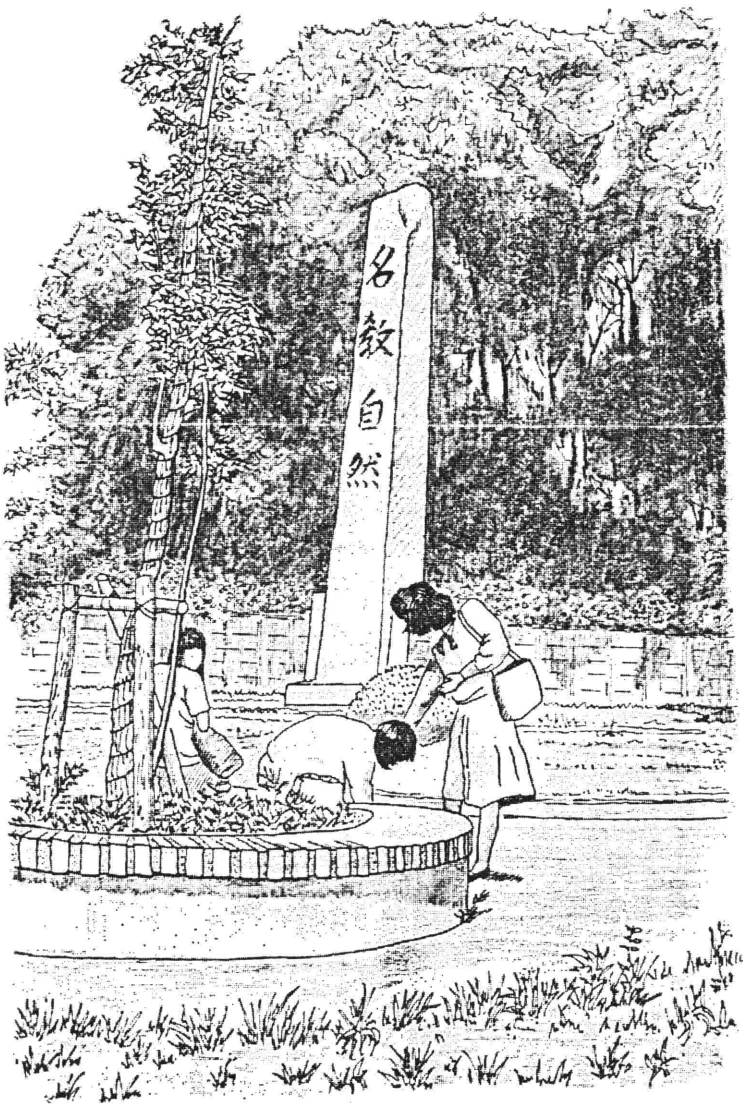
書面・面接で再々謝罪し、二十二年九月十四日出所した連中を伴って大將の関戸（千葉県）の自宅に謝罪に行く手筈を整えたが、折悪しくキャスリーン台風の襲来で不可能になったことを、後に大將は甚だ残念がったという。因みに必勝懇談会に関連するこのような事件もあったのに、鈴木は占領政策による追放を免れている。

次に鈴木の思想的柔軟性を示すエピソードを紹介しよう。大正九年横浜高等工業学校の校長となった鈴木は、建築科の創設に当って、初代教授として、東京の曾根・中条建築事務所にいた優秀な建築家中村順平（故人）に白羽の矢を立て、三顧の礼を以て迎えた。中村は授業開始に当り、建築製図などの能力によって生徒を三分し、優秀な者をアンシアン（仏、ancien, 古参、長老の意）、劣等なグループをサルコッション（sale cochon, 汚ない豚）、その中間にある連中をミキスト（mixte, 中間）と名付け、製図指導上の一方針とした。すなわち、アンシアンはサルコッションの製図を指導する地位に立ち、従ってサルコッションは、アンシアンの命令に服して、昼食のそば、菓子を始め煙草の用まで達することとし、ミキストは中立で自分のことに専念し得る仕組である。これを製図室に発表し、実行を強制

したのであるから、サルコッション連中怒るまいことか、カンカンになって鈴木 of 自宅に押しかけ、「校長はこれを許可したのか、速やかに撤去せよ」と難詰した。

鈴木は、既に中村の一風変った教育方針を感じとっており、「ああ、やり居るな」とむしろ腹中会心の笑みをもらしていた。そこで生徒の詰問に対し、のらりくらりと、いわゆる暖簾に腕押し of 答弁を続け、さりとて生徒を圧迫するでなし、勿論結論の出る筈がない。面会は何回ともなく繰返されたが、堂々巡りでけりはない。結局サルコッション連中は一体となって許可なしに製図机を講堂の片隅に運び移し、今後他の教授を聘してくれと請願して来た。鈴木は、阿部美樹志（工博、後の企画院総裁）に指導を依頼した。

その後も、サルコッションとアンシアンの間は呉越人のままで、時に不穩の沙汰も鈴木 of 耳に入ったが、別に干渉もせず、三年間が過ぎた。鈴木は、このままではまずいと思い、何とか纏めて仲良く卒業させたいものと考え、サルコッションの中に偶々いた野球応援団の幹部を呼び、野球で一糸乱れぬ統制を示したように、この際一切を水に流して融和し手を握り合って卒業して行く方策を講ずることを君に期待するが、どうだろうと説いた。黙って聞いていた彼は、快諾し、その結果建築学科の謝恩会は一体となって和氣霽々の中に催され、全員欣然として卒業して行った。中村の制度は学生 of 反対で、そのままの形では最後までは継続できなかったが、この私塾的な雰囲気は、中村在任中存続し、横浜高工建築科 of 特色ある学風を形作っていた。鈴木は、中村



名教自然碑の前で（機械工学科 川村敏雄教官描く）

のことを教育者としても立派な尊敬すべき人であるとその随筆集に書き残している。

近時教育の荒廃を見るにつけ、明治人の残した教育の片鱗を見ることができると共に、人間鈴木達治を彷彿させる挿話として紹介した。

さてここまでは鈴木達治の教育論の片鱗である。鈴木は開校に当り、炯眼にも専門学校では唯一の電気化学科をつくり、本校卒業後直接に、あるいは東京工業大学の同科を経て、ソーダ工業に多くの人材を送り出しており、この面の貢献も小さくないと思う。

(以上は、文献(2)より抜粋。原文のまま)

さて、冒頭の「松本清張事件にせまる」について、ふれてみたい。クラブ活動の総務部に籍をおいていたK氏が大島の三原山へ飛び込んだ事件があった。彼の卒業証書は一時おあずけとなり、修了証書が出たとか聞いている。当時、機械科、造船科ではいわゆる試験はなかったが「テスト」と称して、専門学科、数学等については各章の終るごとに教科書・原書中からの「テスト」があり、その結果が悪いと教務課から「各学期末に貴殿は左記学科目成績不良につき再考査を要します」との通知が来て、一学期中に教わった所を休暇中に勉強して、再テストを願い出て合格しておく必要があった。二、三科目の欠点科目が残っていると卒業時に問題になって、修業証書が出たとか、昔の卒業名簿には三月卒業ではなく、六月卒業、九月卒業といった方が出てい



キャンパスでの語らい（機械工学科 川村敏雄教官描く）

た。これは欠点科目の再テストを担当教官に願い出て合格した時点で、卒業証書が出たようだ。K氏は追試験を苦にしか、悩んだのでしよう、三原山へ飛び込んだところ、卒業証書が出たようである。このことを学校の新聞時報が取り上げて、学校のやり方をたたいたわけです。その時の煙洲先生の積明に「坂田山事件」が出てきたわけです。あの事件は両家の親が子供の先々のことを考えて、結婚を許さなかったが、死ぬほどまでに愛し合っていたのならば、死した後、晴れて夫婦盃を、親子盃を両家で取りかわしたが、これが親心というものだ。K氏は、まだ世の荒波の中へ送り出すには親として心配だったので、今暫く親の手許で面倒を見てから、世の中へ出したかった。

が、死ぬほどまでに思うのならと、卒業証書を出した次第だ。これが親心というものだ。さすがの新聞部の面々も、以来何もいわなくなったことを想い出した次第である。ブラック建の売店、食堂に「思無邪」なる扁額がかかっていたが、煙洲先生の筆になったものと思う。今この扁額は何処で保管されているのか、あまり見受けないが、先般竹内秀雄先生が、「思無邪」について、私共のクラス会の席で話されましたが、漢籍の「史記」の中にある言葉とか承りました。煙洲先生は漢籍の研究をよくされたようで、私も次の如き一幅の掛軸をいただき、帝人(関)在勤三十七年間の工場建設担当時代に思いを馳せ、煙洲先生を偲んでいる次第である。

創業之難往関 守成之難方與

諸公慎之 昭和四十九年、秋日、煙洲

付記 横井小楠について⁽³⁾

慶応四年一月十五日、堺事件が起った。この事件については、森鷗外の名高い作品がある。フランスの水兵と土佐藩の兵士との争いである。フランス兵一七人のうち一人が死亡し、脱出したのは一人しかいなかった。時のフランス公使ロッシュは激怒して、関係した土佐兵士全員の斬首と、弔慰金一五万ドルの支払いとを要求した。欧米五箇国の外交団は、代表部を撤収して、軍艦に移乗し、これで日本との「対話は絶たれ、京都に朝見に行くという希望の一切がおわった」

と歎息したようである。

「混乱と絶望。希望は実現の寸前に灰燼に帰した。」（当時の「日本における一外交官」に因る。）

堺のこの事件によって新政府がうろたえていたころ、福井藩の三岡八郎の起草した政策綱領五ヶ条が、桂小五郎（のちの木戸孝允）の手許に届けられた。五ヶ条の冒頭は、「庶民志を遂げ人心をして倦まざらしむるを慾す」である。これは三岡八郎の師「横井小楠」の思想の反映のようである。

文 献

- (1) 中村康治、横浜国大機械同窓会会報 Vol. 12（昭五八）九～一一ページ。
- (2) 杉野利之、ソーダと塩素、Vol. 34, No. 402, 七号（昭五八）三二六～三三三ページ。
- (3) 村松剛、「醒めた炎（木戸孝允）」日本経済新聞（昭五九・八・五）二七三号。

煙洲会五〇〇回記念に当り

応化昭十年 遠 藤 博 道

この度煙洲会五〇〇回記念お目出度う御座います。



高商対高工野球定期戦にて
優勝せる夜乾杯せる校長（団員と共に）一昭和9年6月6日

四十余年も続いた事は菅さんを始め各幹事の絶大なる御骨折りによるもので長い間の御苦勞に感謝致します。

在学中煙洲先生に対しての印象では二つの事が浮んで来ます。

昭和九年春の高工対高商の野球定期戦にて三年負け続け、此の年四年目に高商に勝った。

当時高商の田尻校長は特に野球好きで、仙鉄より入学の五十嵐と云う強力な下手投げピッチャーで前年も苦しめられたが、高工の各選手ファイトを燃やし遂に彼をノックアウトした時は、全学生は勿論煙洲先生も笑みを満面にたたえて大変な喜び様でした。

横浜公園球場から弘明寺の校庭まで歩いて帰った我々応援団を迎えられ、生ビールの樽を抜いて一緒に乾杯された時の写真も今尚残って居ます。

次は昭和十年二月十三日御退官になられる時。

私は三年生で、あと一カ月後には卒業と云う時期でしたが、翌十四日に学生全員講堂に集合留任運動を起そうとしたのですが、煙洲先生の「疾きこと風の如く、静かなること林の如く」等々の教訓に依り中止となった訳です。

先生の週一回の講義（講演と云ってもよいかも知れません）は過去、現在は勿論のこと将来の事までも及び全学生出席して聞き入ったものでした。

煙洲先生を偲んで

機械昭十年 黒 川 信 正

私は昭和七年四月入学、同十年三月に機械工学科を卒業した。従って吾々の在学三カ年は煙洲先生の最後の校長時代となった。

更に正確に云うと十年二月十三日に先生は横浜高工創立満十五年を期して勇退したのであった。それから卒業の三月十五日の間は吾々三年生は先生の退任と云う生々しい現実に直面し心に空洞が出来た時間であった。卒業証書は新校長の富山保先生の名が書かれていた。

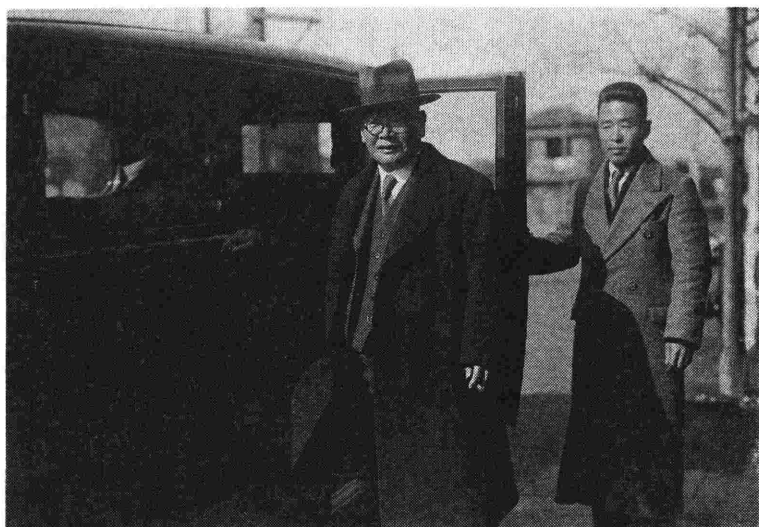
煙洲先生の辞任は吾々にとって甚だ突然の出来事であって、正に青天の霹靂であったわけであった。当時の二月十四日付の高工時報（新聞）の号外（同封）がその模様を雄弁に物語っていると思う。

確に二月十四日には例の名物ブラック講堂に職員、生徒が急ぎ参集して先生の退任の辞を大きな驚きと、悲しみをもって拝聴したことを覚えている。

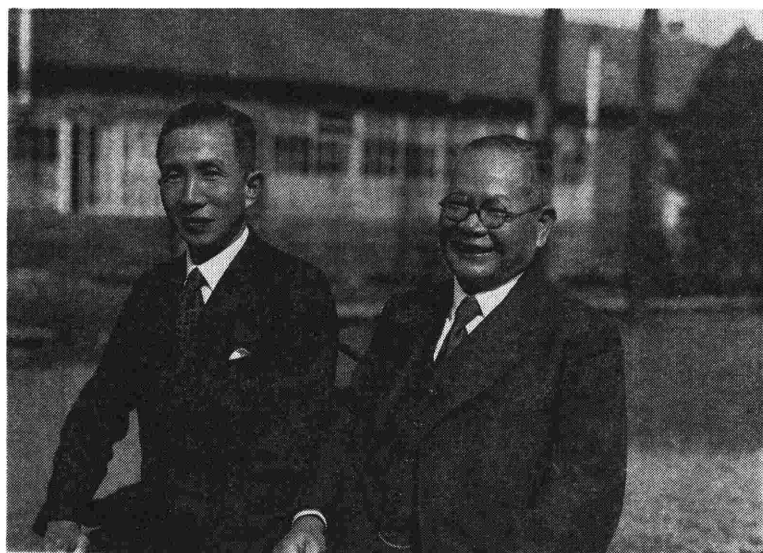
そして引続き富山新校長の新任の御挨拶があった。敬愛する煙洲老校長の退任は吾が校の一大損失であり、純真な吾々学生に与えたショックは非常に大きなものがあつた。



六ッ川の山上の先生 昭和9年秋



本部のバラック校舎から出掛ける先生—昭和9年秋



煙洲先生と富山校長—昭和10年2月14日



全校職員生徒に対して勇退訣別の辞をのべる煙洲先生—昭和10年2月14日

横濱高等工業学校時報

第三三三 発行所 横濱

外 號

昭和十年
二月十四日

自由教育の父

鈴木校長突如辭任さる

惜しまるゝ其の人格

後任は富山講師に決定



し御挨拶がある筈である。新校長も臨席の筈である

辭令

二月十三日

任横濱高等工業学校校長
叙高等官二等

依願免本官

本官を辭任される

橋本・渡邊・山下三教授

今後は講師として御盡力

多年本校教授として盡力された應化橋本教授、基礎學科渡邊教授、機械山下教授は今同鈴木前校長と進退を共にされて教授を引退されるに至つた。尚ほ三教授共講師として従前通り活躍さるゝ筈である

二月十二日

勅任官

同山重隆
同渡邊勝隆
同山下誠太郎

依願免本官

教授 橋本重隆
同 渡邊勝隆
同 山下誠太郎

私のアルバムにある写真は煙洲先生のなつかしい校長時代の御姿である、と同時に訣別の日のものである。

さて卒業後、私は航空機工業の会社の仕事に従事して近年現役を終えたが、永い実社会の経験を通じて煙洲先生の唱導された自由主義教育の真髄は何であったか、又出所進退の道は？ 等々を先生は吾々に直接口演し、又自ら実践され、その成果を私は人生の時折に自ら投影して今日に至っているように思うのである。自由教育は正に生涯の人生教育とも考える。過日（六月一日）、卒業後五十年を経た今日、思い出の横浜ニューグランドホテルにて煙洲会五〇〇回の会合に出席し、そぞろ往年をしのび、先生に対する思いで古い卒業アルバムを開き、最も強い印象の残ったその御勇退のイベントを見つめつつ御遺徳を偲ぶのである。

煙洲先生のお教え

応化昭十一年 落 合 英 一

もうすぐ、古稀を迎える齢になって、時に思うことは、よき師にめぐまれて幸せだったということである。

煙洲先生は、「君等は技術者になるばかりが能じゃない。立派な潔い人間になることじゃ。何になつてもええよ」とよく言われた。応用化学に学んだ者としては、異端の道を歩いた者の一人であるが、それだけに、先生のこのお言葉が、常に支えになった。いま、貧乏ぐらしをおくりながらも、悔いはなく、これまでの生きざまに一種の満足感をもって、日々を過せるのも、先生のお蔭だと思う。

煙洲先生のお教えは、すでに先輩諸氏によって語りつくされてはいるが、わたくしにとって忘れることのできないのは、応化二年の時の先生の校長辞任の際のお言葉である。今猶鮮烈に脳裡に刻みこまれている。「名節を尚び、出処進退を潔よく」と身を以て示されたお教えは、わたくしの生涯を貫く指針となった。

大先輩の菅さんが、何かの本で、自分も東芝ストライキの時、先生の教えを体してやったと、さりげなく述べておられたことを覚えている。菅さんの言われる東芝ストライキとは、史上に名高い「一〇月闘争」の東芝五五日程ストである。当時菅さんは、東芝の中心工場である川崎堀川町の工場長であった。東芝のなかでもっとも戦闘的で、日本共産党の拠点であった堀川町労組の矢面にたち、身を挺して交渉にあたられ、収拾に成功した。しかし、突如妥結の全責任を負わされ、工場長を辞任されることになった。菅工場長の解任は、明かに、会社最高首脳の無策と責任回避によるものであると、組合はみたが、どうすることもできなかった。菅さんは組合に対

し、一言も弁解がましいことを言われなかった。組合は菅さんの潔い態度に感嘆し、その辞任を惜しんだ。わたくしは、当時堀川町労組の組合長であったので、菅さんの自宅を訪ね、おわび申し上げたら逆に激励されたことを記憶している。

後に、東芝再建のための人員整理のとき、わたくしは多数の共産党員とさしちがえる形で、辞めなければならぬ羽目になった。友人や同志たちは、身を挺して共産党と闘い、その組合支配をたちきって、東芝再建の土台づくりに貢献した者を辞めさせるわけにはゆかないと辞職に反対した。しかし、わたくしは、直接菅さんに退社の意志をお伝えした。当時の心境は、菅さんに永年の借金をお返ししたような、さっぱりした気分であった。

東芝を辞めてから、組合民主化運動に熱中し、新産別書記長を十五年、請われて、国際労働運動に転身、ブリュッセルに本部をおく国際自由労連日本駐在代表を約十五年勤めて引退した。煙洲先生の校長在籍十五年に見習った訳ではないのだが、不思議な因縁である。

卒業の時、煙洲先生から、「読万卷之書 行千里之道」の書をいただいた。これは「醜と俗の二病を去らんとせば、須らく、万卷の書を読み、千里の路を行くべし」と云う崑山の文の一節である。この年になっても、醜からぬけですることはできるが、俗からぬけでられそうもない。黄泉のほとりで先生にお目にかかるまでに、まだまだ精進を続けなければならないと考えている。

終戦直後横浜工業会の役員として

電化昭十一年

鶴

岡

武

大分前の事になるのははっきりした年月は忘れたが、多分昭和二十二年頃ではないかと思う。

社団法人横浜工業会は戦時中活動は思うにまかせなかったが、終戦間もなく大先輩が集まって横浜工業会を復活した。理事長は機械科卒業の鳥谷氏で、その庶務理事として私と機械科の伊藤良彦氏の二人でつとめた。伊藤氏は学生時代応援団長など勤め、極めて明るい豪快な青年で、卒業後隣の商工実習学校の機械科の先生をしていた。確か二カ月に一回理事会が開催され、会の事業についての問題が話合われた。鳥谷さんという方は以前税関に勤務されておったようで、多分にお役人的な事務処理をされる有能な方であった。この有能は誠に結構であったが、庶務的事项を私共二人が一生懸命処理して十分二カ月かかる仕事をちゃんと私共に宿題として与え散会する。いささかルーズなところのある二人はこの盛りたくさんの仕事には閉口した。

さて仕事は横浜工業会誌の発行である。これは社団法人としてはきめられた時にきめられた号数を発行しなければならないので容易ではない。この編集、印刷、発行をしなければならない。これが私共二人の仕事である。勿論この会の事務を取扱っている小林さんという老人が一人い

た。この方が事務処理をやるわけである。それから戦争中しばらく連絡もなかったので、会員の動静や住所、勤務先など全く白紙の状態であった。会を運営してゆくには何としても会員を把握しなければならぬ。それには名簿の整理と発行である。これには私共二人と小林さんで、各科の各クラスの身近な者からいもづる式に調査し、それこそ一年がかりで調査をつづけた。勿論これで十分調査が出来たわけではないが、とにかく名簿を発行しようということになって、まがりなりにも日夜努力して全科の卒業生を一冊にまとめた小さな横浜工業会名簿を発刊した。これには精根つきはてる思いがした。これだけ努力してもこのようなものには必ずクレームがつくものである。先ず煙洲先生から早速索引がない、このような名簿は名簿としての価値がないと、何とも手きびしいおしかりをいただいてしまった。私共も索引をつけることはわかっていたが、これがまた大変で、このようなことをされた方はおわかりと思う。作りたいのはやまやまであったが、何としても粗末な食事しかとつてない体ではエネルギーが及ばなかった。私共は名簿を出すことに意義があると考えていたが、理事会で煙洲先生よりおしかりをうけた事に対しおわびした。そのためかさすがの鳥谷さんも私共をしかることもできず助かった。然し不備ながら名簿を完成させた事は後の名簿作成にどんなに役に立ったか計りしれないものがあつたと思う。

先にものべたように、もう一つの事は、横浜工業会誌に煙洲先生の記事「山の上から」を必ず入れることになっていたが、この原稿を頂戴にあがるのが庶務理事の私の仕事で、毎月のように

六ツ川の煙洲先生のお宅に参上すると、先生は例によって葉巻のタバコをくゆらせながら口述される。これを私が筆記する。もとより私は速記を習っていないことは先生ご存知で、私が書きやすい様に述べられる。何時も思うのであったが、口述された文章を後で整理してみると実に立派な文章になっている。誠に驚き入った次第である。これを清書して、先生に目を通していただき訂正などしていただいて会誌にのせる。これが約二年近くつづいたと思う。その時の原稿などはどうなってしまったか、今になるとほしい気がする。

こうしているなかで、先生からご一筆書をいただきたいむね申し上げたところ心よくお引受け下さった。今でもその書は何よりも大切にしている。私にとっては宝である。

煙洲先生が私に書いて下さった書は

学んで思はざれば則ち暗らく

思つて学ばざれば則ち危し

上記二行の文は先生がメモに書いて下さったそのままの文字です。尚添え書きとして、「論語にある孔子の言葉であります。学に志すものの味ふべき金言と老生は考えます」と記してありました。

私はこの書を常に拝読し、心のいましめとして大切にしてきたつもりである。

横浜工業会を通して先生にお近付きいただいたその一端を記して。

煙洲会について

機械昭和十一年 小 汀 浩一郎

煙洲会が五百回を迎え、先生の好きであった、横浜ニューグランドホテルに於て記念の会が催された事は会の初めから主催された、菅さんの御努力によるものでありますが、沢山の先輩の方々の物心両面に亘る御援助によるものと存じます。

「煙洲漫筆」「名教自然碑の由来と教育私見の断片」「先生の思い出」等、先生の述べられた小冊子を刊行するに当り、先輩各位から寄せられた御援助に対し、特に物故された方々に厚く感謝申し上げます。

煙洲会について先生が「漫筆」に述べられた中に、

「兎に角、何の会でも長い間継続すると、其所に何物か伝統と言う物が、自然に出来てくるものである。煙洲会も十教年続いて来た。文字にも言葉にも表わせないが、菅、広部、阿部、平田君等に依って醸された、会の匂いが出来て居る。時代と共に匂いの移り変わる事もあるが、煙洲会の匂いは、矢張り煙洲会の匂いであろう。伝統は伝統を追うものである。私は今日最早や八十歳の頰齡である。仮令長命であるとしても、間もなく老衰して、手足も不自由で、集会には出

られなくなるであらう。その様な節にも煙洲会の同人諸君は、十数年来育て上げた伝統を棄てず、相変らず時々でも会合して、お互の親睦を重ね、人生を楽しむ一つの機関として、存続せしめては如何なものであらうと私は提案したのである。同じ十数年とは言え、終戦を前と後に置くこの十数年は我々国民生活に、又業務に、最悪の奈落に苦しんだもので、我々同人には更に一倍の思い出と親しみがある。特に老い行く保守頑迷の私に、新進気鋭の若き輸血をしてくれる煙洲会同人は、忘れ難き私一生の思い出である。」と言われています通り、此の会の永く続く事を望むのですが、今迄の会員は、先生の存命中に教えを受けた者、或いは文章等で知っている者であります。これからの卒業生は煙洲先生との繋がりの方が多くなると思いますので、これらの会員の方々に先生の業績を知って頂く方法を講ずる必要があると存じます。

その為、「名教自然碑の由来と教育私見の断片」の小冊子を復刻して新しい会員に配布するの
も一つの方法かと存じます。

煙洲先生を思うにつけ

機械昭十二年 大 星 重 雄

私は昭和八年に入学、十一年に卒業した機械工学科の教養出であります。従って煙洲先生が校長を去られ、富山先生にバトンタッチされた時は二年生の時でした。

昔から火のない所に煙は立たないと云いますが、先生が二月十四日、退任の挨拶をされる前に、何とはなしにその話が学生の間流れて参りました。当時私は部活として講演部に籍を置き、又一年より引続いて応援団にも関係して居たせいか、先生の退任と後継者の問題で各科各様に運動してるとの話が入って来ました。機械工学科では、水力学の権威であった遠藤先生が居られ、卒業生と学生の一部が此の際次期校長に遠藤先生を推薦しようとする運動があったのです。同級生の中にはその運動に何人かは加わったと思われまます。

私にも意見を求め乍ら、運動に加わる様勧誘を受けました。然し私にはどうしてもその気になれなかったのです。別に遠藤先生が嫌いでもなければ、特に睨まれていたわけでもありません。入学式以来煙洲先生には直接、自由教育、或は三無主義等々私達学生には感銘深い講義を一年生の修身の時間にして頂いた影響で、校長先生にお任せするのが最善で、学生の出る幕ではないと

思ったからに外なりませんでした。同級の中には運動に参加すべきか否か迷って居た者もあり、意見を聞かれれば、嘴の黄色い吾々が学校の経営にとやかくいうのは身の程知らずと考えられると云って運動参加には否定的でした。

二月十四日先生の別れの挨拶の場面は誠に劇的なものでした。いわれのある聖寿万歳の額が掲げられて居たと記憶していますが、講堂には教授、学生が集まり、講堂の隅には何処からともなく多くの人々が取巻いて、異様な雰囲気包まれて居ました。前日には大部分の学生が此の日のある事を知っていたものの、いざ先生が壇上にあがるや、何処とはなしに声を出して泣く者が出て来ました。

「疾きこと風の如く、静かなること林の如し」の兵法の名句を引用され、御自身の出処進退を堅い決心のもとに諄々懇々と語られるに及んで、誰もが深い感銘を受け、先生の御意向に反するものが一人でもあったでしょうか。唯々別れの淋しさ、悲しさに打たれ、後継者が誰であれ、先生を信じ、只管、お慕いする若人の涙の厳肅の場であつたのです。

又先生の挨拶の後、私達学生の何人かは先生への追慕の情押え難く、涙を流し乍ら壇上に上り弁じたのであります。私もその一人で、当時感激と興奮で何を話したやら、今は全く憶えて居りませんが、前述の遠藤先生の件と併せて、良かったと思っています。

なお同級で壇上に立った故小林健次郎君を思い出すのです。彼は煙洲先生に常々深く感銘、先

生が熱心に推進されて居られた大陸会の会員にもなり、卒業後は大陸に就職し、彼の地で活躍する事を期していた熱血漢でした。

講演部にも籍をおいていた関係で、彼とはよく話し合う機会も多く意気投合したものでした。望み通って南満洲鉄道^(株)に就職し将来を望まれましたが、惜しくも終戦後間もない十月に大陸で亡くなった事を残念に思っています。

個人的には先生と係りを持たない私が、卒業後先生のお顔に接する様になるのは全く煙洲会のお蔭です。前述の様に私は十一年の卒業で、最初の就職も教養卒にかかわらず教師過剰の時代で民間企業が許されました。第一希望を京浜間の内燃機関の工場という事で、新潟鉄工所蒲田工場に就職、現場希望でしたが会社の都合で設計にまわされました。然し学生時代の夢と就職後の実務との隔りが余り多く感ぜられたので半年程で退職する事になりました。就職を担当されていた機械科の河合先生からえらくお叱りを蒙り、今後の就職については面倒を見兼ねる由言い渡された次第でした。所がなんと三カ月程した或日河合先生から呼び出しがあり、「今は名も知られてない、極くちっぽけな会社であるが、将来性はあるし、バックも確りしている。君には適している。先輩も居るし、其処で思う存分働いたらどうか」と就職の世話をして下さったのが、今の東芝タンガロイ^(株)の前身である特殊合金工具^(株)でありました。此の小さな会社に就職した事が私が煙洲会に出席する様になる縁の始めでした。河合先生が申されたバックとは、当時マツダランプ

で有名であった東京電氣^(株)とモーターや発電機等で有名な芝浦製作所の事で、両者一〇万円ずつの出資により設立されたベンチャー企業でした。私はその年の十一月初めに就職したのですが全員で四、五十名で、両会社から来られた先輩の方を除けば、工学系から入社したのは私が初めてでした。会社としても学卒を入れようとしていたのですが、余りにも小さく、希望者が来なかったのも、知人、縁故関係に手を廻して技術者を求めている次第です。此処で同級であった小汀兄のことに少しく触れさせて頂きます。彼とは本科と教養との差こそあれ、イロハ順の出席簿では一つ違い、製図室の机は隣同士、実験、実習では何時も同じグループ、その上同じ下宿の一室で寝食を共に青春の一時期を過した間柄でした。彼も最初に就職した浅野セメントに余り希望も持てず、居心地も良くなかったのでしょう、私の勧誘がもとで、十二年の春特殊合金工具^(株)に再就職することになりました。その彼が煙洲先生存命中の終りの幹事で永い間世話される様になるとは、当時私には予想出来なかった事です。察するに彼は学生時代の煙洲先生の影響もさる事ながら、叔父様に当る故小汀利得先生等の関係から先生に私淑する所大であったと思うのであります。

煙洲会に始めて出させて頂いたのは、親会社に当る、東京電氣^(株)に勤められた大先輩の菅様等の奨めによるもので、初代幹事の阿部様の時代と覚えています。銀行集会所時代のことで、当時先生は色々のお話の外、時折色紙に心に感ぜられた文句を揮毫されて、集まった会員の方々に与

えられていました。

「思無邪」「一躍雄飛五大洲」の二枚の色紙を頂戴した覚えがあるのですが、戦中、戦後の混乱期のせいか見失って終ったのが誠に残念です。「思無邪」の色紙については、私達の卒業記念のアルバムに先生の写真と共に、昭和十年初春と添えられた色紙の縮小版として載せられています。私には卒業後の人生で大事ある毎に思無邪と出処進退とは、先生の校長引退時の事を思い出させ、身の処し方を教示してくれたと思っています。

戦後二十一年十月一日を期して起った東芝のストは、一工場を除き約二カ月の長期に亘る大争議でした。その時不参加の労組が今の東芝タンガロイ本社工場、当時の東芝塚越工場の労組で、私は大陸から復員して間もない時分で世相に疎かったに拘らず執行委員の一人に選ばれて居ました。組合長、副組合長は会社側との交渉の外、本社や近接工場の各労組との連絡、当組合員への情況説明等に当って居り、それに依れば大方の労組がストになることになって居ったのです。そんな情況下にあっても塚越の労組はストに入るや否やで最後の最後迄もめました。こんな折本社工場外近隣工場の労組に加え、支援団体と覚ぼしき何人かが赤旗を先頭に押立てて、塚越労組にアジテーションをかけたのでした。組合幹部は会社側と団体交渉に入ってる最中であり、組合員は会場に集合し、交渉結果を待っていた時丈に、余りにも突然の出来事に驚きと同時に、事態の收拾に困却したのでした。赤旗組の何としてもストに入ることを直ちに大衆決議で取り付け様とする

強引さは、非国民呼ばわり等の過激な言動に表われ、今にも暴動につながりかねない恐いもので、思い出しても戦慄を覚える程の出来事でした。組合長、副組合長初め組合幹部も全く手の施し様なく、私の提案で会社との団交を一時中止、赤旗組との接衝に入ることになりました。勿論接衝責任者に当てられましたので、私は此処迄もめて来たのにはそれなりの理由あつてのことだからスト参加の即決は無理である旨をとくと説明、此際お互いが相手側の立場を尊重し、冷静に事に処するのが民主主義のやり方である事を主張し、ひとまず即決すべきか、一日の冷却期間を設けるべきかを組合員にはかる事を提案し、了承を得たのであります。赤旗組立合いのもと、成り行きを心配していた組合員に、充分経過を説明の上、即決か否か決を取ったのですが、挙手賛成多数で一日の冷却期間を設けることで一応の其場の解決をみたのでした。一日後のスト参加、不参加の決の結果は不参加になり、他の東芝労組の全部がストに突入する中で唯一つ塚越工場労組丈入らなかったのです。

私は別に組合屋になる気持もなく、組合に関心が深かったわけではなく、唯煙洲先生の思無邪の心境に似て行動した丈でした。本件については後々色々批判を受ける事もありましたが、他意無き事を以て事実を説明したものです。猶この事があつてから止むを得ず組合長を引受けさせられるのですが、責任上の事で任期一杯勤め、組合から手を引き、出処進退を明らかに致しました。

私は十一年より四十数年の東芝タンガロイの勤めを終り、現在辺鄙ですが閑静な土を求めて木更津に移り、気儘な生活に入って居ります。この移転を契機に、煙洲会出席のお蔭で生前先生より頂戴しました

質勝文則野 文勝質則史

文質彬々 然後君子

昭和二十七年八月念五揮熱汗書 煙洲

の書を表装して床の間に飾って居ります。日頃反復服膺して居りますと、先生にして初めて達し得る境地で、私などの遠く及ばぬ事と切実に感ずる心境です。又川崎在住の頃はこれ亦煙洲会より分けて頂いた先生のお写真を父母の写真と共に、仏壇の上に飾らせて頂き朝夕お顔を拝しながら、暮らしをして来た日々を思い出すのです。



先生が亡くなられた昭和三十六年八月二十九日は、偶然にも私が社命により初めて欧米に飛び立つ日でした。お葬式に出られない残念さがありました。一躍雄飛五大洲の希望に胸を膨らませ、四十数日間の旅を有意義に過せることを心に念じ、先生の霊の御加護を願ったのでした。その後御命日には日野墓地に皆様共々お墓参りさせて頂いていますが、その都度私は当時の渡航の思いを新たにす次第で、これも何か因縁めいた様に思われる昨今です。

煙洲先生追憶の断片

— 衝天氣有・付自然 —

応化昭十二年 林 辰 治

五月には記念すべき五百回を迎えるとあって、年初の煙洲会は六十名もの参加で賑った。

・学長就任の第一声は「校則はあるが見てよし看なくともよし。心すべきはやる気十分の自覚をこそ」、退任では「疾きこと風の如く 静かなること林の如し」と結んだ。つづく国政の場にあっても、煙洲先生にずっと支えられて……と、後藤参議院議員の弁。

・“My days are numbered”で、この頃は「DATES」の意味合いにもひとしおの感。神中

生るとき、ハレーすい星に出会えた印象の生々しさ。その再会にも新たな願いをこめて、日野墓参も欠かさずに：が、卒寿目前も凜たる声容は竹内恩師。

・煙洲作「校庭桜花」を朗々と詠じた徳田煙山は八十四歳の演出。
など、二十名近く交々の抱負がひきもやらず。

恐らくは心定も既にあつたか、十五年ご在職の節目に当たる入学だった丁丑昭和十二年卒弘陵花組の同級生らの煙洲会列席は、時に三分の一近くを占めたこともあるなど、五十年の幾春秋は遠い忘却の彼方ながら「In our Enshu Days」が定着した証ともいえようか。

煙洲発信の数々を現在に吸収し、未来へ橋渡しする受信を願ってであり、或いは、気宇も大なるアウフヘーベンで、今だからもうよかう式、脱線まがいオフレコの秘話も自由な憩いの糧として煙洲会の位置付けがあつた。

古いことだが、「遊びと仕事の合一化」目標の煙洲学校は「何々ゴッコ遊び」式、現実社会の模擬遊戯的鍛錬の気風で「学ぶ」遊ぶ「枕詞の自然態そのもの。一九八五年入り Key word たる「遊びの美学」とも符号する同断では、「本当の好みが実業界入りだった」煙洲先生らしく、「教科書にない仕事に励め」は、ぬくもりの卓見だった。

情報化社会の到来と技術革新下、いま身近に、多数旗手の輩出をみては光風霽月、先生も”わが意を得たり“で、よくぞ風雪に耐え来たれるかを想う。

異質と破格「名は官立で実は私立」中身の創作では、記念祭・音楽会・大陸会やスポーツ行事の祭典風出し物は彩りも鮮やかに興を添えた。

退官後は、戦時下特に国民的自覚の大同団結を促した啓発に続いて、現実直視の要有る主張の一貫した理念だった経緯とその事例に饒舌を重ねれば――

”答がひとつ“は間違いの元、世の中すべてが応用問題、ノウハウは自分で探せと、専門分野へのこだわりを抑えて、視野狭窄症ならぬ野次馬性好奇心を触覚に柔軟な人間性を等、人材育成と人物錬磨への内実化志向を旨に、ブラック講堂での一斉講義が往年の高工時代にあった。

次に、煙洲思想の内面的発展期を培った老荘学、中でも庄子ほんらいの精髓たる「逍遙哲学」への傾斜が可成りあったとの管見に過ぎないが、特有の話術と比喩や寓話に富んだ”無為自然・風雅三昧“の語り草からは、目的的な成功主義とは異なって、現実すべての差別相を平等視した在野性に想到するこのごろではある。

観念知識としてでなく庄子を捉えた、その先哲への親しみに発して、純粹を愛し自然を愛した

枯淡の日常性が、鬱勃たる驚嘆の人生と理想の心を生んだ。そして、その体験的感動を色濃く投影した新鮮味を伴って、人間觀察の人生探訪的に、平凡庶民の日常に限りなく近づこうとしたたずまいは、強烈な感受の個性と相俟った宿命でもあったろうか。

煙洲イズムの満喫には、幼時になじんだ漢学の詩文に触発されたに違いない隠微な働きがその奥に確かだったろうし、それが煙洲先生の心の奥の最も深い処からほとばしった、と見る。

終りに、「よみがえれ校庭万朶の桜」と記念号を祝福することと、併せて、掲題の非礼は、煙洲先生にゆかり深かった先人二作の引用と辻褃合せの点を諒とされたく願いつつの末尾とする。

(昭和六十年三月二十四日)

同志社の人々

応化昭十四年

丸 井 大 陸

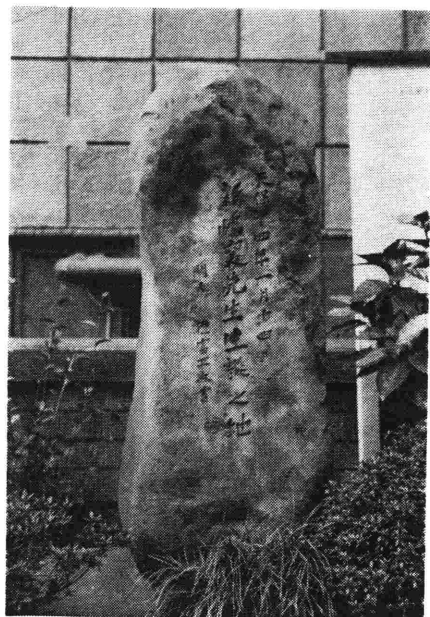
同志社教育は広汎にして深厚なる影響を私の一生に与えた。最も重しとすべきは、新島襄先生の感化による人生觀の生成であるが、之は煙洲先生の同級生で五年間普通学校を共にされた深井

英五氏の回顧七十年、同志社教育についての書き出しである。深井英五氏は日銀歴代総裁中最も知性の高さ、深さという点で指導者中の第一人者であると伝えられるが、第十三代総裁辞任後、勅選の貴族院議員、枢密顧問官となり、昭和二十年十月病のため逝去された。

回顧録の中に、同志社教育は教師と生徒との気分に就いて云えば、単なる授業ではなく、心と心の接触による切磋琢磨であった。昔の儒者の塾と云うのがこんなものであったろうかと私は思った。只学課等の様式は概して米国流であった。そうして主として英書を読んだ。深井氏はこの様に記述して授業のこと、感化をうけた内外の教師のこと、同窓のこと、この中に鈴木達治先生が出てくる。

煙洲先生も亦七年間の同志社時代を回顧し、色々な方面で私の一生を左右する素地が作られた感じがするとのべて居られる。

私の入学は昭和十一年で卒業まで先生の警咳に接したことは数回であった。直接声をかけられたことは皆無である。入学して一種特別の校風が煙洲先生を中心として醸成せられて居り、上級生を通じて名教自然の精神を吹きこまれ、感化をうけたものと思われる。今や馬齢を重ねるに及んで先生の偉大さがじわじわと想いおこされ、十五年の短い年月の間によくぞ、この様な校風が確立されたことを、稀有のことではないかと思う。とりわけ出処進退の見事さ、後継者の決定、六十七歳の自分にとっては深刻な教訓となっている。



今や枢密顧問官深井英五氏の墓に詣でる人も、思い出す人も少いことと思うが、日野公園墓地の香煙は八月命日、年々歳々たえず、煙洲会は回を重ねること五百回、四十六年間続けられている。教育者とは人の一生の仕事として何とやりがいのある、価値のある事業であることよと痛切に感じられる。

新島襄先生の遺跡については、

生誕地記念の碑 神田学士会館

終焉之地の碑 大磯町

新島襄之墓 京都若王子山

新島襄渡航碑 函館

以上の所で年々行事がある様である。

偉大な煙洲先生の業績を偲び、何とか後世に伝えるでたてを考える時期ではなからうか。

煙洲会に想う

電化昭十六年十二月 丸 岡 勝 美

五〇〇回の煙洲会に出席された方は、誰でも歳月の流れの早さを感じられたことと思う。川崎の会場で四〇〇回を祝ってから、早くも八年余りが経過した。正に歳月人を待たずではある。

煙洲先生が没せられて既に二十四年。今猶門下生が毎月会を重ねて五〇〇回に至る。稀有のことと自負してよからうと思う。改めて菅さんや歴代幹事の方々にお礼を申したい。

在学当時、煙洲先生は既に富山校長にゆずられていたが、山から降りてこられて講堂で熱弁をふるわれたこともあり、それにも増して朝、庭内の東郷神社参拝のあと、先生から直接時局談話を伺うことができたのが、今もって印象が深いのである。人数はそう多くはなかったが、先生のお話にひき入れられていった若い頃が実になつかしい。

誰でも自分の母校を誇りに思わぬものはあるまい。煙洲先生は官学高工の中でも実にユニークなわが横浜高工を育成されたのである。先生の御人徳、手腕がいかに秀れていたか、正に偉大な教育者であられたのである。そして先生を囲んでの懇談会が煙洲会になった。卒業生の各々は、世に出て「名教自然」の教育の如何に素晴らしいかを悟り、いよいよ先生に対する敬慕の念を深

めていって、先生の訾嘆にふれることによって、活力を増強し各分野での活躍の源になっていったことは想像に難くない。

私もいつのまにか十数年参加させて頂き、貴重なお話を伺ったり、恩師や先生と旧交を温めて清浄なひとときを過させて頂いている。近來仕事の関係で出席出来かねているのが残念である。しかしお命日の墓参は爾来かかしたことはない。そして夏草の中で、先生を偲び、横浜高工に在学出来たことをしみじみ幸であったと思う。

先生ゆかりのニューグランドでの五〇〇回記念パーティー席上、新に就任された横浜国大学長横山亨先生は、煙洲先生の名教自然の教育に大に共鳴され、新大学になってもその伝統は生かし続けてゆきたいと申された。先生の岳父故盛彰先生が果されなかったことを、新学長としてやっていって頂きたいものと思っている。

席上、先生の大礼服、御愛用の筆、日記帳などを眼前にして、今昔の感にたえず、先生は鬼界に入られたが、先生の精神は脈々としてこの煙洲会にうけつがれていることを実感した。

スピーチの機会を与えられたことを感謝すると共に、煙洲会が今後も永く続いてゆくことを切望する。

終りに菅さん、歴代幹事、現村松幹事に心から感謝申し上げて擱筆する。

煙洲先生と私

機軸昭十七年九月 伊 藤 良 彦

一、幼心にエライ人

私が信州上田から父に連れられて横浜に出てきたのが四歳の、大正十三年で、住居が当時の横浜高等工業学校の裏にあり、雨戸を開ければ目の前に平屋建のバラック校舎が見え、そこには毎日のように遊び場としたドブがあり原っぱがあった。垣は低い四角の木柵で簡単に乗り越えられたし、校内を自由に通り抜けることもできた。したがって弘明寺の観音通りへのお使いの道は、母の前を歩きながらいつも校内を横切り正面へ出るのがコースであった。

母は、たまに会うひとりの人だけに挨拶をした。その方が校長の煙洲先生だった。夕食のときの話の中で「校長先生に、いつも校内を通していただいてすみません、と言ったら、どうぞご遠慮なくと言われた」などと母が言えば、父は「県知事よりエライ人なんだ」と話を続けた。そばで聞いている私の幼心に、「あの眼鏡を掛けた人が校長先生でとてもエライ人なんだ」というイメージが植え付けられ、行きあっても母の陰にかくれ、そっとエライ人の顔を見るようにした思い出がある。

二、県立商工高校（旧商工実習学校）の古資料室

保土ヶ谷区今井町の美立の丘に建つ県立商工高校には古資料室がある。そこには歴代校長の写真が並べて掲げてある。

私は昭和四十九年九月に八代目の校長として移転したばかりの県立商工高校へ赴任した。

大岡町の横浜高工の隣で初代校長を鈴木達治先生として誕生した県立商工実習学校で五年間を学び、また戦後二十二年間を教員として生活した私は、はじめて卒業生の寄金による黒みかげ石の立派な名教自然の碑（横二メートル・縦一メートル六〇センチ・厚さ三センチ）を前にして感無量であった。ただただ、その責任の重大さを思い身のひきしまるのを覚えた。

校長室と壁を隔てた応接室に、鈴木先生とその当時は主事をつとめられた二代校長・山本政人先生（鈴木先生の広島高師時代の教え子）の四十号ぐらいの油絵が掲げてある。私は登校すると、これらの肖像画の前に立って無言のご挨拶をしてから、始業前のひとときを備え付けの生徒の写真を見ながら名前を覚えてゆくのが日課であった。生徒であった時の私の名前を覚えていただいた感激が如何に大きかったかを私が身をもって体験していたからだろう。

新校舎に移転しても、創立以来の伝統を受けつぐよすがにしなければと、古資料室の充実に努め、その一つとして他校に見るような歴代校長の写真を掲げることにした。初代の鈴木先生のは従来からあった大きな額をそのまま掲げ、以下六つの額を同じにして並べ、昭和五十六年八月に

退任した。

昭和五十七年三月の卒業式に招待された私は、そつと古資料室をのぞいてみた。確かにカラー写真の私の顔があった。初代から並べられた八人目、私は急にはずかしくなり室を飛び出した。それ以来、学校を訪れる機会があつても古資料室には足を運ばないでいる。

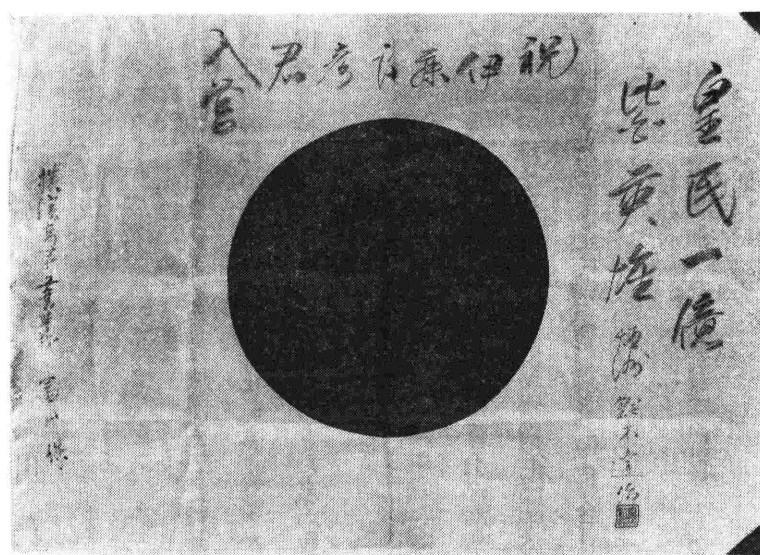
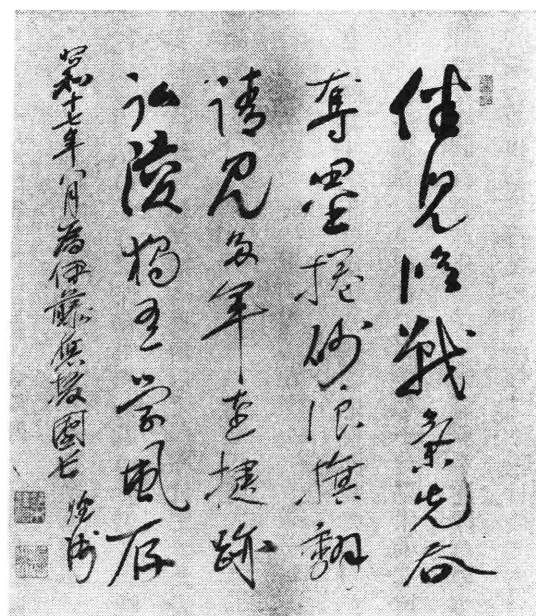
三、私のために書かれた色紙と日の丸（写真参照）

今でこそ何時でも取出せるようにしてあるが、わずかなしみと虫食いの小さな穴があいた程度で、よくぞ私の手許に保存できたものと思う。戦中から戦後の私の家の環境の変化にもまれて、必要と思われたときには見当らず、今日まで公表する機会を持たないままに推移してきた私の秘藏品である。

(1) 色 紙

私は昭和十七年度第十八代の応援団長であつた。その年の夏八月のある日（当時は繰上げ卒業が九月と決まり、土曜日の午後もまた夏休みも短縮して授業が行なわれた）、それは横浜高工の野球部（当時は野球班）が全国制覇を遂げたので、応援団の名に於て全校生徒が講堂に集合して、その報告会を行なつてから二三日後であつたろうと思う。

私は富山先生から校長室に呼ばれ「煙洲先生が全国制覇を大変喜ばれ、これを君にと置いて帰られたから」と言われて、高校時報に包んだ色紙を取出して私に渡された。私は茫然としてい



て、すぐには読めず内容も分らず、ただ左端の「為伊藤応援団長 煙洲」と書かれた字を見たときの感激で、かすかに震える手で、これを押しいたいて校長室を出た。多分、煙洲先生は全校生徒を前に熱弁をふるいたいお気持ちを押えて、代表である私に記念として色紙を残されたのだらう。

健児臨戦気先吞

奪壘捲砂浪旗翻

請見多年連捷跡

弘陵独至学風存

尚附記すれば昭和十七年度対高商野球定期戦は、一勝二敗で敗れ、十五年度・十六年度に続いて三連敗と無念の涙をのんだが、八月初めに行なわれた全国実業専門学校関東予選の決勝で横浜高商を破り、五月の定期戦の復しゅうを遂げ、更に横浜公園球場で開かれた全国大会に出場して、決勝戦で再び高商と対決、延長十四回裏に一点をあげ5A—4で全国制覇を遂げた。

(四) 日の丸

昭和十七年という戦争が激しくなり、已に卒業式が九月二十一日と決まり、徴兵延期を受けていた私は、十月一日入隊の赤紙を貰いながら授業を受けていた。

そんなときの九月になったある日、富山先生から「君が召集されたことを煙洲先生が知り、希望するなら一筆書こうと言われたので、日の丸を持ってくれば私からお願ひしてあげるから」とのお話があり、私は喜んで絹地の日の丸を校長室へ持参した。そして数日後に受け取ったのが写

真に見る日の丸である。

煙洲先生の字で、上に「祝伊藤良彦君入營」と、右に「皇民一億皆英雄・煙洲鈴木達治」と書かれており、左端に横浜高等工業学校・富山保と署名されている。

私はこの「日の丸」を見たとき、真にありがたく、うれしく終に汚すのがもったいなくなり、これを母親に預け別の日の丸を調達して応召した。丁度三年間の軍隊生活で転々としているうちにこの方は紛失した。留守宅に残した「日の丸」を復員して再び見たときのうれしさはまた格別であった。早速煙洲先生宅に御挨拶に伺ったことを覚えている。

四、煙洲先生を憶う

私がひとりで煙洲先生とお話をしたのはただ一回、復員してからの御挨拶だけである。あとは六ツ川のお宅でも学校でも、常に複数であり、その他多数の中の一人としてであり、また人を介して先生のお話を聞いたのである。私の人生をふり返ると、軍隊時代を除きその生活の範囲内はどこかに煙洲先生の影響のある部分を見出すことができる。

横浜高工内を遊び場として、一番エライ人が許可しているのだからと遠慮しないで過ごした幼い日があり、また商工実習・横浜高工時代はともに煙洲先生は退官されていたが、時々先生が行なう講演を聞き、その話術に魅せられ、その内容に傾倒して広いふところに抱かれた思いで、学校生活を送った日々を思い出す。「深山大澤」という先生の額を前に「大きくなれ」と脳裡に刻

まれた言葉は、私の人生を支える言葉にもなった。

煙洲先生を益々慕わしい人として、お話を伺う機会を与えられながらも前に出ることがはばかられたのは、幼心にエライ人として母の後に隠れた気持がいつまでも消えなかったからであろう。

私は現在、商工実習・横浜高工の同窓生として諸先輩に接する機会があるたびに、煙洲先生のご存命時代の延長線上にいる私を意識することができ、真にありがたいと思う今日此頃である。

続いてほしい煙洲会

電化昭三十年 尾 上 秀 夫

今から十年くらい前のある日、先輩の村松四郎氏から、「煙洲会に出席してみないか」と声をかけられました。それから都合のつく限りなるべく出席させていただき、今日に至っています。

弘明寺校舎の玄関前にあった煙洲先生の名教自然碑（現在は常盤台キャンパスにある）や、煙洲会という会があることは、私達同窓生ならば誰でも知っていることでありますが、いざその会に出席するとなると、何かのキツカケがいるものです。特に大先輩がぞろりとおられる会に、若

輩の身でポツンと一人出席するには、かなりためらいがありました。

しかし出席してみると、さすがに自由主義教育の真髓にふれて世に出られた方々ばかりの集りで、雰囲気がとても良い感じでした。その上、私のように、主として学校勤務が永い人は極くまれで、大部分の先輩は企業等において活躍された人達であるのも、私には大変勉強になりました。

大先輩の菅要助氏は、「煙洲先生は『来るものはこぼまず、去るものは追わず』と言っておられた。煙洲会はそのお言葉の通りに、集りたい人が集って毎月一回の会を持ち、こうして絶えることなく続いている。こんな会はおそらく他には無いのではないか。」と言っておられたが、私も全く同感です。

そしてまた菅さんは、「煙洲会がこのように永く続いているのは、歴代の幹事がいずれも名幹事で、献身的な努力をして下さるからだ。」とも言われた。この点についてもまた全く同感です。

前の幹事さんの時代には出席していなかったので、多分菅さんの言われた通りであつたろうと想像するだけであるが、現在の幹事の村松氏については（後輩が先輩のことを言うのはまずいのかも知れないが、あえて言わしていただく）、ずばり、これだけの名幹事は次にはなかなか出てこないのではないかと思います。

その煙洲会が五百回を数えるに至ったことは全く感慨深いことです。五百回といえは約半世

紀、普通ならもうとっくにつぶれてしまい、完全に過去のものになってしまっていて当然ですから、この会は全くすごいと言わざるを得ません。

煙洲会のメンバーが高齢化してきて、このままでは中年層、若年層の入会を期待するのがむずかしいので、行く行くは動きがとれなくなり、会が消滅してしまうおそれがあると心配する声が聞かれます。

確かにその心配は無いとは言えません。しかし今のところ会の雰囲気は良いのだし、去って行く人もあるが、入って来る人もありで、出席者の人数としては、むしろ多少増え気味であると思われるでしょう。そこで比較的若い人にもPRして、会の雰囲気合いそうな人には出席していただくよう皆で心掛けるようにする程度で良いのではないのでしょうか。そうした気持が皆にあれば、何かのチャンスに新入会してくる人もあるでしょうから。

しかし問題は幹事です。煙洲会としての幹事の内容は、勿論それにふさわしい立派な人物であり、公の事に労をおしまず、その上、事務能力が抜群であらねばならないことは言うまでもないことです。

それ以上にむずかしい条件があります。それは村松氏のように、オーナーの社長などであって、自分の時間を比較的自由に作ることができ、その上、自社の社員に絶対の信頼を得ており、例えば電話が会員からかかってきても、気持よく社長に取りついでくれるなども大切な条件なの

です。

煙洲会の会員ともなると、多忙な人が多く、毎月の例会に電話で出欠の返事や訂正をする人も多いでしょう。またスピーカーへの依頼や連絡などの重要な電話も多いと思われます。村松氏はこの条件においても完璧です。このように無理な条件を兼ねそなえる人はまず居ないのではないかと考えられます。

村松氏は母校電気化学科の同窓会である横浜電化材化会の常任幹事を永くやっておられました。特に母校が弘明寺から常盤台に移転統合する前後の大学（特に電気化学科）が大きく揺れ動き、同窓会の運営が大変むずかしい時期に、大いに才腕を振るわれましたが、一応の方向を見とどけられた上で、横浜電化材化会の方は役員を辞任されることを、同会の常任幹事会で最近言明されました。これによって条件を整えられ、煙洲会の方は引続き担当していこうとのご決意をなされたものと私は理解しています。ご自身の会社の方の発展を期される重大な時期でもありますので、真に的確な判断をなされたものだと思いますが、藤森会長始め役員の要請により副会長をお引受け願った事は同氏には甚だ不本意なことだったかも知れません。

村松氏は、ご自分の後任の煙洲会幹事はなかなか出てこない（条件がむずかしいから）のではないかということを充分ご存知なのでありましょうから、電化材化会の方の仕事を切ってその荷を軽くし、煙洲会やその他にそなえようとされたのであろうと思います。

私が煙洲会に少しでも協力することができたものがあつたとすれば、それは臨時のスピーカーを数回つとめさせていただいたことぐらいです。煙洲会のように毎月一回の例会を確実にこなして、その都度一人のスピーカーだけで、食事の時間含みとはいえ、約二時間を何とかもたして行くには、スピーカー選びが非常に大変な仕事になると思われます。幹事をお願いしても、なかなかスピーカーが得られないこともあるでしょうし、また予定していたスピーカーが急に都合がつかなくなることもあるでしょう。

そこで会員は自ら話題提供やスピーカーを推せんするなどして協力したら、幹事はぜひ分助かるのではないでしょうか。

私は臨時とは言え、何回かのスピーチをさせてもらった現在では、話題切れといったところで、そのうちにまた何か種を仕入れて、つなぎぐらいいはさせていただけるようにしたいと思っています。

煙洲会には何か言葉では言いつくせないようなスバラシイ味があります。だからこそ毎回四十名を越す出席者があるのです。このような雰囲気は無理をして頑張ったところで急に出てくるものではありません。無理をしてどこかを変えようと頑張れば、別の良い点は出てくるかも知れませんが、今の良さの一部は無くなってしまうような気がします。

そこで私は、今のところはそのまま煙洲会が続いて行くことを願わずにはいられません。村松

氏には健康に充分注意されて、今迄通り頑張っていたきたいと思えます。

もう一つ、新しい提案なのですが、五百回を越えたのを期に、煙洲先生の教育者としての偉大さを具体的に復習してみる機会を持つては如何でしょうか。

「煙洲先生は偉かった!」、「煙洲先生は立派な教育者であった!」ということは何回も聞いているのですが、どこがどのように偉かったのかという具体的なことになる、煙洲先生ご在任の時代の人にしか判らず、次第に消えていってしまうのではもったいないことです。

この辺で、煙洲先生の教育者像を具体的にハッキリさせる機会を何回か持ち、後輩に伝えてほしいと切望します。

昨今、教育改革・教育問題が大きく取り上げられている折でもあるので、煙洲鈴木達治像を明確にすることは、真の教育者とは何か? に答えることにもつながり、今日的な意味のあることだと思われるからです。